

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第149集

高 屋 遺 跡

2021

岐阜県文化財保護センター

たか
高

や
屋

い
遺

せき
跡

2021

岐阜県文化財保護センター



古代前半 出土遺物集合写真

序

瑞浪市は、岐阜県南東部に位置します。市の中央部を北東から南西に流れる土岐川に沿って国道 19 号や中央自動車道・JR 中央本線が通じており、東は恵那市・中津川市を経て松本方面へ、西は土岐市・多治見市を経て名古屋方面へ交通が開けています。また、当地域の周辺は、古来より東山道、中山道、下街道などの街道が発達しており、東濃地域における交通の要所であったことを窺うことができます。

このたび、国土交通省中部地方整備局多治見砂防国道事務所による国道 19 号瑞浪恵那道路事業に伴い、瑞浪市土岐町にある高屋遺跡の発掘調査を平成 30 年度に実施しました。高屋遺跡は、縄文時代、古墳時代後期から中世にかけての長い時代にわたる遺跡です。

今回の調査では、掘立柱建物 4 棟のほか、柱穴、耕作痕跡、溝、土坑などを確認しました。遺物は須恵器、土師器を中心に灰釉陶器や山茶碗、中・近世陶磁器が出土し、須恵器の中には墨書土器も確認しました。岐阜県の古墳時代後期から中世にかけての人々の生活様式等を検証する上で、貴重な資料を得ることができたと考えています。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、瑞浪市教育委員会、地元地区の皆様へ深く感謝申し上げます。

令和 3 年 3 月

岐阜県文化財保護センター
所長 森 勝利

例言

- 1 本書は、岐阜県瑞浪市土岐町に所在する高屋遺跡（岐阜県遺跡番号 21208-10134）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、国道 19 号瑞浪恵那道路事業に伴うもので、国土交通省中部地方整備局多治見砂防国道事務所から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所林正憲氏の指導のもとに、発掘作業は平成 30 年度に、整理等作業は令和元年度に実施した。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第 1 章第 2 節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆及び編集は中野真吾が行った。ただし、第 3 章は杉山忠弘の所見をもとに中野が行った。
- 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影などの支援業務と、出土遺物の洗浄・注記は、株式会社イビソクに委託して行った。整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、株式会社ユニオンに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 放射性炭素年代測定（AMS法）は株式会社パレオ・ラボ、生材の樹種同定は株式会社イビソクに委託して行い、第 4 章に掲載した。第 4 章第 1 節は中野が執筆した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。
井川祥子、近藤大典、砂田普司、藤澤良祐、渡邊博人、瑞浪市教育委員会
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用する。
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目次

序

例言

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	4

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8

第3章 調査の成果

第1節 基本層序	12
第2節 遺構概要	13
第3節 遺物概要	15
第4節 古代以前の遺構・遺物	18
第5節 中世の遺構・遺物	45
第6節 遺構外出土遺物	52
発掘区全域図・分割図、遺構一覧表、遺物観察表	

第4章 自然科学分析

第1節 分析の概要と結果	78
第2節 出土木製品の放射性炭素年代測定	79
第3節 出土木製品の樹種同定	83

第5章 総括

引用・参考文献	93
---------	----

写真図版

報告書抄録

挿図目次

図 1	高屋遺跡位置図	1	図 29	SK107・108 遺構図、 SK108 出土遺物実測図	43
図 2	試掘・確認調査坑（遺跡該当範囲内）、 本発掘調査範囲	2	図 30	SK109 遺構図、出土遺物実測図	44
図 3	発掘区地区割図	4	図 31	SN 1・2 遺構図	46
図 4	遺跡周辺の地形分類図	7	図 32	SN 3・4 遺構図	47
図 5	周辺遺跡位置図	10	図 33	SN 2・3 出土遺物実測図	48
図 6	Ⅲ層・Ⅳ層の堆積範囲	12	図 34	SD14・15 遺構図	49
図 7	基本層序模式図	12	図 35	SK36 遺構図	50
図 8	土坑分類模式図	14	図 36	SK111 遺構図、出土遺物実測図	51
図 9	SB 1 遺構図（1）	18	図 37	Ⅱ層・Ⅲ b 層出土遺物実測図（1）	53
図 10	SB 1 遺構図（2）	19	図 38	Ⅱ層・Ⅲ b 層出土遺物実測図（2）	54
図 11	SB 2 遺構図（1）	21	図 39	Ⅱ層・Ⅲ b 層出土遺物実測図（3）	55
図 12	SB 2 遺構図（2）、出土遺物実測図	22	図 40	Ⅱ層・Ⅲ b 層出土遺物実測図（4）	56
図 13	SB 3 遺構図（1）	23	図 41	Ⅲ a 層・Ⅰ層等出土遺物実測図	57
図 14	SB 3 遺構図（2）、出土遺物実測図	24	図 42	発掘区全域図 割付図	58
図 15	SB 4 遺構図（1）	25	図 43	発掘区全域図 分割図（1）	59
図 16	SB 4 遺構図（2）、出土遺物実測図	26	図 44	発掘区全域図 分割図（2）	60
図 17	SP 1・2・3 遺構図、 SP 1 出土遺物実測図	28	図 45	発掘区全域図 分割図（3）	61
図 18	SP 4・5・6 遺構図、 SP 4・5 出土遺物実測図	29	図 46	発掘区全域図 分割図（4）	62
図 19	SD 8 遺構図（1）	31	図 47	発掘区全域図 分割図（5）	63
図 20	SD 8 遺構図（2）	32	図 48	発掘区全域図 分割図（6）	64
図 21	SD 8 出土遺物実測図	34	図 49	発掘区全域図 分割図（7）	65
図 22	SD 7・9 遺構図、SD 7 出土遺物実測図	35	図 50	発掘区全域図 分割図（8）	66
図 23	SD 9 出土遺物実測図（1）	36	図 51	発掘区全域図 分割図（9）	67
図 24	SD 9 出土遺物実測図（2）	37	図 52	発掘区全域図 分割図（10）	68
図 25	SD10・11 遺構図	38	図 53	発掘区全域図 分割図（11）	69
図 26	SK42・61・62 遺構図、 SK42・62 出土遺物実測図	40	図 54	暦年校正結果	82
図 27	SK68・81 遺構図、出土遺物実測図	41	図 55	7 世紀後半～8 世紀後半の主な遺構配置図 とその方位	87
図 28	SK88・93 遺構図、SK88 出土遺物実測図	42	図 56	9 世紀頃の主な遺構配置図とその方位	89
			図 57	中世の主な遺構配置図とその方位	90
			図 58	近世に堆積したⅢ a 層と盛土	91

- SN 1 完掘状況 (北西から)
- SN 2 - D 1 ~ D 3 完掘状況 (北東から)
- SN 2 - D 4 完掘状況 (北東から)
- SN 3 - D 1 ~ D 3・D 6 完掘状況 (北西から)
- 図版 6 遺構 (6)
- SD 8 完掘状況 (東から)
- SD 8 土層断面 (西から)
- SD 8 横輪出土状況 (南東から)
- SD 8 遺物出土状況 (南東から)
- SD 7 完掘状況 (南東から)
- SD 9 土層断面 (北東から)
- SD 9 遺物出土状況 (南東から)
- 図版 7 遺構 (7)
- SD 9 完掘状況 (北東から)
- SK 42 完掘状況 (南から)
- SK 61 完掘状況 (北東から)
- SK 62 遺物出土状況 (北東から)
- SK 93 遺物出土状況 (南から)
- SK 108 遺物出土状況 (北西から)
- SK 109 遺物出土状況 (南西から)
- 図版 8 出土遺物 (1)
- SP 4 出土土器
- SD 8 出土土器
- 図版 9 出土遺物 (2)
- SD 9 出土土器
- SK 42 出土土器
- SK 出土土器
- 図版 10 出土遺物 (3)
- SK 81 出土土器
- SK 88 出土石器
- SN・SD・SK 出土土器
- Ⅱ層・Ⅲb層出土土器 (1)
- 図版 11 出土遺物 (4)
- Ⅱ層・Ⅲb層出土土器 (2)
- 図版 12 出土遺物 (5)
- Ⅱ層・Ⅲb層出土土器 (3)
- Ⅱ層・Ⅲb層出土土製品
- 図版 13 出土遺物 (6)
- Ⅲa層出土土器
- I層等出土土器
- 図版 14 出土遺物 (7)
- SB・SP・SD 出土木製品

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

高屋遺跡は、平成21年度に瑞浪市教育委員会によって実施された遺跡分布調査の結果、石棒、須恵器、灰釉陶器、山茶碗などの遺物が採集されており、縄文・奈良・平安・中世の散布地とされている（瑞浪市教育委員会2014）。

高屋遺跡及びその周辺において、国道19号瑞浪恵那道路の建設と県営中山間地域総合整備事業に伴う瑞浪中部地区鶴城ほ場整備第3期他工事が計画された。国道19号瑞浪恵那道路は、瑞浪市土岐町から恵那市長島町の約12.5kmの区間で、高屋遺跡は瑞浪市側の接続地点にあたる。また、瑞浪市中部地区鶴城ほ場整備第3期他工事は、高屋遺跡及びその周辺約57,000㎡がその対象となった。この事業に伴う高屋遺跡の試掘・確認調査は、平成27年度から29年度にかけて瑞浪市教育委員会が実施した。上記事業の計画区域のうち、遺跡範囲内に16箇所（TP4からTP19）、また遺跡範囲外に3箇所（TP1からTP3）の計19箇所の試掘調査坑が設置された。遺跡の中央部から北東部に当たるTP4～6・8・10・12～14・16・19では、一部で遺物は出土したが明確な遺構は確認されなかった。

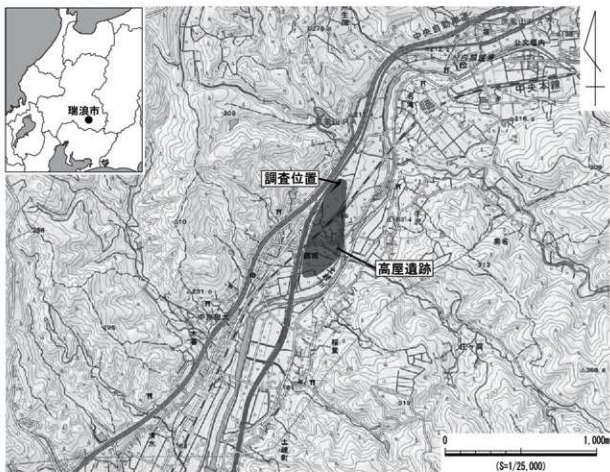


図1 高屋遺跡位置図（平成31年度国土院発行の2万5千分1電子地形図「瑞浪」を使用したものである）

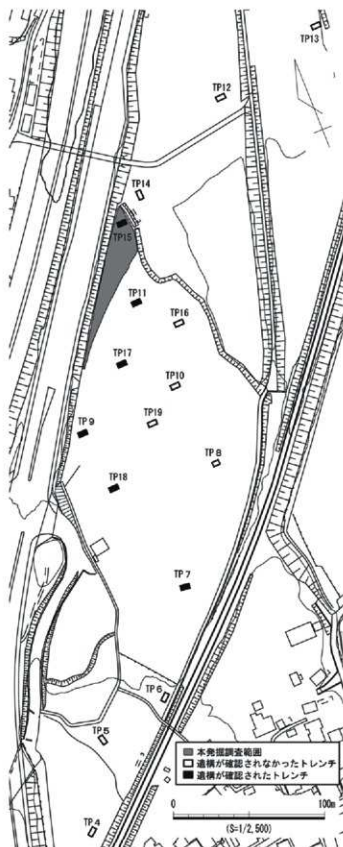


図2 試掘・確認調査坑（遺跡該当範囲内）、
本発掘調査範囲

一方、遺跡の北西部に当たる TP 7・9・11・15・17・18 では比較的良好的な状態で遺構が遺存していることが確認された。

以上の結果をもとに、平成 29 年 6 月 16 日に開催された平成 29 年度第 1 回岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会において、遺跡の取扱いについて検討した。当初、岐阜県東濃農林事務所は、ほ場整備事業について切土を行う予定であったが、保護措置が必要な範囲については盛土あるいは現況の標高値を変更しないほ場整備を実施する方針を示した。そのため、国道 19 号瑞浪恵那道路建設事業の予定地 1,196 m²について保護措置が必要であると結論づけた。

本工事については、文化財保護法第 94 条第 1 項の規定に基づき、多治見砂防国道事務所長から岐阜県教育委員会教育長（以下、「県教育長」という。）あて埋蔵文化財発掘通知（平成 30 年 3 月 26 日付け国部整多計第 50 号）が提出され、同条第 4 項の規定に基づき、県教育長は同事務所長あて発掘調査実施勧告（平成 30 年 4 月 2 日付け文伝第 84 号）を通知した。同事務所長は、発掘調査の実施を決定すると共に、その実施を県教育長に依頼した。それを受け当センターは調査着手後、文化財保護法第 99 条第 1 項の規定に基づく発掘調査の報告（平成 30 年 5 月 7 日付け文財セ第 63 号）を県教育長に提出した。

表1 試掘・確認調査結果（遺跡該当範囲内）

調査坑 No.	検出遺構 (基数)	出土遺物 (点数)					合計
		須恵器	灰軸 陶器	山茶碗	中近世 陶器	その他	
TP4	なし	1	0	4	3	0	8
TP5	なし	18	9	44	8	5	84
TP6	なし	2	5	4	1	3	15
TP7	土坑1	1	3	1	0	1	6
TP8	なし	0	0	0	0	0	0
TP9	柱穴5	7	0	0	0	1	8
TP10	なし	9	4	2	0	6	21
TP11	柱穴2	2	0	3	0	4	9
TP12	なし	0	0	0	0	0	0
TP13	なし	0	0	0	0	0	0
TP14	なし	5	0	1	3	0	9
TP15	柱穴3、土坑1	4	1	5	5	1	16
TP16	なし	16	4	2	0	0	22
TP17	柱穴3	5	3	0	0	2	10
TP18	柱穴4、土坑1	29	2	3	1	2	37
TP19	なし	2	0	0	1	0	3



写真1 調査着手前 発掘区（北東から）

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

発掘作業は、平成30年度に1,196㎡を実施した。世界測地系座標のX=67300、Y=9700をもとに100m×100mの大グリッドを設定し、発掘区の北側をA、南側をBとした。さらにその中に5m×5mの小グリッド（以下、「グリッド」という。）を設定し、南北列にA～Tのアルファベット、東西列に1～18のアラビア数字を付けて併用した（図3）。そのため、発掘区北東隅のグリッドはAH16、発掘区南西隅のグリッドはBF3となる。

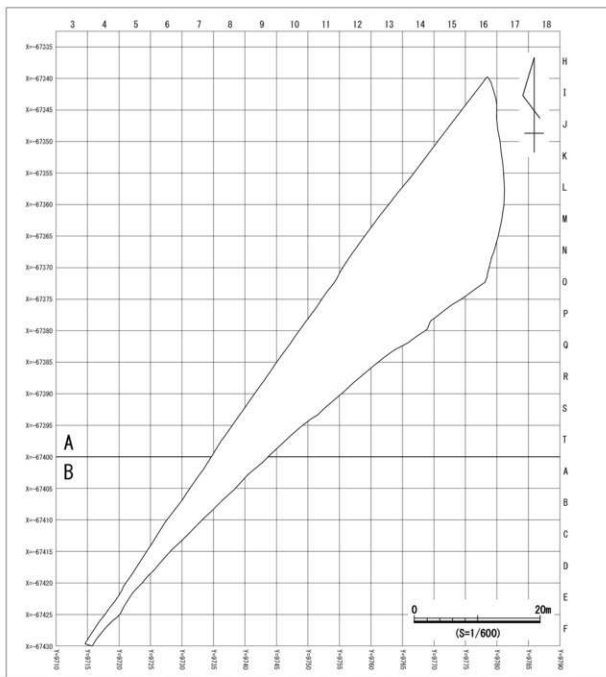


図3 発掘区地区割図

表土掘削は重機を用いて、遺物包含層掘削、遺構検出、遺構掘削はスコップ・草刈り鎌・移植ゴテなどを用いて人力で行った。遺構埋土は半截又は四分割して土層堆積状況を観察し、必要な記録を作成した後、に完掘した。

遺物包含層掘削及び遺構検出時に出土した遺物は、原則として層位、グリッド単位で取り上げた。また、遺構出土遺物は半截前後で取り上げ方法を変えた。すなわち、半截前は検出面から約5cm下までをa層、約5cm～10cmをb層、というように遺構内を概ね5cm単位の人工層位として取り上げ、半截後は分層した層位ごとに取り上げた。また、遺構との関係性が検討できる出土状況のものについては、出土位置を測定して取り上げた。

遺物には、取り上げ単位ごとに遺物ラベルを添付した。遺物ラベルには「遺跡番号（年度の西暦下二桁と遺跡記号TY）」「グリッド番号・遺構名及び掘削位置」「出土層位」「遺物番号」「出土年月日」「遺物種別」を記入し、この記録をもとに遺物台帳を作成した。検出した遺構は原則として検出順に通番を付し、遺構番号は「S001」というようにSと3桁の数字により表記した。この番号は、整理等作業時に遺構種別ごとに遺構種別番号を付けたが、今後の資料活用時に支障を来さぬよう、本書の遺構一覧表（表6～13）に調査番号として記載した。

遺構等の実測作業は、原則として平面図はデジタル測量、土層断面図は手測り測量にて、それぞれ実施した。図面の縮尺は、20分の1を基本として、実測対象に応じて適切な縮尺を選択した。

写真撮影では、35mmフィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、6×4.5cm判フィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、デジタルカメラを使用した。また、発掘区の完掘後に景観写真撮影を実施した。

2 調査の成果

発掘調査日誌から抜粋して、週ごとの調査経過を以下に記載する。

第1週（4/23～4/29）23日、耕作土及び床土の重機掘削開始。区画整備に伴い暗渠が基盤層まで掘り込まれている箇所が複数で見られる。

第2週（4/30～5/6）2日、重機掘削完了。グリッド杭打設完了。

第3週（5/7～5/13）8日、人力掘削作業開始。9日、発掘区東部では基盤層が東に向かって下がっていくことを確認。谷状地形を埋める土砂の堆積を確認。

第4週（5/14～5/20）14日、発掘区東部から遺構検出作業開始。18日、AM17グリッドでサブトレンチを掘り、谷状地形を埋める土砂の堆積状況を確認。

第5週（5/21～5/27）22日、遺構掘削作業開始。

第6週（5/28～6/3）28日、発掘区東部の谷状地形を埋める土砂の掘削開始。

第7週（6/4～6/10）遺物包含層掘削作業、遺構検出作業、遺構掘削作業を継続。

第8週（6/11～6/17）14日、A012グリッド周辺でSB1を検出。

第9週（6/18～6/24）18日、AQ10グリッド以西で黒色から黒褐色土の堆積を確認。AQ10～AQ11グリッドにかけて北西～南東方向と北東～南西方向に伸びるSN1、SN2を検出。21日、AP12グリッドに広がる礫の堆積の広がりを確認するため、AQ12～AQ13グリッドにかけて東西方向にサブトレンチを掘る。

6 第1章 調査の経過

第10週（6/25～7/1）26日、砂田普司氏（瑞浪市教育委員会）が来跡、27日、SB2を検出。SB2-P1で柱根（1）確認。

第11週（7/2～7/8）2日、AR11グリッドの遺物包含層から須恵器がまとまって出土。4～6日、台風に伴う雨のため作業中止。

第12週（7/9～7/15）9日、AR10グリッドの遺物包含層から須恵器がまとまって出土。岐阜県庁シンクタンク庁舎において、指導調査員の林正憲氏（奈良文化財研究所）から指導を受ける。13日、AS10～AS11にかけてSD9を検出。

第13週（7/16～7/22）17日、SB3を検出。SB2-P4で柱根（4）確認。18日、AT8グリッドで北西～南東方向に伸びるSN3を検出。19日、SD8から横樋（29）出土。SB2-P4で柱根（2）確認。

第14週（7/23～7/29）23日、SP1で柱根（7）確認。24日、BA7グリッドでSN4を検出。25日、SP5で柱根（10）確認。26日、SD8完掘。27日、SB4を検出。

第15週（7/30～8/5）31日、SB4-P1で柱根（5）、SB4-P4で柱根（6）確認。2日、遺構検出完了。

第16週（8/6～8/9）8日、ラジコンヘリによる景観写真撮影。人力掘削作業終了。

出土遺物の洗浄や注記等の一次整理作業は平成30年度に、遺物実測や挿図作成等の整理等作業は令和元年度に、それぞれ当センターにて実施した。整理等作業時には、令和2年2月4日に林正憲氏（奈良文化財研究所）に総括に関する指導を、令和元年10月31日に藤澤良祐氏（愛知学院大学教授）に中世遺物に関する指導を、令和元年11月5日に渡邊博人氏（元各務原市教育委員会）に須恵器に関する指導を、令和元年11月6日に近藤大典氏（岐阜県博物館）に墨書土器に関する指導を、令和元年11月7日に井川祥子氏（岐阜市教育委員会）に土師器に関する指導を受けた。なお、出土木製品の放射性炭素年代測定（AMS法）を平成30年度に、樹種同定及び保存処理を令和元年度に実施した。

3 調査体制

発掘作業調査及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長	野村幹也（平成30年度）、小林法良（令和元年度）
総務課長	加藤武裕（平成30年度・令和元年度）
調査課長	春日井恒（平成30年度・令和元年度）
調査担当係長	三輪晃三（平成30年度）、鷺見博史（令和元年度）
担当調査職員	杉山忠弘（平成30年度）、中野真吾（令和元年度）

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

当遺跡が所在する瑞浪市は岐阜県の南東部、木曾山脈の西端部に位置し、恵那山系の一部である東濃丘陵地帯が市の面積の約8割を占めている。東は屏風山794m、権現山595mなどの山塊を境にして恵那市に接し、西は丘陵で土岐市・多治見市と接している。また、南は山林地帯を境にして愛知県豊田市に接し、北は木曾川の渓谷を隔てて加茂郡八百津町に接している。市の中央部を北東から南西に流れる土岐川に沿って国道19号や中央自動車道・JR中央本線が通じており、東は恵那市・中津川市を経て松本方面へ、西は土岐市・多治見市を経て名古屋方面へ交通が開けている。当地域の周辺は、古代東山道や中世東山道、下街道などの街道があり、東濃地域において交通の要所であったことを窺うことができる。市の面積の約2割は、土岐川的作用による砂礫台地や谷底平野、氾濫平野にあたり、当遺跡は谷底平野上に位置する(図4)。当遺跡の標高は、遺跡南部で約178m、遺跡北部で約193mを測る。現在は、遺跡の中央部は住宅地として、北部及び南部は耕作地として利用されている。

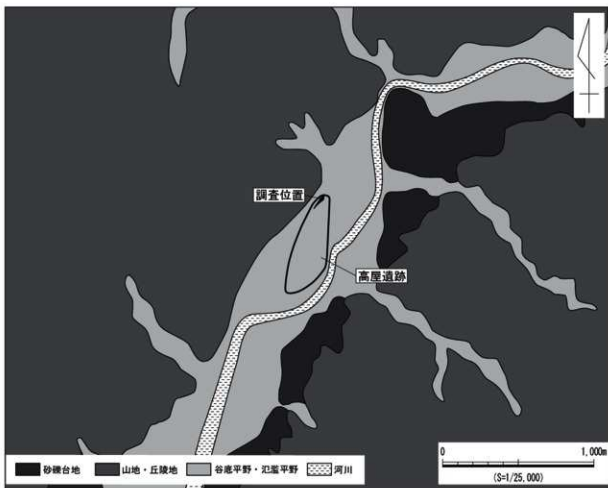


図4 遺跡周辺の地形分類図

(岐阜県企画部土地対策室 1983『岐阜県土地分類基本調査 恵那・中津川』(1/50,000)を基に作成)

第2節 歴史的環境

本節では各時期の主要な遺跡について、概要を時代順に記す¹⁾。なお、文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、図5及び表2と一致する。

縄文時代 土岐川沿いの河岸段丘上や台地上に多く点在する。土岐天徳遺跡(38)、名滝遺跡(18)、中切上屋遺跡(13)などがある。土岐天徳遺跡では石鏃、石斧、石匙等が出土し、縄文時代早期以降の遺跡とされる。名滝遺跡は、縄文時代前期以降の遺跡とされ、黒曜石製石鏃や大型の粗製石鏃が採取されている。

弥生時代 数少ない弥生時代の遺跡とされているのが益見遺跡(48)である。『瑞浪市史』(瑞浪市1974)によれば、昭和12(1937)年に弥生時代中期から後期ごろの弥生土器が出土している。

古墳時代 図5に挙げられている古墳及び横穴墓は、6世紀末～7世紀前半に築造されたものである。古墳はいずれも円墳で、洞田古墳群(6)や天徳古墳群(11)のように土岐川沿いの北部丘陵部を中心として約130基が築造されている。また、横穴墓は平地より10mから30m高い山腹地帯に多く点在し、約60基が築造されている。

古代 当地域は、『和名抄』によると土岐郡にあたる。土岐郡の名称は『濃飛两国通史』(岐阜県教育委員会1924)によれば、天武天皇5(676)年4月の条に初めて登場する。土岐郡は六郷からなり、郡家は土岐郷に置かれ、その位置は現在の瑞浪市小田町東部の台地上と推定されている。大宝2(702)年には、東山道土岐駅も土岐郷に設けられた。奈良時代の遺跡として公文垣内遺跡(16)や羽根南遺跡(32)があるが、少数の須恵器等を確認したのみである。平安時代の遺跡・史跡は、益見遺跡(48)、大久手遺跡(50)、三諦上人供養塔(37)などがある。三諦上人供養塔は、岐阜県史跡に指定されており、寺伝によれば三諦上人は弘仁3(812)年に供養塔付近の谷部にあった小堂を桜堂業師(瑞福山法妙寺)として創建したとされる。

中世 土岐川左岸の河岸段丘に位置する根竹遺跡(23)、下今尻遺跡(29)、羽根北遺跡(30)、笹山遺跡(31)、益見遺跡(48)からは、山茶碗や古瀬戸などが多数採集されている。また、笹山遺跡(31)では、12世紀後葉～13世紀前葉にかけて山間部に経塚が営まれ、12世紀末以降、山腹部に集石墓群が営まれていたことが判明している。桜堂遺跡(36)では、複数の平坦面や大規模な中世墓群、柱穴や土坑等の遺構が確認されており、古瀬戸、常滑産陶器、山茶碗などの中世陶磁器が多数出土している。部分的な調査のため建物の規模や配置などは明らかとなっていないが、12世紀後半～15世紀後半にかけて坊院として機能していたとみられる。さらに遺跡の南には、岐阜県史跡の土岐頼貞墓(45)がある。土岐頼貞は「室町時代初的美濃国守護に任ぜられ、(中略)一日市場神戸館を土岐氏宗家の本拠とした」²⁾。土岐氏は、頼貞以降、斎藤道三によって国を追われるまで、約200年間に渡り、美濃国守護を務めている。墓付近には光善寺なる寺院が所在したとされ、13世紀後半のものと思われる五輪塔や、暦2(1339)年の刻銘を有する宝篋印塔等の石塔群がみられる。鶴ヶ城跡(21)は岐阜県史跡であり、正中の変(1324)で戦死した土岐頼貞第10子である頼兼の居城として伝えられる。鶴ヶ城に隣接する中町遺跡(22)は、鶴ヶ城に関連した武家屋敷等が想定されたために調査が実施されたが、須恵器及び白瓷系陶器の小破片が出土したのみである。

近世 江戸時代の瑞浪市は、幕府の分知政策によって、直轄領、親藩尾州領、譜代大名領、旗本知行

地などを入れ組ませて分知された。当遺跡を含む一帯は、土岐郡神徳村として岩村藩の所領となった。江戸時代初頭には、新たな道筋である中山道が整備されたが、土岐川沿いを通る下街道もよく利用された。下街道は、現在の国道19号のルートと同一である。名古屋方面に向かう際に、尾根を通る中山道よりも下街道が約4里も距離が短いため、下街道の利用者が増加した。その結果、中山道の宿場から度々下街道通行禁止を求める訴えがなされ、結果的に「伊勢みち・善光寺みち」と呼称された信伊・一般旅人のみの街道となった。桜堂区には毎年3月15日に開催される涅槃會で用いられる「涅槃図」が所蔵されている。当図には、背面に寄進者の氏名、作者銘、制作年等の墨書銘がみられ、制作年は享保17(1732)年である。大仙奈遺跡(12)からは、近世土器茶碗が出土し、炭焼き窯跡の可能性が考えられる。

このように、縄文時代から遺跡は土岐川沿いの河岸段丘や台地上に多い。古墳時代は、多くの古墳や横穴墓が築造されたが、特に、横穴墓は県内にある横穴墓の約4割を占めており、当地域の一つの特徴といえる。古代には、小田町東部の台地上に郡家が設けられた他、古代から中世にかけての複数の遺跡や史跡、美濃守護の拠点地も小田町東部を含む瑞浪盆地付近にあることから、当遺跡の南側が長い間、当該地域の中心的地域として位置づいていたと推定される。近世には、土岐川沿いを通る下街道も旅人に利用された。下街道は当遺跡を東西に横切っているが、このルートは古墳時代後期には「古代東山道」として存在していた可能性があり(瑞浪市2008)、当遺跡と古代東山道・下街道と関連性が考えられる。

注

1) 各遺跡の記述は、以下の文献を参考とした。

瑞浪市1974『瑞浪市史』歴史編

岐阜県教育委員会1924『濃飛両国通史』

瑞浪市教育委員会1981『瑞浪市中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』

伊藤秋男1988「瑞浪市の古墳と古東山道」『瑞浪陶磁器資料館研究紀要』第4号、瑞浪市陶磁器資料館

瑞浪市2008『歴史の道 中山道保存整備事業報告書』

瑞浪市陶磁器資料館2012『薬師寺1200年展』

・図5及び表2は岐阜県教育委員会2007『改訂版 岐阜県 遺跡地図』を基に、新たな成果をふまえて作成したが、時代については発掘調査報告書の記載も参考にした。

2) 瑞浪市1974『瑞浪市史 歴史編』299・301頁

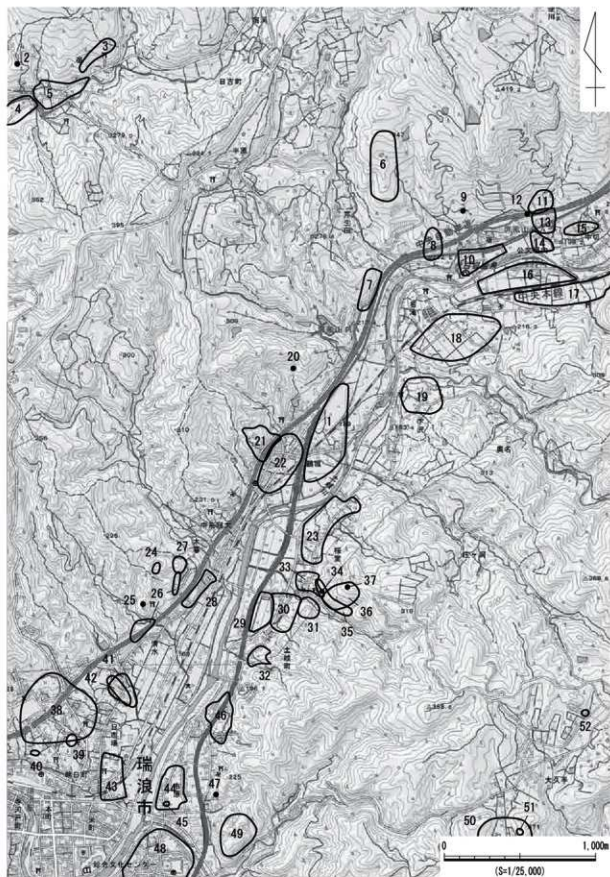


図5 周辺遺跡位置図（平成31年度国土地理院発行の2万5千分1電子地形図「瑞浪」を使用したものである）

表2 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代
1	高屋遺跡	集落跡 散布地	縄文・古墳 ～中世
2	蔵屋敷古墳	古墳	古墳
3	小洞古墳群	古墳	古墳
4	日吉宿遺跡	散布地	中世
5	日吉宿北遺跡	散布地	古墳
6	洞田古墳群	古墳	古墳
7	段古墳群	古墳	古墳
8	百田古墳群	古墳	古墳
9	岩倉古墳	古墳	古墳
10	釜戸宿遺跡	散布地	中世
11	天徳古墳群	古墳	古墳
12	大仙奈遺跡	不明	近世
13	中切上屋遺跡	散布地	縄文・中世
14	釜戸陣屋跡	城館跡	中世
15	中切町裏遺跡	散布地	縄文・中世
16	公文垣内遺跡	散布地	古代・中世
17	公文垣内南遺跡	散布地	中世
18	名滝遺跡	散布地	縄文・中世
19	土岐上平遺跡	散布地	中世
20	土岐頼兼墓	その他の墓	中世
21	鶴ヶ城跡	史跡	中世
22	中町遺跡	散布地	中世
23	根竹遺跡	散布地	中世
24	清水横穴墓群	横穴墓	古墳
25	大西横穴墓	横穴墓	古墳
26	清水古墳群	古墳	古墳
27	清水館跡	城館跡	中世
28	豆沢遺跡	散布地	中世
29	下今尻遺跡	散布地	中世
30	羽根北遺跡	散布地	中世
31	笹山遺跡	その他の墓・その 他の遺跡 (墓塚)	古代・中世
32	羽根南遺跡	散布地	古代・中世
33	桜堂薬師遺跡	寺社跡	中世・近世
34	桜堂洞1号古墳	古墳	古墳
35	桜堂洞横穴墓群	横穴墓	古墳
36	桜堂遺跡	寺社跡・その 他の墓	中世
37	三諦上人供養塔	史跡	平安
38	土岐天徳遺跡	散布地	縄文・中世
39	正源寺古墳群	古墳	古墳
40	水ノ木横穴墓群	横穴墓	古墳
41	虫塚遺跡	散布地	中世
42	虫塚古墳群	古墳	古墳
43	一口市場館跡	城館跡	中世
44	中島遺跡	散布地	中世
45	土岐頼貞墓	その他の墓	古代
46	平畑遺跡	散布地	中世
47	市原横穴墓	横穴墓	古墳
48	益見遺跡	散布地	縄文・古墳・中世
49	市原砦跡	城館跡	中世
50	大久手遺跡	散布地	縄文・古代
51	大久手稲志野墓跡	生産遺跡	古代
52	大久手古窯跡	生産遺跡	古代

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

発掘区の調査前の状況は耕作地であり、谷底平野に位置する。試掘・確認調査と発掘調査における結果に基づき、基本層序をI層からIV層に設定し、III層はa・bに、IV層はa～cに細分した(図6・7)。

I層 黒褐色・暗褐色の現況の耕作地に伴う耕作土・床土・畦畔等である。

II層 オリーブ黒色・黒褐色の粘質土で、近世から近代の旧耕作土・造成土である。東壁周辺では近世末期の陶磁器片が出土した。

III層 遺物包含層

III a層 発掘区東部の谷状地形に堆積する黒褐色・暗褐色土の遺物包含層である。土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗、中近世陶磁器等が出土した。灰釉陶器・山茶碗は発掘区全体をみても、特にこの層に多い。

III b層 黒褐色粘質土で、中世以前の遺物包含層である。削平されて残存していない場所もある。

IV層 基盤層

IV a層 黒色土で、発掘区中央部で確認した。その範囲は限定的であり、発掘区西壁の土層断面では皿状の堆積を成している。上面を遺構検出面とした。

IV b層 黒褐色・暗褐色・暗灰黄色・灰黄褐色の粘質土である。場所によっては削平されており、IV c層が露出している部分もある。IV a層の堆積が確認できない場所は、上面を遺構検出面とした。

IV c層 褐色砂質土である。IV a層・IV b層が確認できない場所では、上面を遺構検出面とした。



図6 III層・IV層の堆積範囲

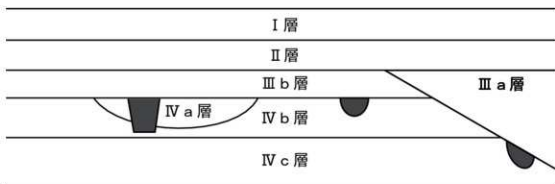


図7 基本層序模式図

第2節 遺構概要

1 概要

今回の調査で検出した遺構は、表3のとおりである。遺構の時期決定は、出土遺物や遺構の重複関係、埋土の類似性などから判断した。また、出土遺物が複数の時期にまたがる場合は原則として新しい時期を選択したが、出土状況や出土量も判断材料とした。

本報告書では、これらの遺構のうち、掘立柱建物や柱穴、耕作痕跡は、遺跡の性格を反映するものと考えられるものであることから、すべての遺構を報告した。ただし、溝や土坑は検出数が多いため、区画施設のように遺跡の性格を検討する上で重要な遺構や、一括性の高い遺物が出土した遺構、出土例の少ない遺物が出土した遺構などを抽出して報告した。なお、各遺構の説明文の「遺物出土状況」に記載した出土点数は、接合後破片数を示す。

表3 検出遺構一覧表

時代	SB	SP	SN	SD	SK	合計
合計	4	6	4	18	113	145

2 遺構略号

遺構の略号は以下のとおりである。

SB-掘立柱建物、SP-柱穴、SN-耕作痕跡、SD-溝、SK-土坑

なお、掘立柱建物に付属する柱穴は、「SB1-P2」のように付属する建物の番号を先頭に記し、続けてPに通し番号を付与した。また、耕作痕跡に付属する溝は、「SN2-D3」のように付属する耕作痕跡の番号を先頭に記し、続けてDに通し番号を付与した。

3 遺構の分類

今回の調査で確認した遺構はそれぞれ、形状と規模、構造から、掘立柱建物、柱穴、耕作痕跡、溝、土坑に分類した。各遺構の分類基準は以下のとおりである。

掘立柱建物（略号 SB）

柱穴が直線又はL字、コ字状に並び、建物と想定できるもの。

柱穴（略号 SP）

柱根が残存しているもの、土層で柱痕跡が確認できるもの、掘方から柱穴として考えられるもののうち、規則的な配列が確認できず、建物や柵として認定できなかったものや単独で存在するもの。

耕作痕跡（略号 SN）

鋤溝状の遺構（同形状及び同方向かつ連続してみられる溝）が平行して確認された範囲。

溝（略号 SD）

長軸が短軸の3倍以上を有する細長く掘り込まれたもの。

土坑（略号 SK）

上記以外で、人為的に掘り窪められた穴のうち、性格不明なもの。なお、遺物の出土状況や形状から、廃棄土坑の可能性が考えられるものも含む。

4 遺構一覧表

各遺構の位置や規模などの基礎的情報は、それぞれ種別ごとに作成した遺構一覧表に示した。遺構種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

検出面 基本層序に基づき、遺構を検出した面について、遺物包含層（Ⅲ b層）掘削後Ⅳ a層上面で検出した遺構は「Ⅳ a 上」とした。Ⅳ b層及びⅣ c層で検出した遺構は、その上に堆積した土層の基底面の遺構とし、「Ⅲ b基」とした。

平面形状 以下のとおり、形状（1～4）と、長軸長と短軸長の比（a～e）で表記した。

1－円形、2－方形、3－不定形、4－不明

a－1.2未満、b－1.5未満、c－2.0未満、d－2.0以上、e－不明

堆積 以下のとおり、堆積状況（a～f）と表記した。

a－単層、b－水平堆積、c－中央が窪む、d－片側が窪む、e－その他、f－柱痕跡

断面形状 以下のとおり、壁面状況（Ⅰ～Ⅱ）と、底面状況（A～D）で表記した。底面状況に段を有するものは、A～Dの後にaを付与した。

Ⅰ－壁が開く、Ⅱ－壁が直立に近い

A－底面が丸い、B－底面が平ら、C－底面が尖る、D－底面が不整形 a－段を有する

規模 () で示した数値は、残存値を示す。

重複関係 重複した遺構は、その遺構より新しい遺構を「新」、古い番号を「旧」の欄に示した。

出土遺物 以下のとおり、記号化して表記した。

H－弥生土器・土師器、P－須恵器、K－灰釉陶器、Y－山茶碗、T－陶磁器、D－土製品

S－石器、W－木製品

平面形状

1：円形



2：方形



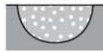
3：不定形



4：不明

堆積状況

a：単層



b：水平堆積



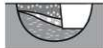
c：中央が窪む



d：片側が窪む



e：その他



f：柱痕跡



断面形状（壁面状況）

Ⅰ：壁が開く



Ⅱ：壁が直立に近い



断面形状（底面状況）

A：底面が丸い



B：底面が平ら



C：底面が尖る



D：底面が不整形



図8 土坑分類模式図

第3節 遺物概要

1 概要

今回の調査で出土した遺物は、6,698点である(表4)。土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、中世・近世・近代陶磁器などの土器類と、瓦、土製品、石器、木製品が出土した。この中で最も出土量が多いのは須恵器であり、質量割合は全体の68.9%である。また、遺構出土遺物の大半は土師器、須恵器、木製品であり、灰釉陶器、山茶碗、中世・近世・近代陶磁器などは数点であった。本報告書では、これらの遺物のうち、遺構の性格や時期などを検討する上で必要な遺物や、遺跡の性格を考える上で必要な遺物を中心に抽出して報告した。以下、各遺物の概要を記す。

表4 出土遺物一覧表

大別	種別	接合前 破片数	接合後 破片数	接合後 破片数 割合(%)	質量(g)	質量 割合(%)
土器類	土師器	2,772	2,673	43.2	10,125.4	17.3
	須恵器	2,634	2,309	37.3	40,216.3	68.9
	灰釉陶器	75	66	1.1	952.7	1.6
	山茶碗	727	702	11.3	3,469.5	5.9
	中世陶磁器	183	174	2.8	1,915.2	3.3
	近世陶磁器	257	245	4.0	1,645.7	2.8
	近代陶磁器	18	18	0.3	115.9	0.2
小計	6,666	6,187	100.0	58,440.7	100.0	
	瓦	2	2	—	137.5	—
	土製品	4	4	—	35.1	—
	石器	1	1	—	16.7	—
	木製品	25	25	—	—	—
	合計	6,698	6,219	—	58,630.0	—

(1) 土器類

土器の年代観や器種分類は既存の研究に従った¹⁾。ここでは種別ごとの分布や時期、器種などについて記す。

土師器

出土位置は発掘区全体に広がっている。小破片が多く、ほとんどが古代の土師器であり、甕や甔が中心である。包含層からは、4世紀中葉～6世紀前葉の短頸壺や、16世紀後半～17世紀前半の内耳鍋も出土した。

須恵器

出土位置は発掘区全体に広がっているものの、発掘区中央部から北部にかけて多い。出土遺物の中で最も多く、6世紀末～10世紀前半のものまで幅広く出土した。須恵器の約半数が坏類である。坏蓋は、口縁端部が残存し下方に屈曲させるものを坏蓋A、口縁部が欠損しているものは坏蓋と表記した。坏身は、無台坏と有台坏に分類し、高台が残存していないものについては坏身と表記した。無台坏はすべて蓋受けを持たないものであった。坏身のうちで分類可能なものの比率は、無台坏は約13%、有台坏は約87%であった。遺構出土遺物は7世紀～8世紀に集中している。SD8からは坏類の他にも横瓶や壺が、SD9からは盤、鉢、瓶類が出土した。産地は猿投産が大半であり、美濃須衛産や在地産と考えられるものも認められる。AT10グリッドからは鳴海32号窯式～折戸10号窯式の転用硯が、AT9グリッドからは美濃窯の大原2号窯式並行期の墨書土器1点が出土した。

灰釉陶器

出土位置は、発掘区北部にかけて多い。他の土器類と比較して出土点数は少なく、小片が多い。美濃窯のものが大半で、大原2号窯式～明和27号窯式までのものが認められ、ほとんどが碗である。猿投窯のものは、百代寺窯式の段皿が1点のみ確認できた。BA9グリッドからは丸石2号窯式の墨書土器1点が出土した。

山茶碗

出土位置は、発掘区北部にかけて多い。山茶碗の約9割は北部系であり、残りは南部系である。出土遺物の所属時期は、北部系のは丸石3号窯式～生田2号窯式までで、大畑大洞4号窯式以降が多くなる傾向がある。南部系のは尾張型第5型式～第6型式である。器種はほとんどが碗と小皿であり、片口鉢も数点認められる。

中近世陶磁器

出土位置は、発掘区北部にかけて多い。瀬戸・美濃産陶器の碗、皿、播鉢や近世の碗が認められるが、小片が多い。貿易陶磁器として、青磁と白磁の碗が1点ずつ出土した。

(2) 土製品

製塩土器3点が出土した。出土位置は、SD8で2点、AR10グリッドで1点である。

(3) 石器

微細な剥離痕を持つ剥片(MF)が1点出土した。出土位置はSK88である。

(4) 木製品

出土した木製品の器種・分類別の点数は表5のとおりである。横槌はSD8から、柱根はSB2～SB4、SP1、SP5から出土した。柱根7点について放射性炭素年代測定を行った。また、柱根7点と横槌1点について樹種同定を行った。それぞれの結果について、第4章に記載した。また、欠損範囲については斜線で表した。

表5 木製品一覧表

分類群	器種細分名	点数
工具	横槌	1
建築部材	柱根	12
その他	残材	12
合計		25

2 遺物観察表

遺物観察表は、それぞれ種別ごとに作成した。種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

出土位置 すべての遺物についてグリッドを表記した。また、遺構から出土した遺物には遺構名も表記した。

出土層位 遺構出土遺物の場合、土層分層前は埋土を深さ約5cmごとに区切り、上層から順に「a・b・cなど」の順に表記し、土層分層後はその土層番号(1・2・3など)を表記した。包含層出土遺物の場合、I層出土遺物は基本層序名(I)を、発掘区東部の谷状地形を埋める土砂からの出土遺物は基本層序名(III a)を表記した。II層、III b層については、発掘時はII層として取り上げていたため、II層で取り上げた遺物、III b層で取り上げた遺物は、共に基本層序名(II・III b)で表記した。

大きさ ()は復元長を示す。

注

1) 出土遺物の年代観や器種分類は、以下の文献を参考とした。

- 愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系
 愛知県史編さん委員会 2010『愛知県史』資料編4 考古4 飛鳥～平安
 愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系
 伊藤隆夫・山田昌久 2012『木の考古学 出土品木製品用材データベース』、海青社
 内堀信雄・井川祥子 1996「美濃における古代土師器煮炊具の様相」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕 そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
 斎藤孝正 1995「猿投、美濃、美濃須衛宗福年と他窯編年対比表」『須恵器修正図録 第3巻 東日本1 (ローマ)』、雄山閣
 鈴木正貴 1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕 そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
 太宰府市教育委員会 2000『太宰府市の文化財 第49集 大宰府条坊跡 XV-陶磁器分類編-』
 早野浩二 2003「東海・中部地方の土器」『考古資料大観 第3巻 弥生・古墳時代 土器3 (ローマ)』、小学館
 藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター
 山内伸浩 2008「美濃地域における灰軸陶器・山茶碗生産の一様相一窯の分布とその変遷からの視点-」『日本考古学協会 2008年度愛知大会研究発表資料集』、日本考古学協会 2008年度愛知大会実行委員会
 横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4、九州歴史資料館
 渡邊博人 1984『美濃須衛宗福窯跡群資料調査報告書』、各務原市教育委員会
 渡邊博人 1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相―蓋環の型式設定とその編年試案-」『美濃の考古学』創刊号、「美濃の考古学」刊行会

第4節 古代以前の遺構・遺物

1 掘立柱建物

SB1 (図9・10)

検出状況 A012~A012 グリッド、Ⅲb層基底面で検出した。P1、P2、P5の平面形は明瞭で、P3、P4の平面形は不明瞭であった。P3はSK30の坑底で検出した。P4はSK31の掘削時に検出したが、土層観察から本遺構が新しいことを確認した。

規模・形状 梁行方位は $N-38^{\circ}-E$ で、SB2と似る。5基の柱穴がコ字状に配置された状態を確認した。P1とP5の中間に柱穴が確認されなかったことから、本遺構は側柱建物であった可能性が考

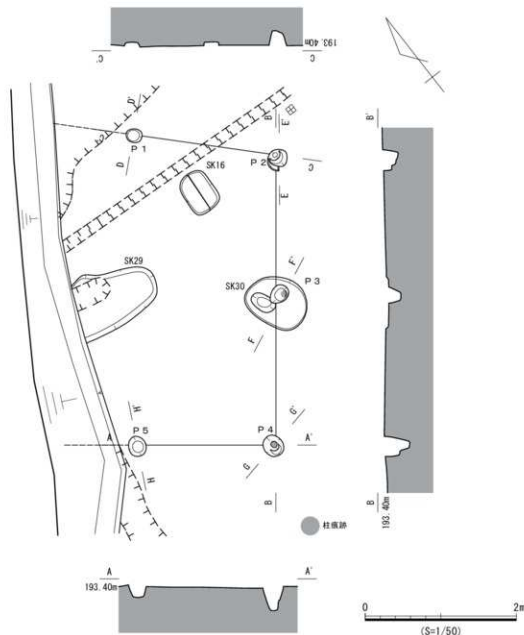


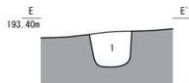
図9 SB1遺構図(1)

P 1



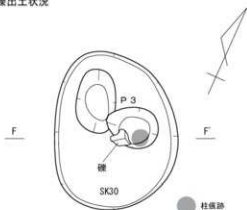
- 1 10YK3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり
径1cmの車角礫を15含む
無機な炭化物・酸化鉄・マンガンを少量含む

P 2

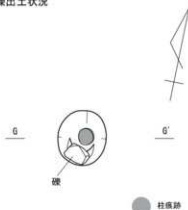


- 1 10YK3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の車角礫を15含む
10YK3/6 黄褐色粘質シルトブロックを15含む

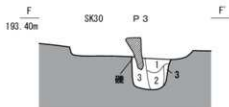
P 3 様出土状況



P 4 様出土状況

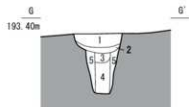


P 3



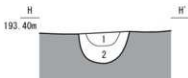
- 1 10YK3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性なし
10YK6/4 にぶい黄褐色土ブロックを10%含む
2 10YK3/2 黒褐色粘質土 ややしまる 粘性ややあり
炭化物を少量含む
3 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 しまる
径17cm×11cm大の車角礫を1個含む
10YK6/4 にぶい黄褐色土ブロックを7%含む

P 4



- 1 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 しまりなし 粘性あり
径4cm程度の車角礫を1個含む
2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 しまりなし 粘性あり
3 10YK3/1 黒褐色粘質土 ややしまる 粘性ややあり 柱状跡
4 10YK2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり 柱状跡
5 10YK3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径8~10cm大の車角礫を1個含む
10YK6/4 にぶい黄褐色土ブロックを10%含む 柱状方礫土

P 5



- 1 10YK3/1 黒褐色粘質土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着
2 10YK2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
10YK6/4 にぶい黄褐色土ブロックを10%含む
炭化物を少量含む

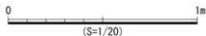


図 10 SB 1 遺構図 (2)

えられる。検出できた範囲で、梁行2間(3.80m、柱間2.00m-1.80m)、桁行1間以上(1.80m)であり、北側の桁行が外側にやや開く。桁行方向は、北西側の発掘区外に続くため、平面形は不明である。

柱穴 5基の柱穴から成る。平面形は円形又は楕円形で、深さはP1のみ0.05mと極端に浅く、他の4基の深さは0.16m~0.32mである。底面は、P1~P4は平坦であり、P5は丸みを帯びる。壁面の傾斜は、P1~P3、P5はほぼ垂直に立ち上がり、P4はやや急である。P3、P4で、柱痕跡を確認した。また、P3の3層で直立した礎を確認した。礎は上面と側面2面の計3面が直角に交わるように整形されており、柱を固定するために使用されたと考えられる。P4の2層では、整形したと考えられる礎を確認した。当初は、P3と同様に柱を固定するために使用されたと考えたが、1層~2層の掘り込みの状況から、別遺構であった可能性がある。

遺物出土状況 P1~P4からの遺物の出土はなかった。P5の埋土中から土師器1点が出土した。

出土遺物 出土遺物は小片であり、図示できるものはなかった。

時期 SB2の梁行方位が、本遺構の梁行方位と似ることから、本遺構の時期は8世紀代と考える。

SB2 (図11・12)

検出状況 AQ10~AP11 グリッド、IV a層上面で検出した。P1の平面形は、III b層と遺構埋土が類似していたため、不明瞭であった。P2、P3の平面形は明瞭であった。P4は、SN2-D2の底面で検出し、平面形は明瞭であった。SN1、SN2と重複するが、本遺構が古い。

規模・形状 梁行方位はN-31°-Eで、向かい合う2辺を確認できなかったが、SB1と梁行方位や柱穴列の間隔が似ていることから、掘立柱建物と考える。検出できた範囲で、梁行3間(5.10m、柱間1.70m-1.70m-1.70m)である。桁行方向は、北西側の発掘区外に続くものと考えられ、平面形は不明である。

柱穴 4基の柱穴から成る。平面形は円形又は楕円形で、深さは0.37m~0.43mである。底面は、P1~P3は丸みを帯び、P4は平坦である。壁面の傾斜は、P1、P2は急で、P3、P4はほぼ垂直に立ち上がる。いずれの柱穴からも明確な柱痕跡を確認した。P1、P4には柱根が残存していた。

遺物出土状況 P1では柱根が直立した状態で残存していた。P3の埋土中から土師器1点が出土した。P4では柱根がやや南に傾いた状態で残存していた。P2からの遺物の出土はなかった。

出土遺物 1、2は志持丸木材の柱根である。樹種はカヤである。1は長さ28.9cm、上部径7.6cmで、2は長さ35.0cm、上部径12.1cmである。側面は共に腐敗しており、加工痕は確認できない。底面は、共に刃先痕、刃端痕、区画稜線が認められる。放射性炭素年代測定を実施したところ、1は7世紀中頃~8世紀後半、2は7世紀中頃~8世紀後半に相当する年代が測定された(第4章第1節)。

時期 放射性炭素年代測定の結果から、本遺構の時期は8世紀代と考える。

SB3 (図13・14)

検出状況 AT10~AS10 グリッド、III b層底面で検出した。柱穴の平面形は、いずれも明瞭であった。

規模・形状 梁行方位はN-48°-Eで、SB4の梁行方位とほぼ一致する。向かい合う2辺を確認できなかったが、SB2の柱穴列の間隔が似ていることから、掘立柱建物と考える。検出できた範囲で、梁行3間(5.00m、柱間1.80m-1.80m-1.40m)で、P3~P4の間隔がやや狭い。桁行方向は、南東側の発掘区外に続くものと考えられ、平面形は不明である。

柱穴 4基の柱穴から成る。平面形はいずれも円形で、深さは0.30m～0.56mである。底面は、いずれも平坦である。壁面の傾斜は、いずれもほぼ垂直に立ち上がる。P1～P3で明確な柱痕跡を、P3では根石を確認した。

遺物出土状況 P2では、柱根が上部を南西方向に大きく傾けた状態で残存していた。また、P1の埋土中から土師器4点、須恵器1点、P2の埋土中から土師器4点、須恵器1点、柱根3点、P3の埋土中から土師器3点、須恵器1点、P4の埋土中から土師器7点が散在して出土した。

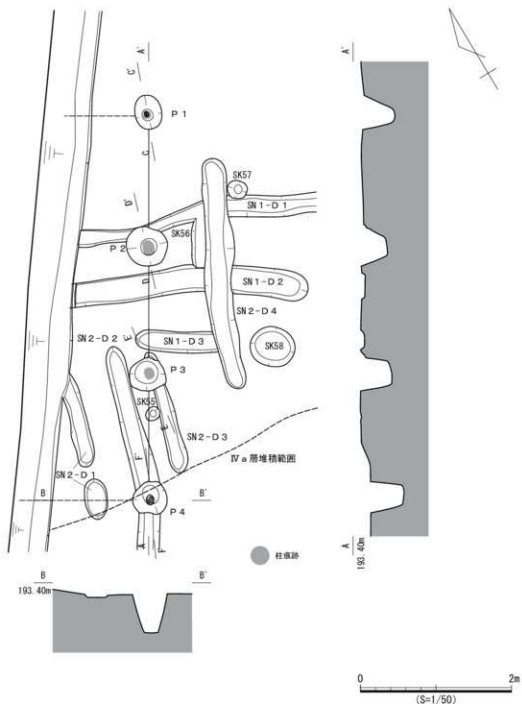
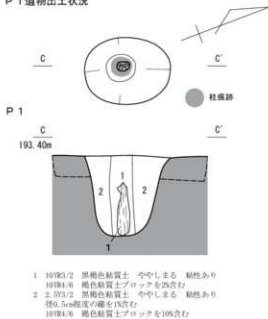
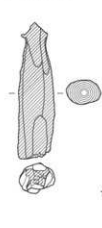


図 11 SB2 遺構図 (1)

P 1 遺物出土状況



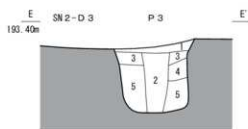
P 1 出土遺物



P 4 出土遺物

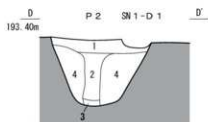


P 3



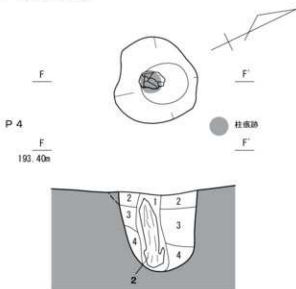
- 10YR2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性ややあり
- 10YR3/3 暗褐色土ブロック+10YR4/6 褐色土ブロックを1%含む
- 10YR2/1 黒褐色粘質土 ややしまる 粘性ややあり
- 2.5Y2/6 褐色粘質土ブロックを2%含む
- 10YR2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性ややあり
- 10YR4/3 に近い黄褐色土ブロックを10%含む
- 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 ややしまる 粘性ややあり
- 10YR1.7/1 灰色粘質土ブロックを3%含む 数分沈着
- 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 10YR2/1 黒色粘質土ブロックを1~2%含む 数分沈着

P 2



- 10YR2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
10Y4/6 褐色粘質土ブロックを1~2%含む 7.5YR3/4 暗褐色土ブロックを1~2%含む
- 10YR2/2 黒褐色粘質土 ややしまる 粘性あり
10YR4/4 褐色粘質土ブロックを3%含む
- 10YR4/1 褐色粘質土 ややしまる 粘性あり
5Y2/1 黒色粘質土ブロックを少量含む
- 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 ややしまる 粘性あり
10YR2/1 黒色粘質土+2.5YR4/6 褐色粘質土を両方に30%含む

P 4 遺物出土状況



- 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 10YR4/6 褐色粘質土ブロックを1%含む
- 10YR3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
10YR4/6 褐色粘質土ブロックを2%含む
- 10YR4/1 褐色粘質土 ややしまる 粘性ややあり
- 10YR3/2 暗褐色土ブロックを2%含む
- 10YR3/1 黒褐色粘質土 しまりなし 粘性ややあり



図 12 SB2遺構図(2)、出土遺物実測図

出土遺物 3は須恵器で、岩崎25号窯式～鳴海32号窯式の有台坏である。4は芯持丸木材の柱根である。樹種はクリである。長さ33.0cm、上部径13.9cmである。腐敗が著しく、側面、底面ともに加工痕は不明である。放射性炭素年代測定を実施したところ、7世紀中頃～8世紀後半に相当する年代が測定された（第4章第1節）。

時期 出土遺物の型式や放射性炭素年代測定の結果から、本遺構の時期は8世紀第2四半期～8世紀後半頃と考える。

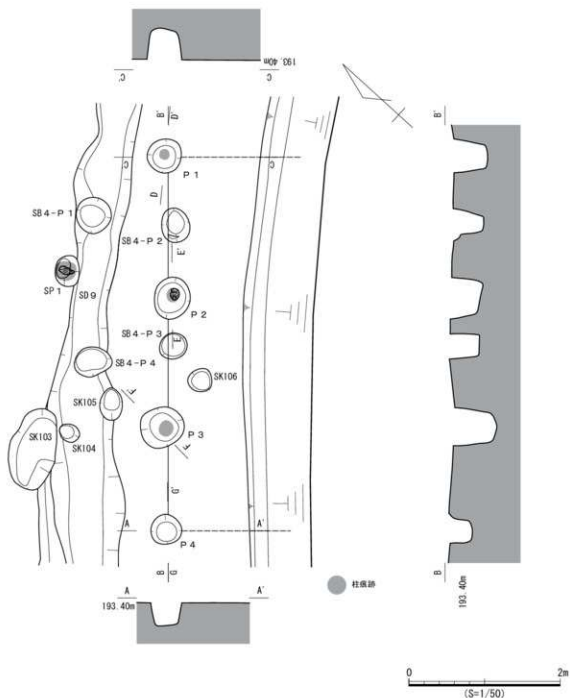
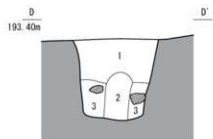


図13 SB3遺構図(1)

P 1



- 1 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 ややしまる 粘性あり
径0.5m程度の礎を少量含む
- 10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック・7.5YR3/4
暗褐色土ブロックを30%含む
炭化物を少量含む
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質土 ややしまる 粘性あり
10Y5/2 灰黄褐色粘土ブロック・7.5YR3/4
暗褐色土ブロックを5%含む
- 3 10YR2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
径10cm程度の茶目礎を1個含む

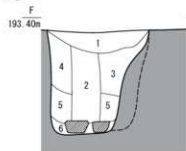
P 1 出土遺物



P 3 礎出土状況

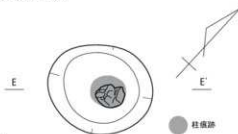


P 3

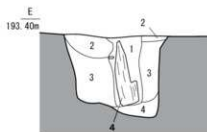


- 1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ややしまる 粘性あり
径3cm程度の礎を1個含む 10YR4/4 褐色土ブロックを30%含む
炭化物・土器片を少量含む
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまる 粘性あり
5Y4/1 灰色粘土ブロック・7.5YR5/6 暗褐色土ブロックを5~7%含む
- 3 10YR2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
5Y4/1 灰色粘土ブロックを1~2%含む
- 4 10YR2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
7.5YR4/4 褐色粘質土ブロックを1~2%含む
- 5 10YR2/1 黒色粘質土 しまりなし 粘性あり
- 6 5Y4/1 灰色粘質土 しまりなし 粘性なし
径3cm以下の砂礫で構成される 礎石を含む

P 2 遺物出土状況

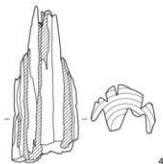


P 2

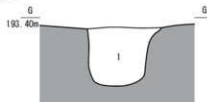


- 1 2.5Y2/1 黒色粘質土 しまりなし 粘性あり
- 2 10YR2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 10YR4/4 褐色粘質土ブロック・5Y6/1 灰色粘土ブロックを30%含む
- 3 10YR1.7/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 4 7.5Y4/1 灰色粘質土 ややしまる 粘性あり
径3cm程度の礎を少量含む

P 2 出土遺物



P 4



- 1 10YR1.7/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
7.5YR4/6 褐色土ブロックを15~25%含む



図14 S83遺構図(2)、出土遺物実測図

SB4 (図15・16)

検出状況 ASI0 グリッド、III b層基底面で検出した。柱穴の平面形は、いずれも明瞭であった。P1、P4は、SD9底面で検出した。SD9の重複関係から、本遺構が古い。

規模・形状 梁行方位はN-46°-Eで、SB3の梁行方位とほぼ一致する。検出できた範囲で、梁行1間(西側1.90m、東側1.70m)、桁行1間(1.10m)である。桁行は南東側の発掘区外に続くと考えられ、平面形は不明である。

柱穴 4基の柱穴から成る。平面形は円形又は楕円形で、深さは0.32m~0.46mである。底面は、いずれも平坦である。壁面の傾斜は、P1はやや急であり、P2~P4はほぼ垂直に立ち上がる。P1、P2、P4で、明確な柱痕跡を確認した。

遺物出土状況 P1とP4では、柱根が直立した状態で残存していた。また、P1の埋土中から土師器3点が散在して出土した。P3の2層から土師器1点が出土した。P2からの遺物の出土はなかった。

出土遺物 5、6は芯持丸木材の柱根である。樹種はクリである。5は長さ41.5cm、上部径12.3cmで、6は長さ40.3cm、上部径13.2cmである。共に腐敗が著しく、5の底面にわずかに区画稜線が確認できるだけで、それ以外の加工痕は不明である。放射性炭素年代測定を実施したところ、共に7世紀後半~8世紀後半に相当する年代が測定された(第4章第1節)。

時期 放射性炭素年代測定の結果から、本遺構の時期は7世紀後半~8世紀後半頃と考える。

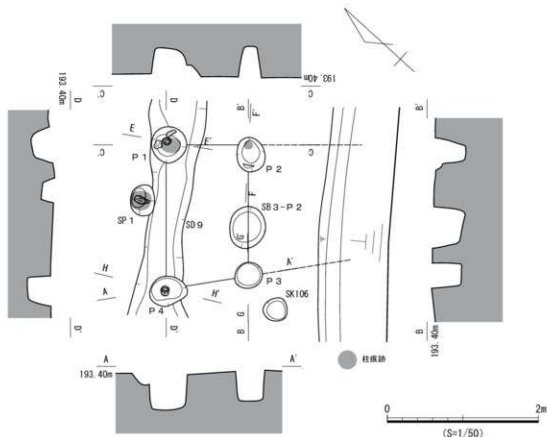
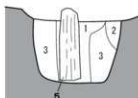
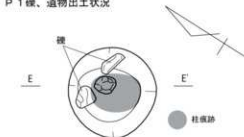


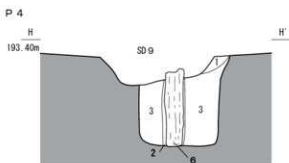
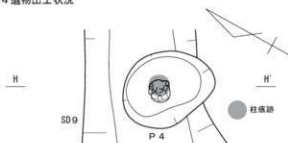
図15 SB4遺構図(1)

P 1 棟、遺物出土状況



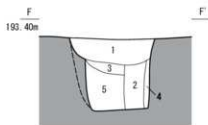
- 1 10YR1.7/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 2.5Y4/2 細灰黄色粘土ブロックを1~2%含む
- 2 2.5Y2/1 棕色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 10YR4/3 濃い黄褐色粘質土ブロックを3~5%含む
- 3 2.5Y2/1 棕色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 10YR4/4 オリーブ褐色粘質土
- 2.5Y4/2 細灰黄色粘土ブロックを10%含む

P 4 遺物出土状況



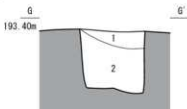
- 1 10YR2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性ややあり
- 7.5YR4/4 褐色土ブロックを少量含む
- 2 10YR1.7/1 黒色粘質土 しまりなし 粘性あり
- 3 10YR1.7/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 2.5Y4/1 黄灰色粘土ブロックを10%含む

P 2



- 1 10YR2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 10YR4/6 褐色粘質土ブロックを3%含む
- 2 10YR1.7/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 10YR4/6 褐色粘質土ブロックを少量含む
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土ブロックを5%含む
- 3 2.5Y4/2 細灰黄色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 10YR4/4 褐色粘質土ブロックを1%含む
- 4 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 10YR4/4 褐色粘質土ブロック・10YR2/2 黒褐色粘質土ブロック・5YR/1 灰色粘土ブロックを1~3%含む
- 5 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 7.5YR4/6 褐色粘質土ブロック・2.5YR/2 灰黄色粘土 5~10%含む

P 3



- 1 10YR2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 10YR4/4 褐色粘質土ブロックを1%含む
- 2 10YR1.7/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 10YR4/4 褐色粘質土ブロックを3%含む

P 1 出土遺物



P 4 出土遺物



図 16 SB4 遺構図 (2)、出土遺物実測図

2 柱穴

SP1 (図17)

検出状況 AS10グリッド、Ⅲb層基底面で検出した。検出時に、埋土上面で柱根を確認した。当初はSB3を構成する独立棟持柱の可能性も考えたが、SB3の梁行の柱筋中央に位置しないことから、単独の柱穴とした。SD9との重複関係は不明瞭であったため、断ち割りを入れたところ、本遺構が古いことを確認した。

形状 平面形は楕円形である。底面は平坦であり、壁面は、北西側は垂直に立ち上がる。南東側は、底面近くは垂直に立ち上がるが、その後緩やかに開く。

埋土 3層に分層した。1層と2層はブロック土を含む。3層は粘質土が堆積している。

遺物出土状況 柱根が南東方向に傾いて残存していた。また、a層から東濃型山茶碗の小皿1点が出土したが、柱根の年代測定の結果と大幅にずれることや、上位からの出土という点から、混入と考える。

出土遺物 7は半割材の柱根である。樹種はカヤである。長さ29.8cm、上部径17.2cmである。側面は全体的に腐食しており、加工痕は確認できない。底面には、刃先痕が認められる。放射性炭素年代測定を実施したところ、6世紀中頃～7世紀中頃に相当する年代が測定された(第4章第1節)。

時期 放射性炭素年代測定の結果から、本遺構の時期は6世紀中頃～7世紀中頃と考える。

SP2 (図17)

検出状況 AS9グリッド、Ⅲb層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

形状 平面形は円形である。底面は狭くなるが平坦であり、壁面の傾斜はかなり急である。

埋土 3層に分層した。2層が柱痕跡、3層が柱掘方埋土である。1・3層はブロック土を含む。

遺物出土状況 1層から土師器1点が出土した。

出土遺物 出土遺物は小片であり、図示できるものはなかった。

時期 土師器の甕の小片が出土していることから、本遺構の時期は古代と考える。

SP3 (図17)

検出状況 AT9グリッド、Ⅲb層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

形状 平面形は円形である。底面は北西側にテラス状の平坦面があり、中央南東側が円形に一段深くなる。壁面の傾斜は、南東側でほぼ垂直に立ち上がり、それ以外はやや急である。

埋土 2層に分層した。共にブロック土を含み、柱掘方埋土と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器5点、須恵器1点が散在して出土した。

出土遺物 出土遺物は小片であり、図示できるものはなかった。

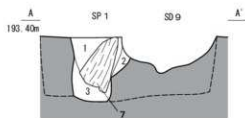
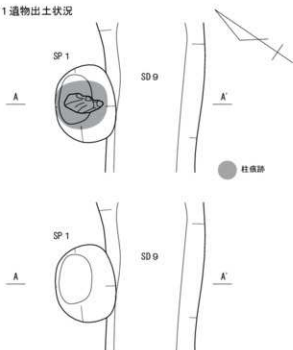
時期 本遺構で時期を判別できる遺物が出土していないが、隣接する柱穴の分布状況から想定すると、本遺構の時期は7世紀第3四半期頃と考える。

SP4 (図18)

検出状況 AT9グリッド、暗渠の底面で検出した。平面形は明瞭であり、西側で一段深くなることから、柱穴と判断した。

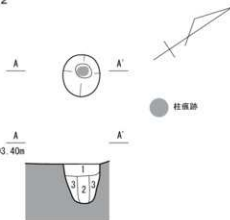
形状 平面形は円形である。底面は段を有しており、西側が円形に一段深くなる。壁面の傾斜は西側で垂直に立ち上がり、それ以外は急である。

SP 1 遺物出土状況



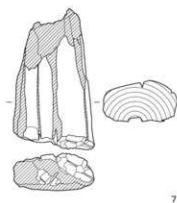
- 1 10YR1.7/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 10YR4.6 褐色粘質土ブロックを1%含む
- 2 10YR2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 10YR4/1 褐色粘土ブロックを少量含む
- 3 5Y5/1 灰色粘土 ややしまる 粘性あり

SP 2



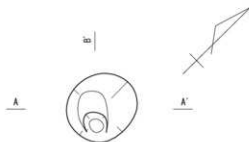
- 1 10YR2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 7.5YR4.6 褐色粘質土ブロックを1%含む 炭化物を少量含む
- 2 7.5YR1.7/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり 炭化物を少量含む
- 3 10YR4/1 褐色粘土 ややしまる 粘性あり
- 7.5YR3.1 黒褐色粘質土ブロックを
- 7.5YR4.6 褐色粘質土ブロックを1%含む

SP 1 出土遺物



7

SP 3



- 1 10YR1.7/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 7.5YR4.6 褐色土ブロックを1~2%含む
- 5Y5/1 灰色粘土ブロックを1%含む
- 2 10YR2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 7.5YR4.6 褐色土ブロックを2%含む

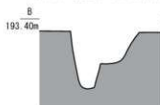


図 17 SP 1・2・3 遺構図、SP 1 出土遺物実測図

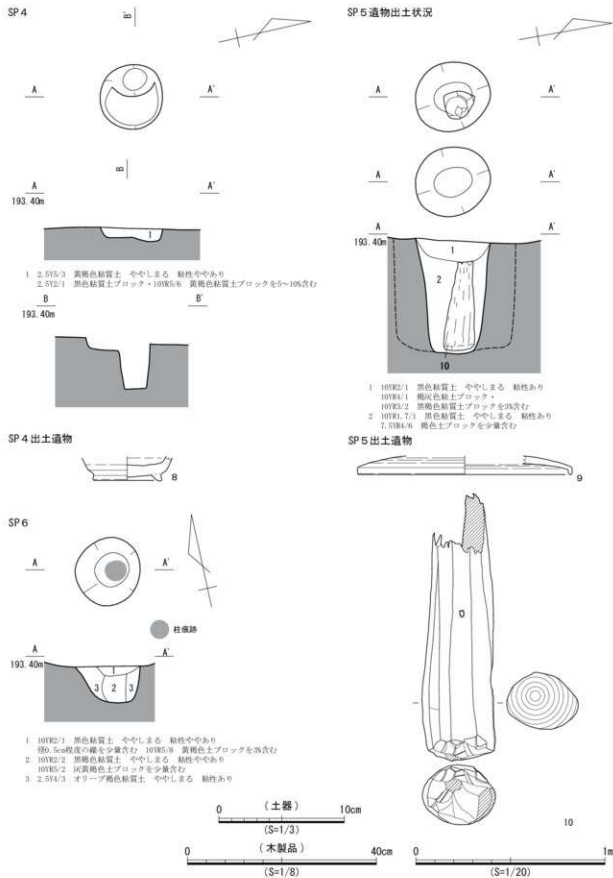


図 18 SP 4・5・6 遺構図、SP 4・5 出土遺物実測図

埋土 単層で、ブロック土を含む柱掘方埋土と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から須恵器1点が出土した。

出土遺物 8は須恵器で、岩崎17号窯式以降の有台坏である。

時期 出土遺物から、本遺構の時期は7世紀第3四半期頃と考える。

SP5 (図18)

検出状況 BA9グリッド、III b層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

形状 平面形は円形である。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土 2層に分層した。どちらもブロック土を含む。1層は2層を掘り込んでいることから、1層は別遺構であった可能性がある。

遺物出土状況 柱根がやや東に傾くようにして残存していた。また、2層から土師器1点、1層から須恵器2点が散在して出土した。

出土遺物 9は須恵器で、岩崎25号窯式の坏蓋Aである。10は芯持丸木材の柱根である。樹種はコウヤマキである。長さ56.6cm、上部径15.1cmである。底面は一部腐敗しているが、刃先痕、刃端痕が認められる。放射性炭素年代測定を実施したところ、6世紀後半～7世紀中頃に相当する年代が測定された(第4章第1節)。

時期 1層から出土した須恵器(9)は8世紀第2四半期を示す。2層出土の柱根の放射性炭素年代測定は6世紀後半～7世紀中頃に想定する年代が測定されており、時期に差がある。須恵器は1層より出土しており、別遺構の遺物であった可能性もある。そのため、ここでは柱根の年代測定結果を踏まえて、本遺構の時期は6世紀後半～7世紀中頃と考える。

SP6 (図18)

検出状況 BB8グリッド、III b層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

形状 平面形は円形である。底面は平坦で、壁面は、東側は垂直に立ち上がり、西側はやや開く。

埋土 3層に分層した。2層が柱痕跡、3層が柱掘方埋土である。1層は2・3層を掘り込んでいることから、1層は別遺構であった可能性がある。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 本遺構からの出土遺物がなく、重複する遺構もないことから、本遺構の時期は不明である。

3 溝

SD8 (図19・20・21)

検出状況 AR9～AR12グリッド、IV a層上面で検出した。AR11グリッドの平面形は明瞭であったが、AR9～AR10グリッドにかけては遺構埋土とIV a層が類似していたことから、平面形は不明瞭であった。そのため、遺構埋土を一部掘削してしまい(A-A'断面の1層～3層)、この段階で遺構の輪郭を検出した。SK81やSD9と重複し、SK81より新しくSD9より古い。

形状 ほぼ東西方向に直線的に延びる溝状遺構である。主軸方位はN-84°-Wであり、東西端部は発掘区外となる。底面は、B-B'断面より東側は丸いが、B-B'断面より西側は複数回の掘り直しによる影響から幅広となり、北・南側それぞれにテラス状の平坦面をもつ。壁面の傾斜は、B-B'断面より東側は緩やかに開き、B-B'断面より西側は底面から急に立ち上がった後、緩やかに傾斜し、その後ほぼ垂直に立ち上がる。

埋土 A-A'断面は9層に分層した。3層～6層は複数回の掘り直しの跡と考えられる。7層～9層も同様に掘り直しと推測されるが、詳細は不明である。3層、5層、6層には粗砂が混じることから、流水があった可能性が考えられる。B-B'断面は5層に分層した。1層及び4層、5層はブロック土を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器100点、須恵器49点、土製品2点、木製品6点が出土した。SK81のすぐ南側では坏蓋A(15、16)、無台坏(19)、有台坏(20)、横瓶(24)などがまとめて出土した。また、この範囲の底面近くからは土師器片や須恵器片が数点出土している。中央より東側では埋土上層に遺物が集中しており、下層からは出土しなかった。

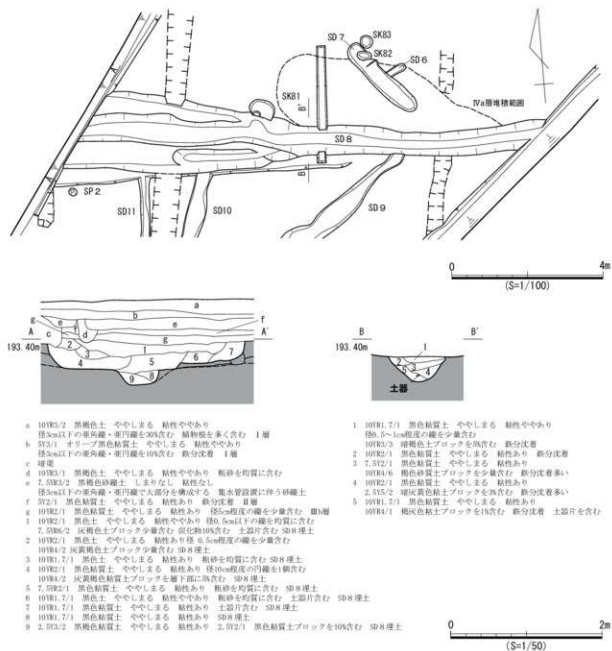


図19 SD8遺構図(1)

遺物出土位置図

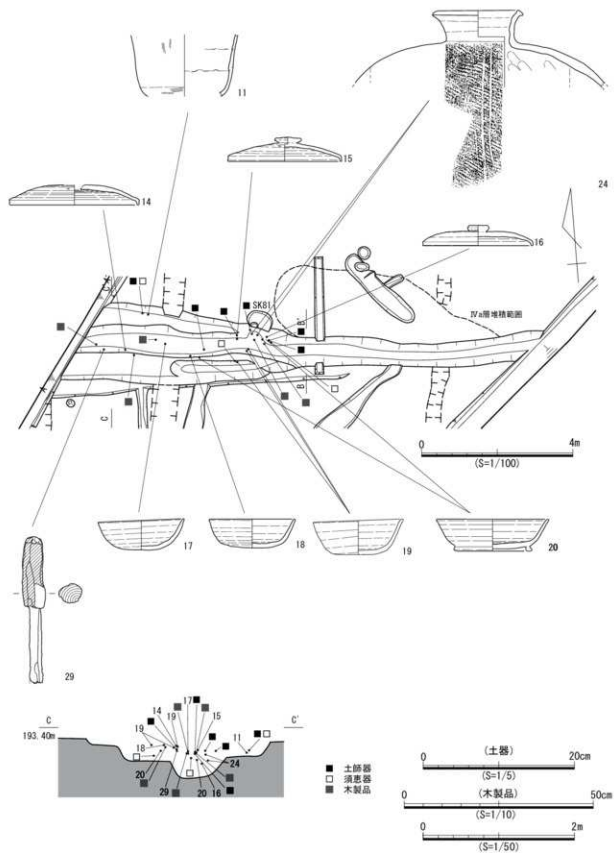


図20 SD8遺構図(2)

出土遺物 11は土師器で、濃尾型の甕である。12～26は須恵器である。12、13は坏蓋である。12は高藏寺2号窯式～折戸10号窯式、13は鳴海32号窯式～折戸10号窯式である。14～16は坏蓋Aである。14、15は高藏寺2号窯式～岩崎25号窯式、16は美濃須衛Ⅳ期第1小期～第2小期並行の在産である。17～19は無台坏である。いずれも岩崎41号窯式～岩崎25号窯式である。20～22は有台坏である。20、21は岩崎41号窯式、22は美濃須衛Ⅲ期後半～Ⅳ期第1小期である。23は高藏寺2号窯式～岩崎25号窯式の鉢である。24は岩崎101号窯式～岩崎41号窯式の横瓶である。25は東山44号窯式～岩崎101号窯式の壺である。26は美濃須衛Ⅳ期第3小期と考えられる甕である。27、28は7世紀代の製塩土器である。29は芯去削出材の横槌である。樹種はヒノキである。柄部は一部欠損する。身部の端には一部加工痕が確認できるが、それ以外はやせており、確認できない。

時期 出土遺物の最新型式から、本遺構の時期は8世紀後半～8世紀末頃と考える。

SD7 (図22)

検出状況 AR11グリッド、IV a層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK82やSK84、SD6と重複し、本遺構が古い。

形状 北西から南東方向へ延びる、長さ2.4m以上の溝状遺構である。主軸方位はN-45°-Wであり、本遺構とSD9とでコ字状の区画を作り出すこと、また、本遺構とSD9の底面の標高がほぼ一致していることから、SD9と関連のある遺構の可能性がある。底面は平坦であり、壁面の傾斜は緩やかに開く。

埋土 単層で、ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器1点、須恵器1点が散在して出土した。

出土遺物 30は須恵器で、折戸10号窯式の有台坏である。

時期 30は8世紀第4四半期～9世紀初頭を示すが、本遺構はSD9と関連のある遺構の可能性がある。そのため、本遺構の時期はSD9と同時期として、9世紀頃と考える。

SD9 (図22・23・24)

検出状況 BB7～AR11グリッド、III b層基底面で検出した。AR9グリッド付近やBAグリッド内の本遺構北西側部分の平面形は不明瞭であったが、それ以外は明瞭であった。SB4、SP1、SN4、SD8、SD11、SK107～SK109等と重複し、SB4、SP1、SD8、SD11、SK107、SK108より新しく、SN4、SK109より古い。

形状 北東から南西方向に延び、BB7～BB8グリッド付近で北西方向にはほぼ直角に屈曲し、北西端部は発掘区外となる。南西方向に延びる直線部分の主軸方位はN-45°-Eで、最大幅は2.4mである。BA8グリッド付近で北西側のみ楕円形状に広がり、北西方向に屈曲後は最大幅0.6mまで収束する。底面は、B-B'断面付近は丸いが、それ以外は比較的平坦である。壁面の傾斜は、どの場所でも緩やかに開くが、一部北西部にテラス状の平坦面がつく。本遺構とSD7は主軸が直交関係にあることや、底面の標高がほぼ一致することから、互いに関連のある遺構の可能性があり、本遺構はSD7と合わせてコ字状となることから、区画溝のような性格をもつと考えられる。

埋土 A-A'断面及びC-C'断面は単層である。共にブロック土を含む。B-B'断面は5層に分層した。1層～4層は複数回の掘り直しの跡と考えられる。3層には粗砂が混じっていることから、流水があった可能性が考えられる。

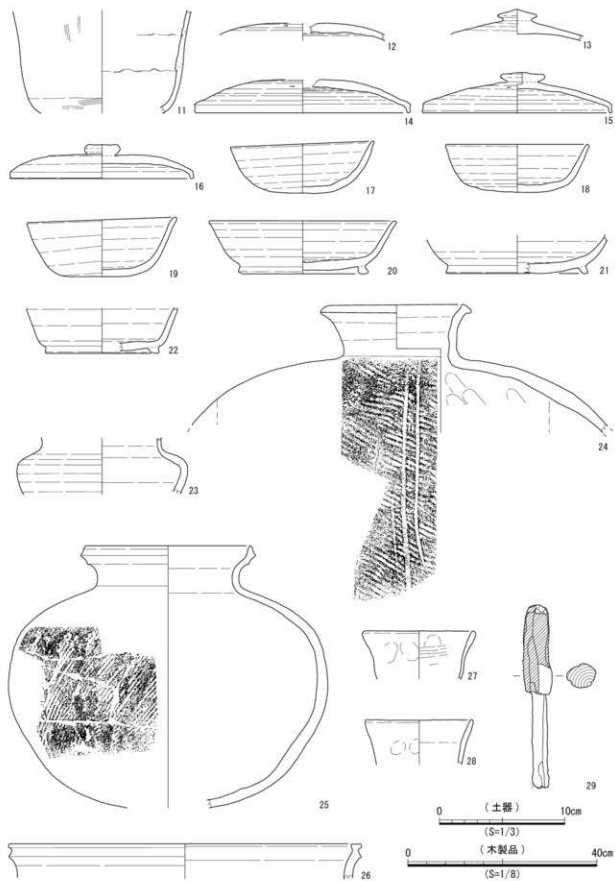


図 21 SD8 出土遺物実測図

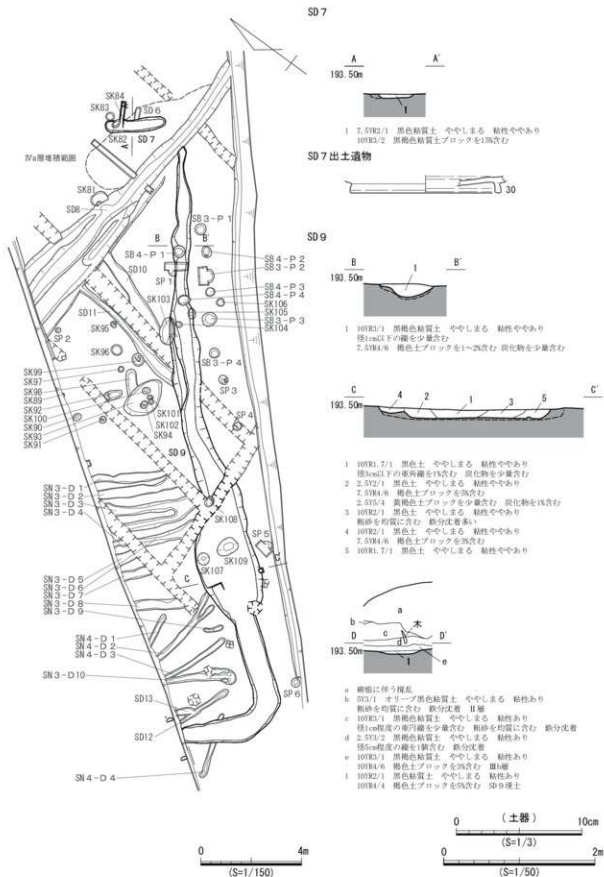


図 22 SD 7・9遺構図、SD 7出土遺物実測図

遺物出土状況 埋土中から土師器 267 点、須恵器 130 点、近世陶磁器 1 点が出土した。楕円形状に広がる BA8 グリッド付近からは、須恵器の無台坏 (36、39) や壺 (52)、短頸壺 (53) などがまとまって出土した。それ以外は小片が多く、埋土中に散在して出土した。近世の徳利も出土しているが、1 層からの出土であり、それ以外の遺物が古代のものであることから混入と考える。

出土遺物 31、32 は土師器である。31 は瓶の把手の破片、32 は濃尾型の甕である。33～53 は須恵器である。33～35 は坏蓋 A である。33 は岩崎 41 号窯式、34 は美濃須衛 IV 期第 3 小期、35 は折戸 10 号窯式である。36～39 は無台坏である。36、37 は岩崎 41 号窯式～高藏寺 2 号窯式であり、37 は外面底部に「×」の線刻が認められる。38 は美濃須衛 IV 期第 1 小期～第 2 小期であり、39 は美濃須衛 IV 期第 1 小期～第 3 小期である。40～43 は有台坏である。40 は美濃須衛 IV 期第 2 小期、41 は鳴海 32 号窯式～折戸 10 号窯式、42 は折戸 10 号窯式～黒笹 14 号窯式であり、43 は時期不明である。44 は美濃須衛 II 期後半～III 期後半の台付盤である。45、46 は盤で、いずれも鳴海 32 号窯式～折戸 10 号窯式である。47 は岩崎 41 号窯式の鉄鉢である。48 は美濃須衛 V 期第 1 小期の把手付鉢である。49 は岩崎 25 号窯式の鉢である。50 は美濃須衛 IV 期第 2 小期～第 3 小期の瓶類である。51 は鳴海 32 号窯式の長頸瓶である。52 は岩崎 17 号窯式～岩崎 41 号窯式の壺である。53 は岩崎 41 号窯式の短頸壺である。

時期 出土遺物の最新型式から、本遺構の時期は 9 世紀頃と考える。

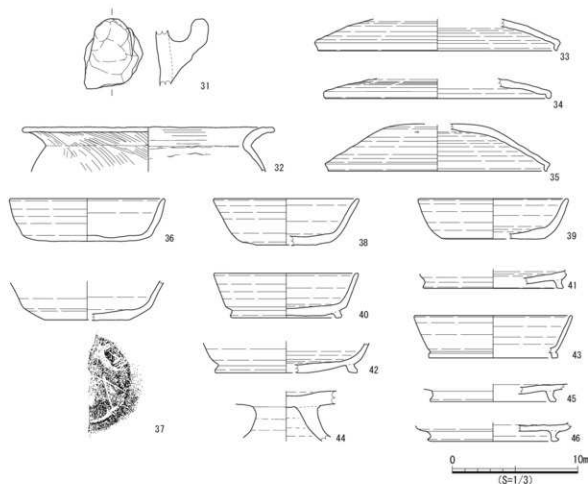


図 23 SD9 出土遺物実測図 (1)

SD10 (図 25)

検出状況 AS9～AS10 グリッド、Ⅲ b 層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。南西端は、暗渠によって削平されている。SK103 と重複し、本遺構が新しい。

形状 北東から南西方向にやや幅を広げながら延びる溝状遺構である。主軸方位はN-21° -Wである。北端部は発掘区外となり、南西端は暗渠によって削平されるが、SD11 と重複関係がないことから、AS9 グリッドで収束すると思われる。底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は垂直に立ち上がる。

埋土 単層で、ブロック土を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器 3 点、須恵器 1 点が散在して出土した。

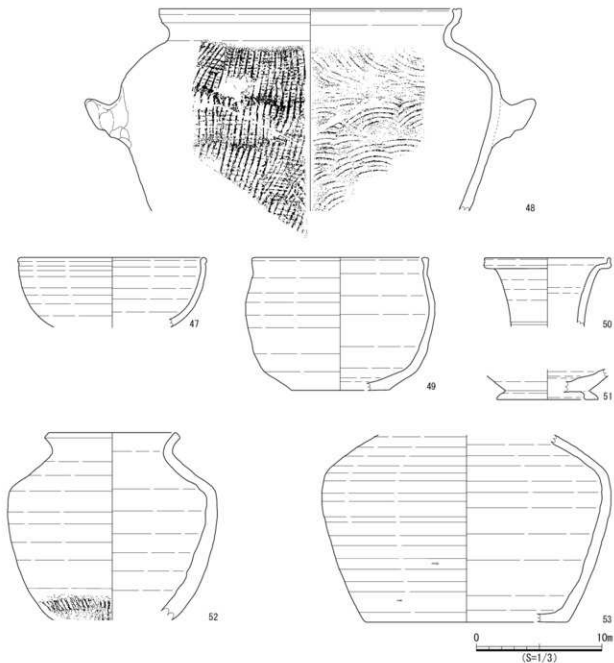


図 24 SD9 出土遺物実測図 (2)

出土遺物 出土遺物は小片であり、図示できるものはなかった。

時期 土師器や須恵器が出土していることから、本遺構の時期は古代と考える。

SD11 (図 25)

検出状況 AS 9 グリッド、III b 層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。SD 9、SK99 と重複し、本遺構が古い。

形状 やや蛇行しながら、およそ南北方向に延びる溝状遺構である。主軸方位は $N-7^{\circ}-W$ である。北端は発掘区外となり、南端は SD 9 に削平される。底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかに開く。

埋土 単層で、ブロック土を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器 11 点、須恵器 3 点が散在して出土した。

出土遺物 出土遺物は小片であり、図示できるものはなかった。

時期 SD 9 との重複関係から、本遺構の時期は 9 世紀以前と考える。

4 土坑

SK42 (図 26)

検出状況 AP12 グリッド、III b 層基底面で検出した。東側と南側は複数の擾乱に削平されているが、平面形は明瞭であった。

形状 平面形は不整隅丸方形である。底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかに開く。

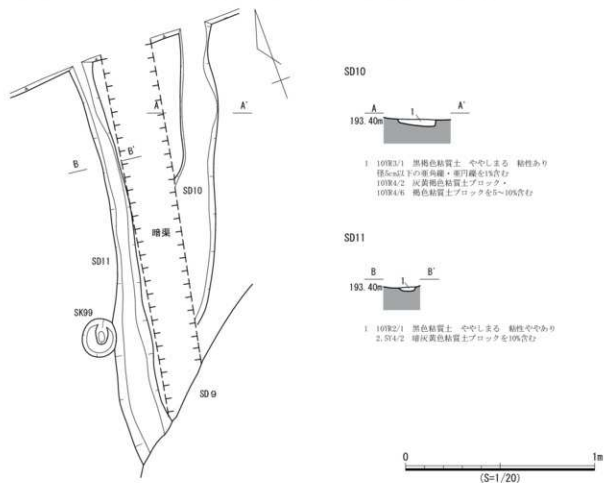


図 25 SD10・11 遺構図

埋土 3層に分層した。3層の上に薄く1層、2層が堆積する。

遺物出土状況 埋土中から土師器3点、須恵器3点が散在して出土した。

出土遺物 54は高坏である。受部の破片で、外面には貼付突帯、波状文、2条の沈線が認められる。55は高坏で、脚部の破片である。接合はしなかったが、共に東山44号窯式であることから、同一個体の可能性がある。

時期 出土遺物から、本遺構の時期は6世紀末～7世紀第1四半期頃と考える。

SK61 (図26)

検出状況 AQ11～AQ12グリッド、Ⅲb層基底面で検出した。検出時に、須恵器の甕の破片が埋土上面に露出していた。本遺構とSK62との重複関係は不明瞭であった。四分割して掘削を開始したところ、別遺構SK62が本遺構を掘り込んでいることを確認したため、SK62の調査後、本遺構を掘削した。

形状 平面形は不定形である。底面は平坦であり、壁面の傾斜は緩やかに開く。

埋土 4層に分層した。2～4層は1層下に部分的に堆積している。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土上層から須恵器5点が出土した。

出土遺物 図示はしていないが、埋土上面に露出していた須恵器の甕は体部片であり、詳細な時期は不明である。

時期 須恵器が出土していることから、本遺構の時期は古代と考える。

SK62 (図26)

検出状況 AQ11グリッド、Ⅲb層基底面で検出した。当初SK61と同一遺構としていたが、掘削中に本遺構を確認した。土層観察から、本遺構はSK61より新しい。本遺構とSK61との重複関係は不明瞭であった。また、南西端でSK63と重複し、本遺構が新しい。

形状 平面形は長楕円形である。底面は丸みを帯び、そのまま上部に向かって緩やかに開く。

埋土 単層であるが、下部に炭化物を少量含む。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土師器4点、須恵器2点が散在して出土した。

出土遺物 56は土師器で、濃尾型の甕である。

時期 出土遺物から、本遺構の時期は古代と考える。

SK68 (図27)

検出状況 AQ11～AQ12グリッド、Ⅲb層基底面で検出した。検出時に、長頸瓶の頸部が埋土上面に露出していた。平面形は明瞭であった。SD5、SK61、SK62、SK64、SK65、SK69、SK70と重複し、SK64より新しく、SD5、SK61、SK62、SK65、SK69、SK70より古い。

形状 平面形は、不整長楕円形である。底面はほぼ平坦であり、壁面の傾斜は緩やかに開く。

埋土 単層で、ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から、土師器2点、須恵器5点が散在して出土した。

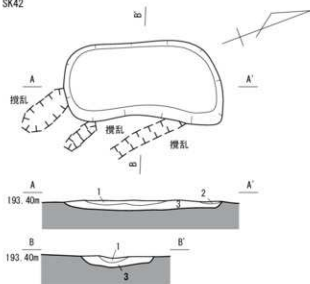
出土遺物 57は須恵器で、岩崎17号窯式～高蔵寺2号窯式の長頸瓶である。

時期 出土遺物から、本遺構の時期は7世紀第3四半期～8世紀第1四半期頃と考える。

SK81 (図27)

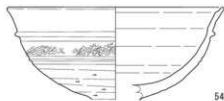
検出状況 AR10グリッド、Ⅳa層上面で検出した。遺構埋土とⅣa層が類似していたため、平面形は不明瞭であった。SD8完掘時に壁面で掘方の立ち上がりを確認したため、上面を精査し、輪郭を確定

SK42



- 1 2.5T3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径0.5cm程度の礫を少量含む 7.5T8L6 褐色粘質土ブロックを包含む
炭化物を少量含む
- 2 2.5T3/3 暗オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径0.5cm程度の礫を少量含む 7.5T8L6 褐色粘質土ブロックを包含む
- 3 10T8L2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性ややあり
径0.5cm程度の礫を少量含む 7.5T8L6 褐色粘質土ブロックを包含む
炭化物を含む 須臾器を含む

SK42出土遺物

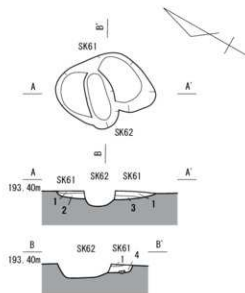


54



55

SK61

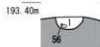


- 1 10T8L2/2 黒褐色粘質土 ややしまる 粘性ややあり
径0.5cm程度の礫を1%含む 10T8L6 褐色土ブロックを5%含む
須臾器片を含む
- 2 10T8L2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性ややあり
褐色土ブロックを少量含む
- 3 10T8L3 濃い黄褐色粘質土 ややしまる 粘性あり
- 4 10T8L1 黒褐色粘質土ブロックを包含む
7.5T8L6 褐色粘質土 ややしまる 粘性ややあり
径0.5cm程度の礫を少量含む 鉄分沈着 須臾器片を含む

SK62

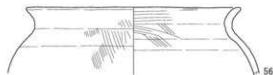


56



- 1 10T8L2/2 黒褐色粘質土 ややしまる 粘性ややあり
径0.5cm程度の礫を少量含む 層下部に炭化物を1~2%含む
鉄分沈着 土器片を含む

SK62出土遺物



56



図26 SK42・61・62 遺構図、SK42・62 出土遺物実測図

した。SD 8が北側に張り出している場所に位置し、SD 8の遺物が集中している場所に隣接する。

形状 平面形は、一部削平されているが長楕円形と考えられる。底面は丸く段を有しており、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土 2層に分層した。層界は北西側から南東側に向かって傾斜している。いずれもブロック土を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 1層から土師器1点、須恵器2点が散在して出土した。

出土遺物 58は土師器で、濃尾型の甕である。59は須恵器で、岩崎25号窯式の坏蓋Aである。

時期 出土遺物から、本遺構の時期は8世紀第2四半期頃と考える。

SK88 (図 28)

検出状況 AR12 グリッド、IVa 層上面で検出した。遺構埋土とIVa 層が類似していたため、平面形は不明瞭であった。

形状 平面形は、円形である。底面は平坦であり、壁面の傾斜は緩やかに開く。

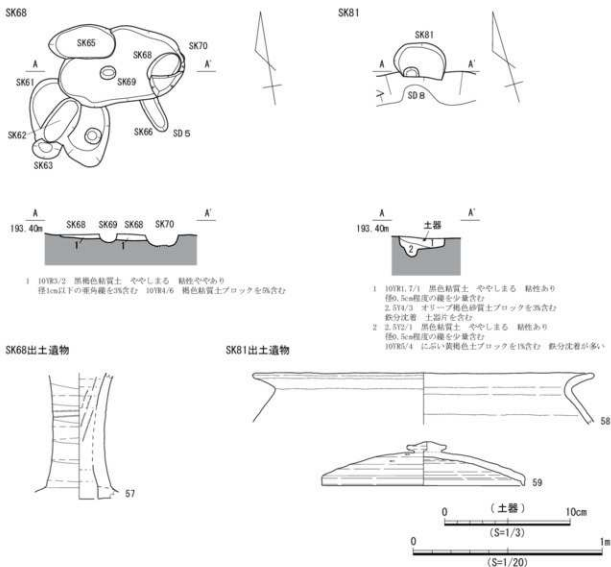


図 27 SK68・81 遺構図、出土遺物実測図

埋土 単層で、ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から、石器1点が出土した。

出土遺物 60はMFである。

時期 本遺構からMFが出土しているが、本遺構周辺にある遺構はすべて古代のものであり、縄文時代の遺構とは言い切れない。そのため、出土遺物と周辺遺構の時期を踏まえて、本遺構の時期は縄文時代～古代までと考える。

SK93 (図 28)

検出状況 AS 9 グリッド、III b 層基底面で検出した。遺構埋土とIV b 層が類似していたため、平面形は不明瞭であった。北側でSK98と重複し、本遺構が古い。

形状 平面形は、不整楕円形である。底面はほぼ平坦であり、壁面の傾斜は緩やかに開く。

埋土 4層に分層した。2層が3層を掘り込んでいる状況から、2層部分は別遺構であった可能性がある。ブロック土を多く含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 3層から須恵器2点が散在して出土した。

出土遺物 出土遺物は小片であり、図示できるものはなかった。

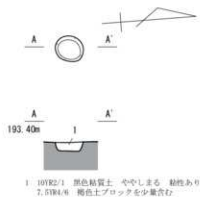
時期 須恵器が出土していることから、本遺構の時期は古代と考える。

SK107 (図 29)

検出状況 BA 8～AT 8 グリッド、SD 9 の底面で検出した。平面形は明瞭であった。

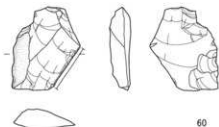
形状 平面形は円形である。底面は丸く、壁面の傾斜は緩やかに開く。

SK88



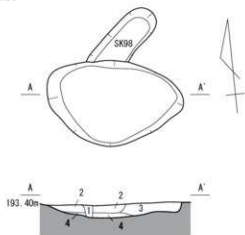
1. 10W2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
2. 5W4/6 褐色土ブロックを少量含む

SK88出土遺物



60

SK93



1. 10W1.7/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分少量
2. 10W2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.5cm以下の礫を1～2%含む
3. 10W3/4 にふい黄褐色土ブロックを少量含む 鉄分少量多い
4. 10W1.7/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性ややあり
10W3/2 黄褐色粘土ブロック層下部に5～10%含む 鉄分少量
1. 10W4/1 褐色粘質土 ややしまる 粘性あり
2. 5W/4 黄褐色土ブロックを少量含む
2. 5W/2/1 黒色土ブロックを少量含む 鉄分少量



図 28 SK88・93 遺構図、SK88 出土遺物実測図

埋土 2層に分層した。ほぼ水平堆積で、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 1層から土師器2点が散在して出土した。

出土遺物 出土遺物は小片であり、図示できるものはなかった。

時期 SD9との重複関係から、本遺構の時期は9世紀以前と考える。

SK108 (図29)

検出状況 AT9グリッド、SD9の底面で検出した。平面形は明瞭であった。

形状 平面形は円形である。底面は南東部にテラス状の平坦面があり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

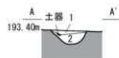
埋土 3層に分層した。1層が2層を掘り込んでいることから、1層部分は別遺構であった可能性がある。どの層もブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器1点、須恵器5点が散在して出土した。

出土遺物 61、62は須恵器である。61は岩崎17号窯式〜高蔵寺2号窯式の無台坏である。62は岩崎41号窯式の長頸瓶である。

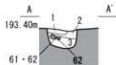
時期 出土遺物から、本遺構の時期は7世紀第3四半期〜8世紀第1四半期頃と考える。

SK107



- 7.5YR1.7/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
100.5cm程度の礫を少量含む
- 10YR3/1 黒褐色土ブロックを少量含む 炭化物を少量含む
- 10YR2/2 黒褐色粘質土 ややしまる 粘性あり
炭化物を少量含む 鉄分沈着

SK108

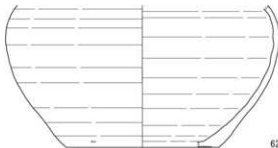


- 10YR3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
10YR5/2 灰黄褐色粘土ブロックを1%含む 炭化物を少量含む
- 10YR2/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性ややあり
10YR5/2 灰黄褐色粘土ブロックを1%含む
- 7.5YR1.7/1 黒色粘質土 ややしまる 粘性あり
径10cm以下の黒角礫を含む
10YR5/2 灰黄褐色粘質土ブロックを1%含む 土器片を含む

SK108出土遺物



61



62



図29 SK107・108 遺構図、SK108 出土遺物実測図

SK109 (図30)

検出状況 BA8グリッド、SD9の埋土掘削途中に検出したため、SD9の埋没途中に掘削されたと考える。平面形は不明瞭であった。

形状 平面形は不整楕円形である。底面は丸く、断面の傾斜は緩やかに開く。

埋土 2層に分層した。1層が2層を掘り込んでいることから、1層部分は別遺構であった可能性がある。ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器1点、須恵器3点が底面近くからまとまって出土した。

出土遺物 63は須恵器で、岩崎17号窯式の無台坏である。外面体部にはヘラ記号「×」が認められる。

時期 SD9との重複関係から、本遺構の時期は9世紀頃と考える。

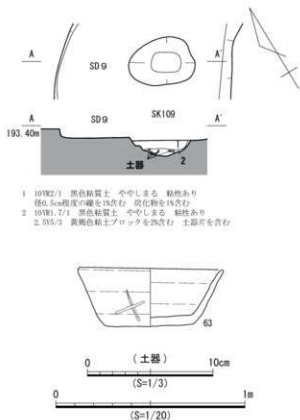


図30 SK109遺構図、出土遺物実測図

第5節 中世の遺構・遺物

1 耕作痕跡

SN 1 (図 31)

検出状況 AQ10～AQ11 グリッド、Ⅲ b 層基底面で検出した。いずれの遺構も、平面形は明瞭であった。SB 2、SN 2、SK56、SK57 と重複し、本遺構が新しい。

形状 3 条の溝が 0.4m～0.6m の間隔で縞状に並ぶ。やや幅の広狭があったり蛇行したりするものの、いずれも北西から南東方向に延びる。D 1 と D 2 の西端は発掘区外となる。底面はいずれも平坦であり、壁面の傾斜は緩やかに開く。また、SN 1 と SN 2 の主軸の向きはほぼ直交する。SN 1 は南西方向に約 18m の地点にある SN 3 と主軸方向が揃う。

埋土 いずれの溝も単層で、ブロック土を含む。

遺物出土状況 D 2 の埋土中から土師器 1 点、須恵器 1 点、D 3 の埋土中から土師器 4 点、須恵器 1 点が散在して出土した。なお、D 1 からの遺物の出土はなかった。

出土遺物 出土遺物は小片であり、図示できるものはなかった。

時期 SN 3 と主軸方向が揃うことから、本遺構の時期は中世を下限とし、8 世紀第 4 四半期以降と考える。

SN 2 (図 31・33)

検出状況 AR10～AQ11 グリッド、Ⅳ a 層上面で検出した。D 1～D 3 の南端部は、遺構埋土とⅣ a 層が類似することから、平面形は不明瞭であったが、それ以外は明瞭であった。D 1 は 3 つに分かれるが、規模や主軸方向の連続性、埋土から同一遺構と判断した。SB 2、SN 1、SK59、SK60 と重複し、SN 1、SK59、SK60 より古く、SB 2 より新しい。

形状 6 条の溝が 0.3m～1.2m の間隔で縞状に並ぶ。D 5 のように主軸方位が多少ずれたり、幅の広狭があったり、蛇行したりするものの、いずれも北東から南西方向に延びる。D 1 の北端は発掘区外となる。底面は、D 1～D 3 は平坦であり、D 4～D 6 は丸みを帯びる。壁面の傾斜は、D 2、D 3 はやや急であるが、それ以外は緩やかに開く。

埋土 いずれの溝も単層で、ブロック土を含む。

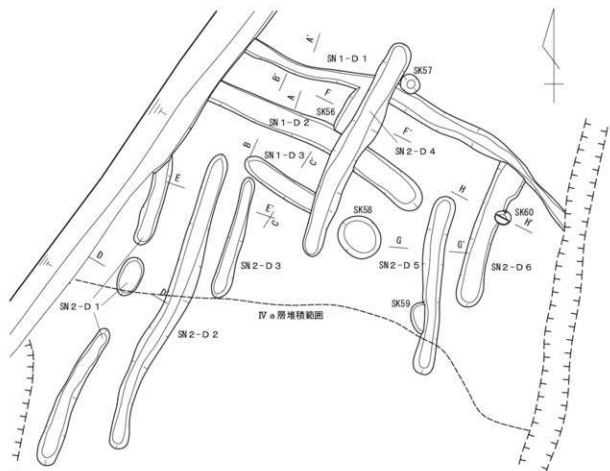
遺物出土状況 D 4 の埋土中から土師器 22 点、須恵器 4 点が散在して出土した。D 1 の埋土中から土師器 2 点がまとまって出土した。D 2 の埋土中から土師器 1 点が出土した。なお、D 3、D 5、D 6 からの遺物の出土はなかった。

出土遺物 64 は土師器で、甕の把手の破片である。65 は須恵器で、岩崎 25 号窯式の坏身である。

時期 出土遺物の時期は、8 世紀第 2 四半期頃である。ただし、耕作痕としての性格を考えると、必ずしも遺構が機能している時期の遺物とは考えることはできない。そのため、本遺構の時期は直上のⅢ b 層が堆積した中世を下限とする。また、重複関係から SN 1 成立以前と考える。

SN 3 (図 32・33)

検出状況 BA 7～AS 8 グリッド、Ⅲ b 層基底面で検出した。D 9、D 10 の南東側については、遺構埋土とⅣ b 層が類似していたため、平面形は不明瞭であったが、それ以外の平面形は明瞭であった。SN 4 と重複し、本遺構が古い。



SN 1



- 1 10IR2/3 黒褐色粘質土
ややしまる 粘性ややあり
10IR4/2 灰黄褐色粘質土ブロックを15含む



- 1 10IR2/3 黒褐色粘質土
ややしまる 粘性ややあり
径0.5cm程度の礫を少量含む
7.5IR4/6 褐色土ブロックを5含む



- 1 10IR2/1 黒色粘質土
ややしまる 粘性ややあり
径0.5cm程度の礫を少量含む
7.5IR4/4 暗褐色土ブロックを15含む

SN 2



- 1 10IR3/1 黒褐色粘質土
ややしまる 粘性あり
7.5IR4/4 褐色土ブロックを5含む



- SN 2-D 2
1 10IR2/1 黒色粘質土
ややしまる 粘性ややあり
7.5IR3/4 暗褐色土ブロックを15含む

- SN 2-D 3
1 10IR2/1 黒色粘質土
ややしまる 粘性ややあり
7.5IR3/4 暗褐色土ブロックを5含む



- 1 10IR2/2 黒褐色粘質土
ややしまる 粘性あり
10IR4/3 にふい黄褐色砂質土ブロックを15含む
10IR4/6 褐色粘質土ブロックを15含む



- 1 10IR2/1 黒色粘質土
ややしまる 粘性ややあり
径0.5cm程度の礫を少量含む
7.5IR4/6 褐色粘質土ブロックを15含む
マンガン錠を含む



- 1 10IR3/1 黒褐色粘質土
ややしまる 粘性ややあり
7.5IR3/4 暗褐色土ブロックを1~25含む

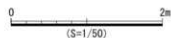


図31 SN 1・2遺構図

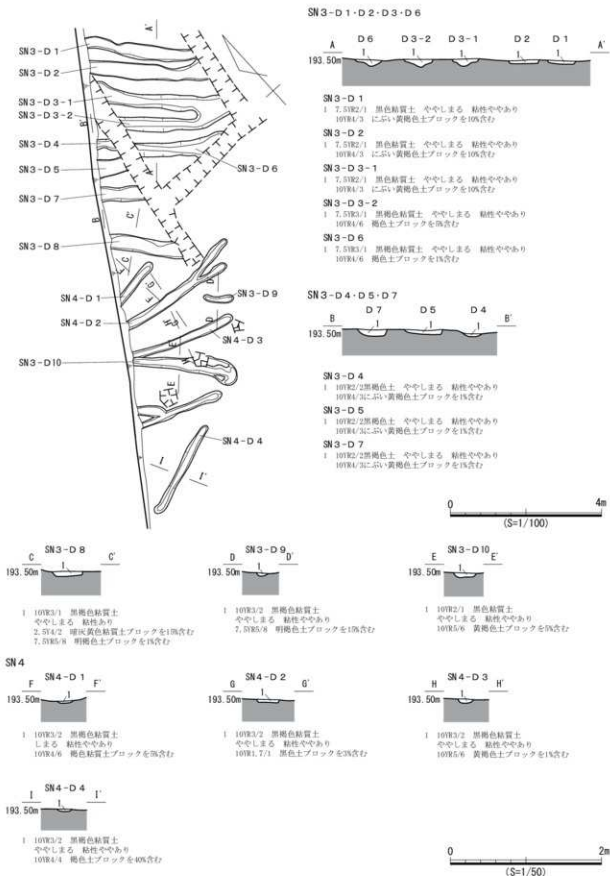


図 32 SN 3・4 遺構図

形状 10条の溝から成り、7条の溝が0.1m～0.4mの間隔で、3条の溝が0.9m～1.5mの間隔で縞状に並ぶ。いずれも北西から南東方向に延びており、D1、D2、D4、D5、D7、D8、D10の北西端部は発掘区外となる。また、D1～D8の南端、東端は暗渠によって削平されている。底面は、D1、D2、D4、D5、D7、D8、D10は平坦であり、D9は丸みを帯びている。壁面の傾斜は、いずれも緩やかに開く。本遺構は、北東方向に約18mの地点にあるSN1と主軸方向が揃う。

埋土 いずれの溝も単層で、ブロック土を含む。

遺物出土状況 D1の埋土中から土師器3点、須恵器2点、D2の埋土中から土師器2点、須恵器5点、D3の埋土中から土師器6点、須恵器7点、D6の埋土中から土師器10点、須恵器4点、D7の埋土中から須恵器1点、D8の埋土中から土師器2点、D10の埋土中から土師器9点、須恵器2点が散在して出土した。なお、D4、D5、D9からの遺物の出土はなかった。

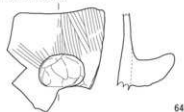
出土遺物 66は土師器で、濃尾型の甕である。67～71は須恵器である。67は岩崎25号窯式の坏蓋Aである。68、69は鳴海32号窯式～折戸10号窯式、70、71は折戸10号窯式の有台坏である。

時期 出土遺物の時期は、8世紀第4四半期～9世紀初頭を示す。しかし、耕作痕としての性格を考えると、必ずしも遺構が機能している時期の遺物とは考えることができない。そのため、本遺構の時期は直上のⅢb層が堆積した中世を下限とし、8世紀第4四半期以降と考える。

SN4 (図32)

検出状況 BB7～BA8グリッド、Ⅲb層基底面で検出した。D2、D3の東側については、遺構埋土とⅣb層が類似していたため、平面形は不明瞭であったが、それ以外の平面形は明瞭であった。SN3、SD9と重複し、本遺構が新しい。D2、D3は南西方向に約11mの地点にあるSD14、SD15と主軸方向が揃う。

SN2-D4出土遺物



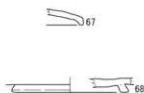
SN3-D1出土遺物



SN3-D2出土遺物



SN3-D3出土遺物



SN3-D6出土遺物

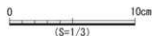
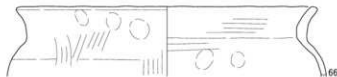


図33 SN2・3出土遺物実測図

形状 4条の溝が0.4m～2.2mの間隔で織状に並ぶ。D2、D3はおおよそ西北西から東南東方向に延び、D1、D4は西南西から東北東方向に延びる。D1～D3の西端は発掘区外となる。底面は、いずれも平坦であり、壁面の傾斜は、緩やかに開く。

埋土 いずれの溝も単層で、ブロック土を含む。

遺物出土状況 遺物の出土はなかった。

時期 本遺構と耕作痕の可能性のあるSD14、SD15とは、距離が離れるが主軸方位が揃う。そのため、本遺構の時期はSD15と同時期として、12世紀後葉～15世紀末頃と考える。

2 溝

SD14 (図34)

検出状況 BC6～BB6グリッド、III b層基底面で検出した。平面形は不明瞭であった。

形状 北西から南東方向に延びる溝状遺構である。主軸方位はN-72°-Wであり、SD15と並行する。西端は発掘区外となる。底面は平坦であり、壁面は北側は緩やかに開き、南側はほぼ垂直に立ち上がる。すぐ南側に並行して延びるSD15があり、耕作痕の可能性もある。

埋土 単層で、ブロック土を含む。

遺物出土状況 埋土中から、土師器2点、東濃型山茶碗1点が散在して出土した。

出土遺物 出土遺物は小片であり、図示できるものはなかった。

時期 本遺構からは、山茶碗の碗が出土している。また、隣接するSD15からは山茶碗の小皿が出土している。並行して延びるSD15を含めてSN4とも方位が揃うことから、本遺構の時期は12世紀後葉～15世紀末頃と考える。

SD15 (図34)

検出状況 BC6～BC7グリッド、III b層基底面で検出した。平面形は不明瞭であった。

形状 北西から南東方向に延びる溝状遺構である。主軸方位はN-72°-Wであり、SD14と平行する。東端、西端は発掘区外となる。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。すぐ北側に並行して延びるSD14があり、耕作痕の可能性もある。

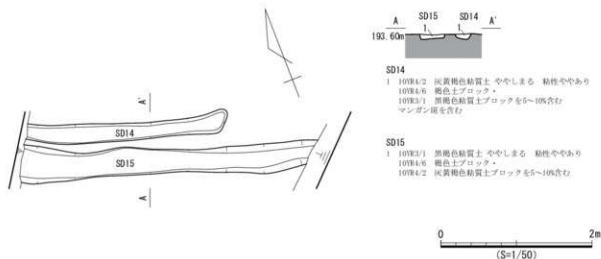


図34 SD14・15遺構図

埋土 単層で、ブロック土を含む。

遺物出土状況 埋土中から、土師器1点、東濃型山茶碗1点が散在して出土した。

出土遺物 出土遺物は小片であり、図示できるものはなかった。

時期 山茶碗の小皿が出土していることから、本遺構の時期は12世紀後葉～15世紀末頃と考える。

3 土坑

SK36 (図 35)

検出状況 A012～A013 グリッド、Ⅲ b 層基底面で検出した。本遺構の北辺は、周囲と比べてやや色の濃い埋土が確認できたために明瞭であったが、それ以外の部分は、遺構埋土と類似するⅣ b 層が広く堆積していたため、平面形は不明瞭であった。そのため、トレンチを入れて堆積状況を確認し、輪郭を確定した。

形状 平面形は不整隅丸方形である。底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は緩やかに開く。

埋土 2層に分層した。水平堆積であり、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土師器8点、須恵器1点が散在して出土した。また、1層から古瀬戸1点が出土した。

出土遺物 出土遺物は小片であり、図示できるものはなかった。

時期 古瀬戸が出土していることから、本遺構の時期は中世と考える。

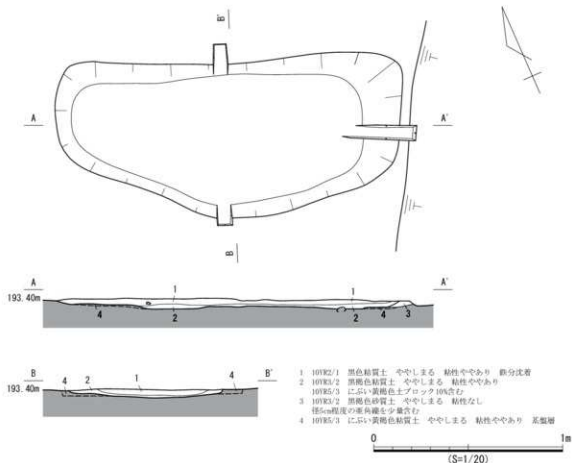


図 35 SK36 遺構図

SK111 (図36)

検出状況 BB6～BB7グリッド、III b層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

形状 平面形は、楕円形である。底面は南西部にテラス状の平坦面があり、北東部が一段深くなる。壁面の傾斜は南西部は緩やかに開き、北東部は垂直に立ち上がる。

埋土 2層に分層した。ブロック土を多く含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から、須恵器1点、山茶碗類1点が散在して出土した。

出土遺物 72は尾張型第5型式の山茶碗の碗である。

時期 出土遺物から、本遺構の時期は12世紀後半～13世紀前半頃と考える。

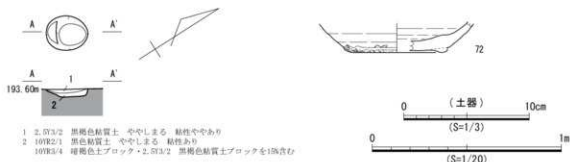


図36 SK111 遺構図、出土遺物実測図

第6節 遺構外出土遺物

1 II層・III層出土遺物(図37・38・39・40)

比較的残存状態が良い遺物、時期が判明した遺物などを中心に73点図示した。

73～78は土師器である。73は弥生時代末期～古墳時代初頭頃の高坏の脚部である。胎土が粗く、在地産と考える。74は松河戸I式～宇田式後期の短頸壺である。外面は摩耗しており調整不明である。75～77は古代の濃尾型の甕である。75は外面に煤が付着しているが、内面に焦げの跡が認められない。78は古代の甌の把手の破片である。

79～119は須恵器である。79～81は坏蓋Aである。79は岩崎25号窯式、80は鳴海32号窯式、81は鳴海32号窯式～折戸10号窯式である。82は鳴海32号窯式～折戸10号窯式の坏身である。83～85はいずれも岩崎25号窯式の無台坏である。86～95は有台坏である。86は岩崎17号窯式～高蔵寺2号窯式、87は岩崎41号窯式、88、89は岩崎25号窯式、90は美濃須衛IV期第2小期、91～93は鳴海32号窯式～折戸10号窯式、94、95は折戸10号窯式である。89は底面に墨書「丙」が認められる。91は外部底面に墨痕と使用痕が認められ、転用硯として使用したと考える。96は岩崎101号窯式の高坏の脚部である。97～100は台付盤である。97は岩崎17号窯式～高蔵寺2号窯式、98、99は岩崎41号窯式、100は鳴海32号窯式～折戸10号窯式である。101、102は有台盤である。101は岩崎25号窯式～鳴海32号窯式、102は鳴海32号窯式である。103は折戸10号窯式の脚付盤である。104は大原2号窯式並行期の産地不明の皿である。底面から体部にかけてヘラケズリが認められる。底面には墨書があり、現状で二行確認できる。積文は以下のとおりである。

守

□□家

〔部〕

一行目は「守」の一文字である。二行目は三文字の可能性があり、一文字目は残画のみ、二文字目は「部」の可能性がある。三文字目は家である。105～108は鉢である。105は岩崎41号窯式、106は美濃須衛IV期第2小期～V期第1小期、107、108は折戸10号窯式である。109は岩崎25号窯式の有台鉢である。110は美濃須衛IV期第1小期と考えられる甕の破片である。111は岩崎17号窯式～岩崎25号窯式の瓶類の口縁部である。112は岩崎17号窯式の長頸瓶の口縁部、113は岩崎25号窯式～鳴海32号窯式の長頸瓶の頸部の破片、114は鳴海32号窯式～折戸10号窯式の長頸瓶の底部である。115、116は共に岩崎17号窯式～岩崎25号窯式と考えられる短頸壺である。接合しなかったが胎土や形状が類似することから、同一個体の可能性がある。117～119は甕である。117、118は岩崎101号窯式、119は高蔵寺2号窯式～折戸10号窯式である。

120～125は灰釉陶器である。120、121は大原2号窯式、122、123は虎渓山1号窯式、124は丸石2号窯式、125は百代寺窯式の碗である。124は底面に墨書があり、「□〔貯〕玉」が認められる。

126～133は山茶碗である。126、127は白土原1号窯式、128は明和1号窯式の碗である。129は丸石3号窯式、130は大洞東1号窯式～脇ノ島3号窯式の小皿である。131～133は片口鉢であり、131は尾張型第6型式、132は尾張型第9型式、133は尾張型第10型式である。

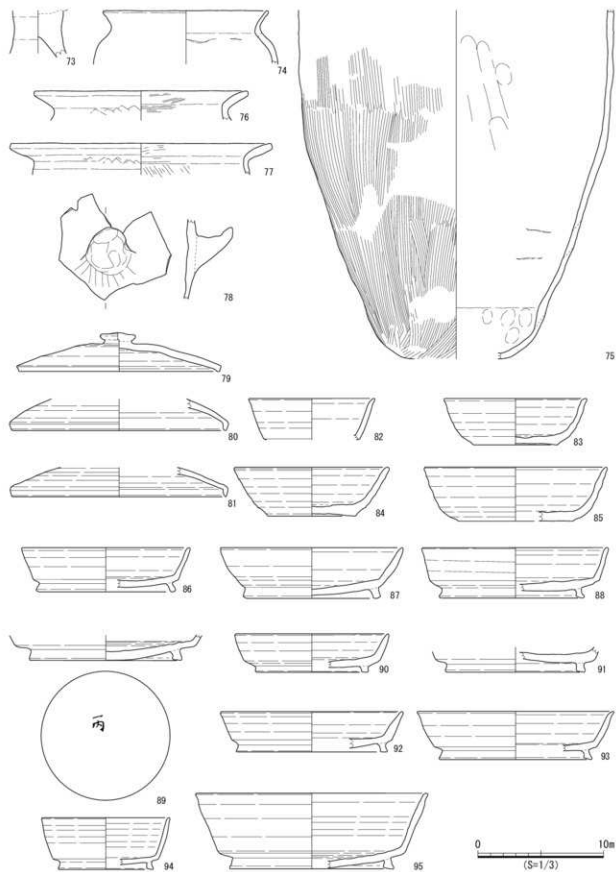


図37 II層・III層出土遺物実測図(1)

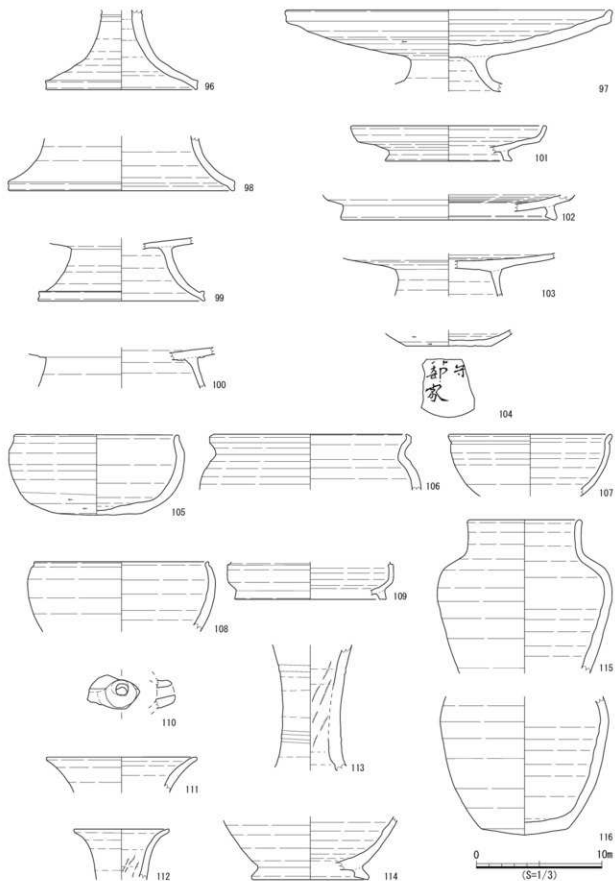


図38 II層・III層出土遺物実測図(2)

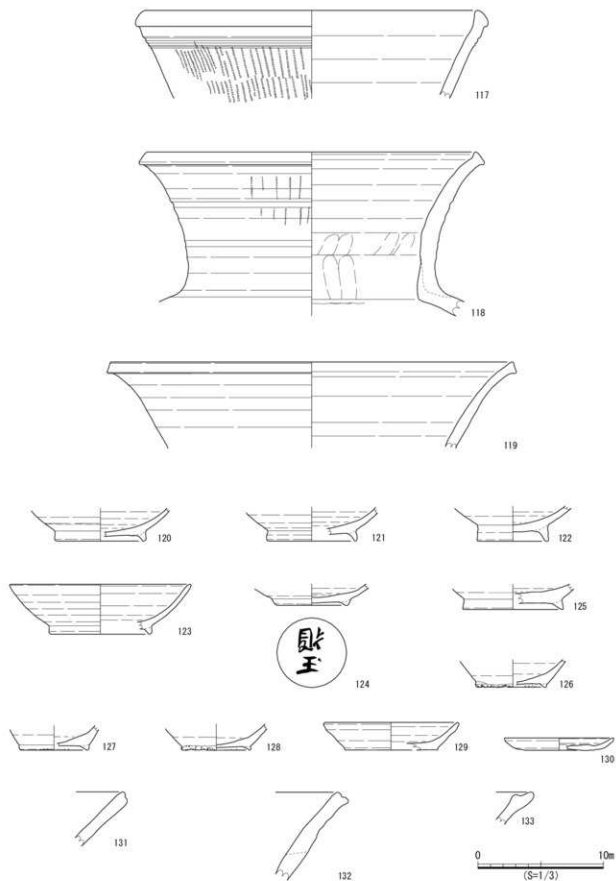


図 39 II層・IIIb層出土遺物実測図(3)

134は土師器で、B3類の内耳鍋の口縁部である。

135は古瀬戸後期の鈿皿である。136は古瀬戸中期の四耳壺である。137は古瀬戸後IV期古、138は大窯第1段階、139は大窯第3段階前半の播鉢である。140は登窯第2小期の天目茶碗である。141は登窯第1小期の志野丸皿である。142は登窯第2小期～第3小期の丸皿である。143は登窯第9小期～第10小期の染付湯呑である。144は登窯第1小期の播鉢である。

145は7世紀代の製塩土器の脚部である。

2 III a層出土遺物(図41)

III a層は、発掘区東部の谷状地形に堆積する黒褐色・暗褐色土の遺物包含層である。遺物出土状況より、江戸時代前期以降に人為的に埋め立てた堆積と考える。時期が判明した遺物を中心に20点図示した。

146～151は須恵器である。146は美濃須恵IV期第1小期の坯蓋Aである。147は美濃須恵IV期第1小期～第3小期の無台坏である。148は鳴海32号窯式～折戸10号窯式の有台坏である。149は折戸10号窯式の有台盤である。150は岩崎17号窯式のプラスチック瓶の頸部である。151は高蔵寺2号窯式～折戸10号窯式の長頸瓶の脚部である。

152～154は灰釉陶器である。152は大原2号窯式、153は丸石2号窯式、154は明和27号窯式の碗である。

155～161は山茶碗である。155は尾張型第5型式、156は窯洞1号窯式、157は大畑大洞4号窯式、158は大谷洞14号窯式、159は生田2号窯式の碗である。160、161は大洞東1号窯式～脇ノ島3号窯式の小皿である。

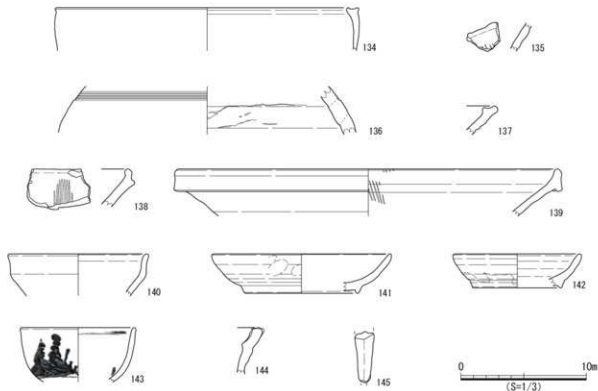


図40 II層・III b層出土遺物実測図(4)

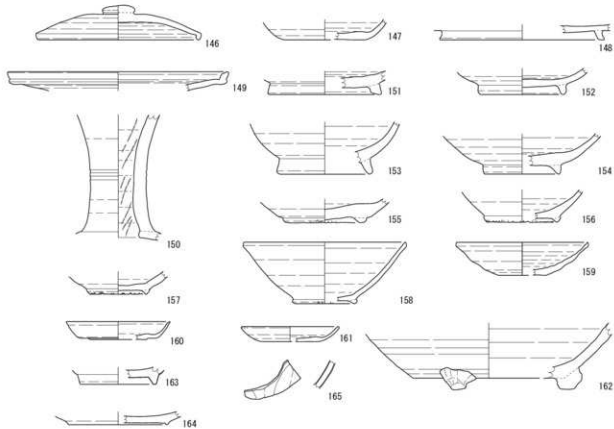
162は古瀬戸後IV期古の折縁深皿である。163は登窯第3小期～第4小期の丸碗、164は登窯第1小期～第2小期の志野丸皿である。

165は青磁で、龍泉窯系D類の碗と考える。

3 I層等出土遺物（図41）

166は須恵器で、時期不明の甕である。167は灰釉陶器で、大原2号窯式の段皿である。168は山茶碗で、明和1号窯式～大畑大洞4号窯式の小皿である。169は白磁で、時期不明の碗である。

Ⅲa層出土遺物



I層等出土遺物

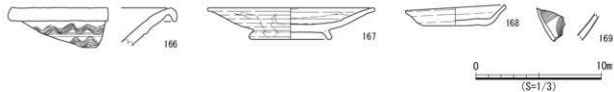


図41 Ⅲa層・I層等出土遺物実測図

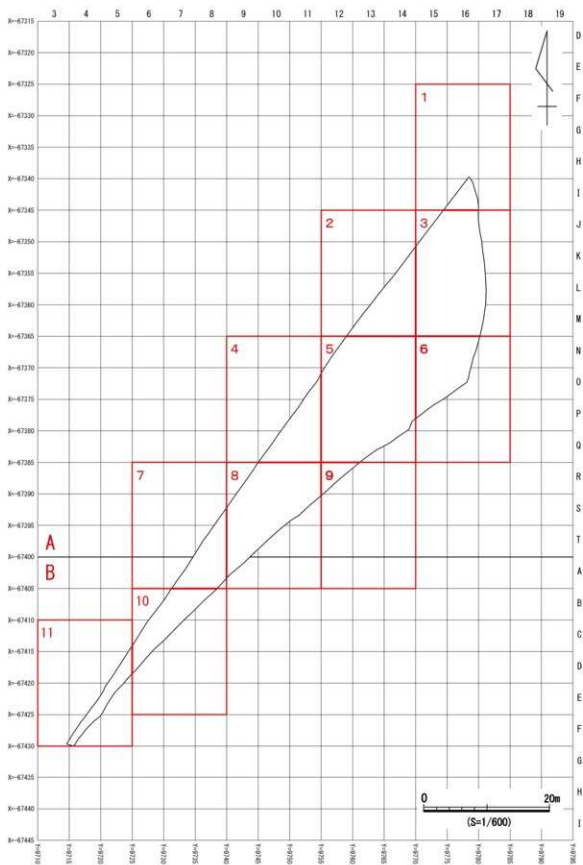


図 42 発掘区全域図 割付図

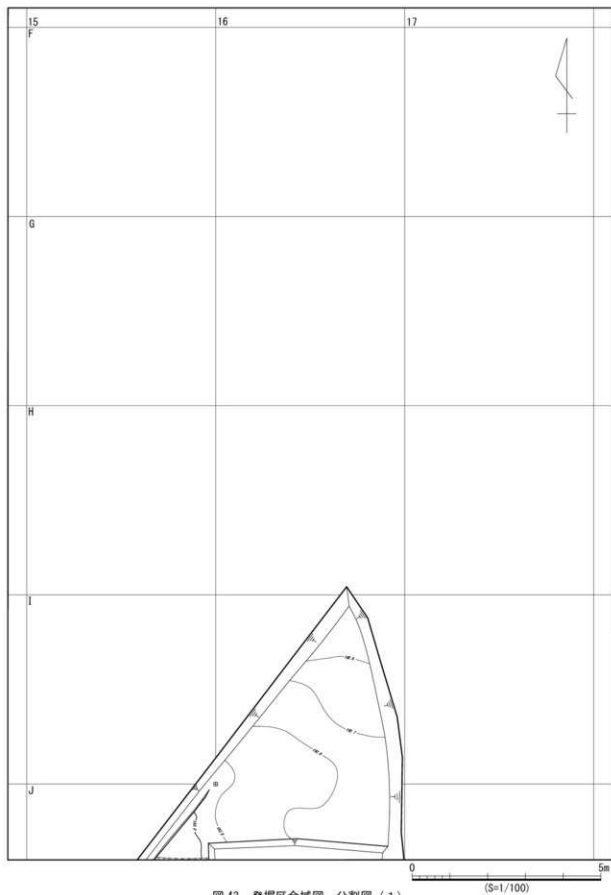


图 43 发掘区全域图 分割图 (1)

(S=1/100)



図 44 発掘区全域図 分割図 (2)

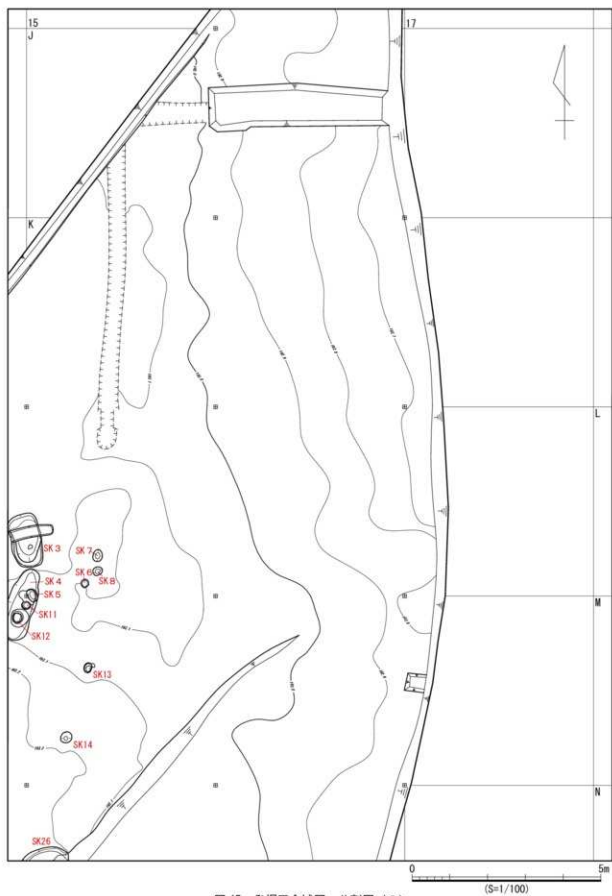


图 45 发掘区全域图 分割图 (3)

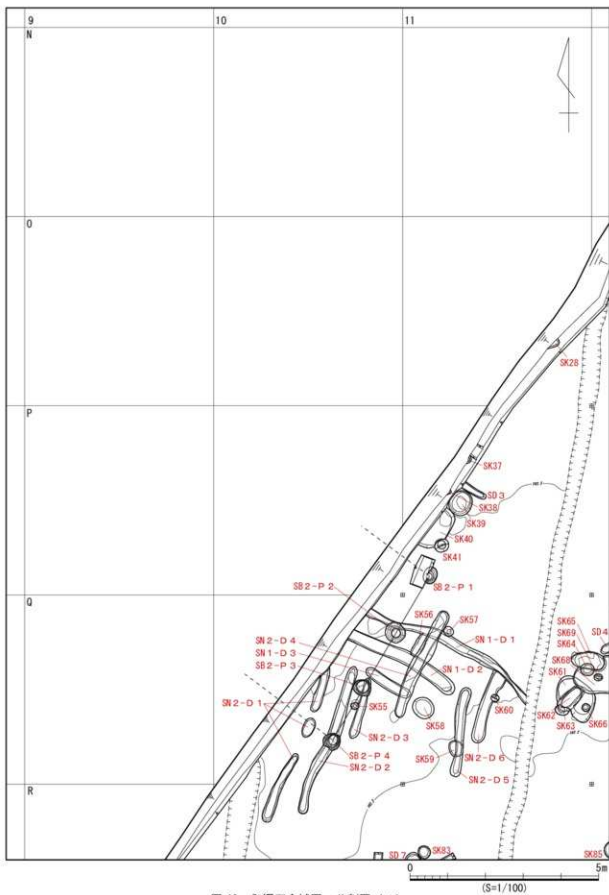


図 46 発掘区全域図 分割図 (4)

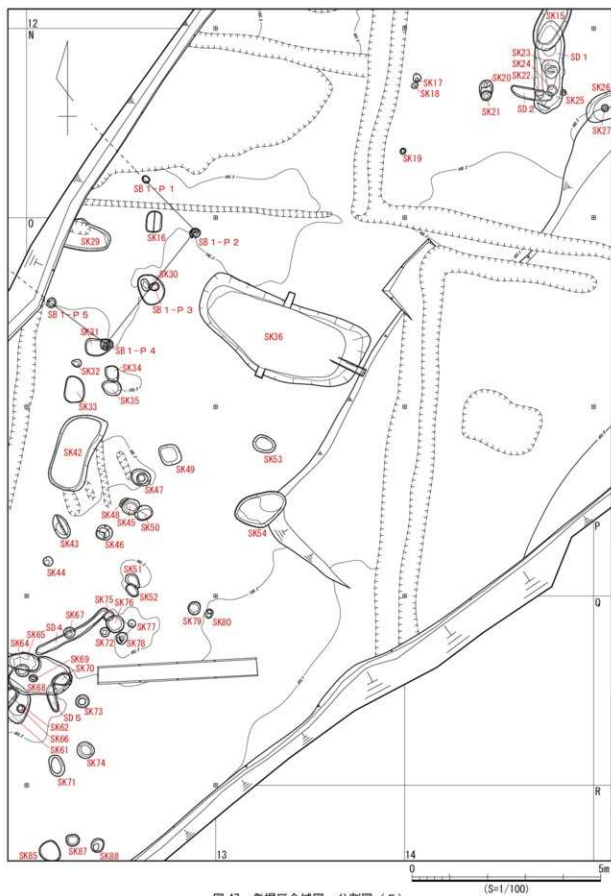


图 47 发掘区全域图 分割图 (5)



図48 発掘区全域図 分割図(6)

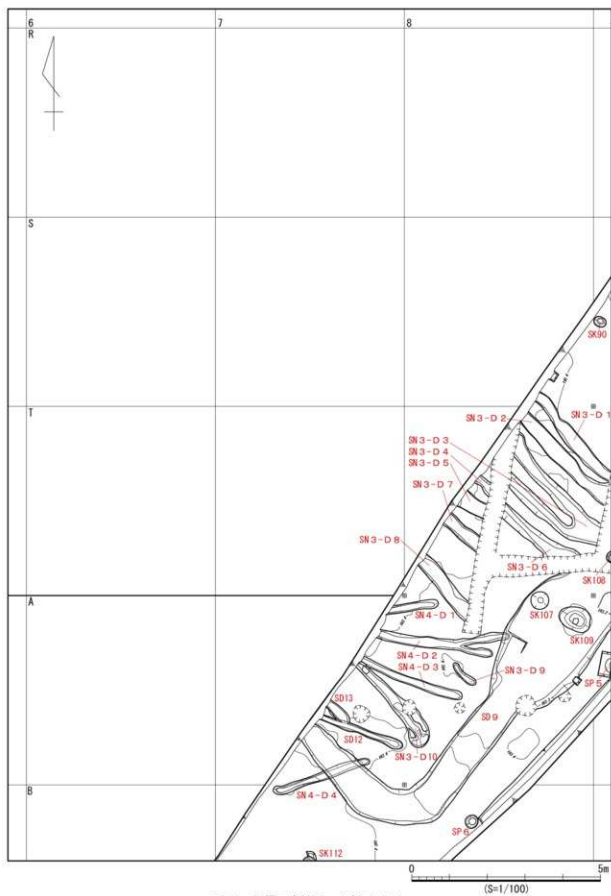


图 49 发掘区全域图 分割图 (7)

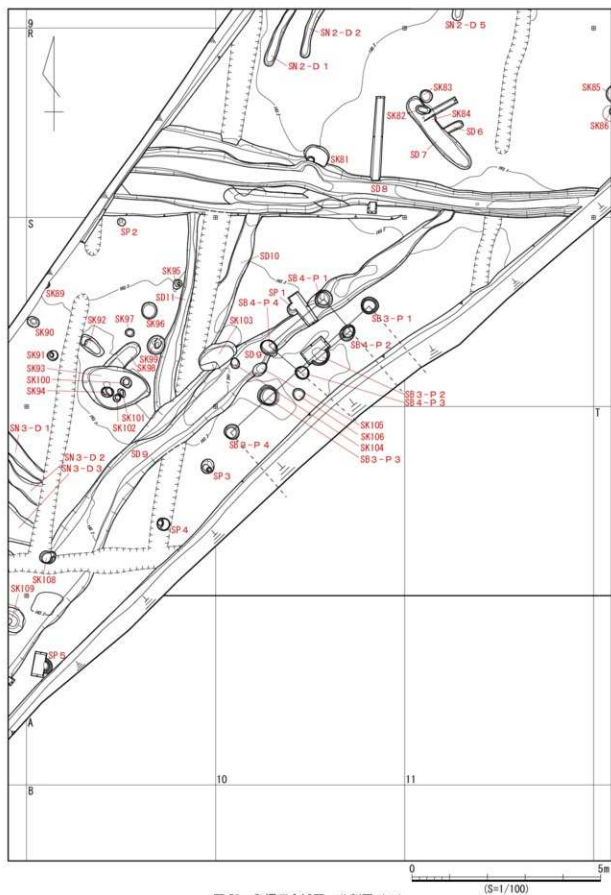


図 50 発掘区全域図 分割図 (8)

(S=1/100)

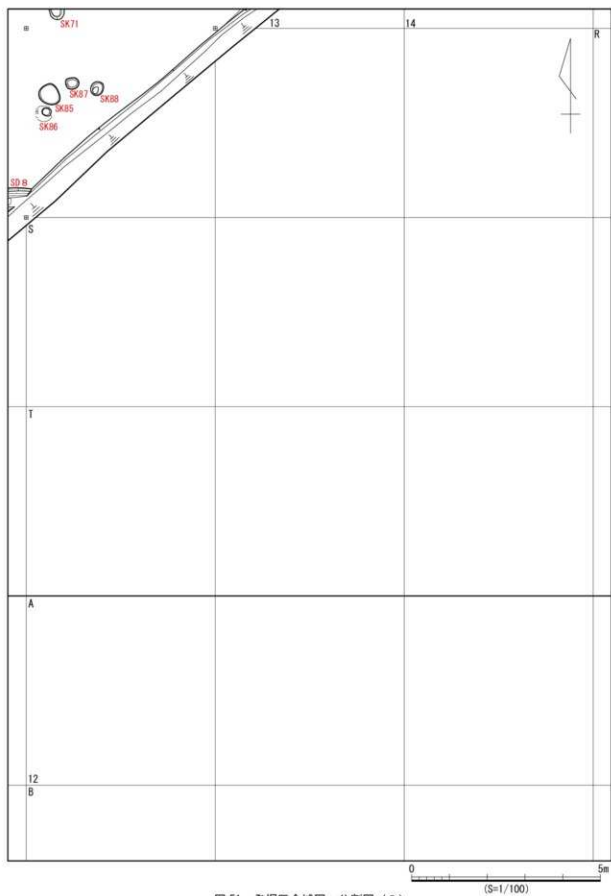


图 51 发掘区全域图 分割图 (9)

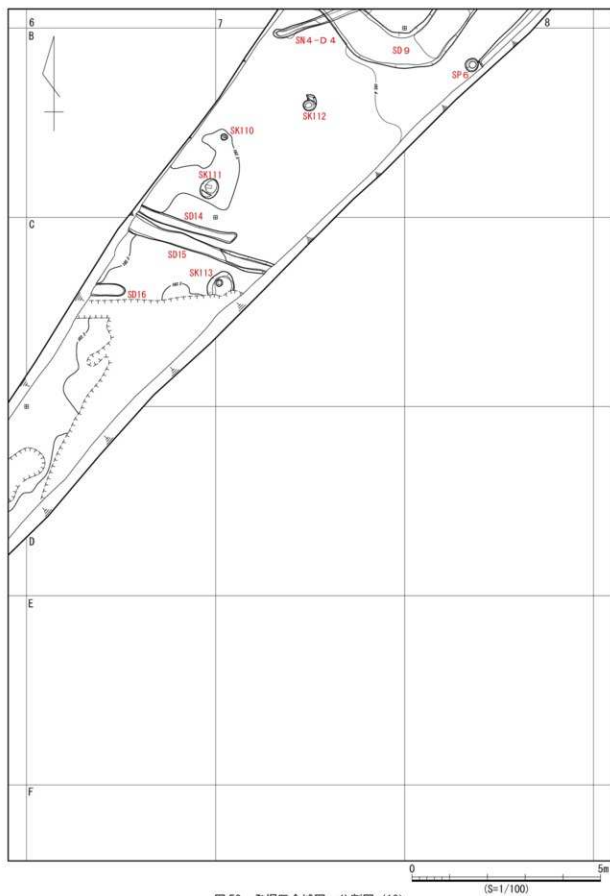


図 52 発掘区全域図 分割図 (10)

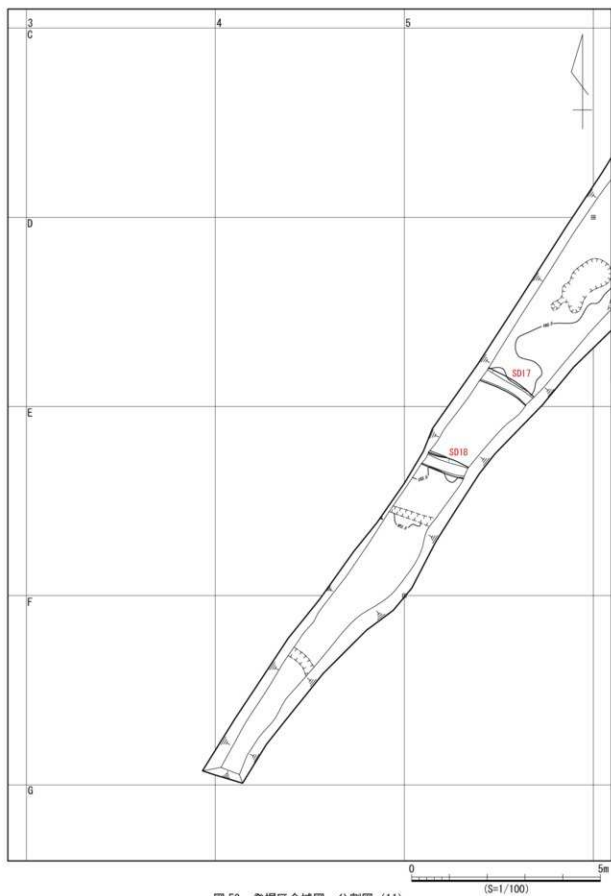


图 53 发掘区全域图 分割图 (11)

表6 掘立柱建物一覽表

遺構名	調査番号	グリッド	棟出處	進行方位	規模 (m)		柱間数	重積関係		出土遺物	障壁	図版
					進行	桁行		新	旧			
SR1	S027, S031, S076, S077, S034	A012-AK12	掘b.瓦	N-38°-E	3.80	(1.80)	2間×1間以上	SK30	SK31	H	9・10	4
SR2	S045, S089, S093, S145	AQ10-AP11	IVa.上	N-31°-E	5.10	-	3間×1間以上	SN1, SN2		H, P, W	11・12	4
SR3	S148, S150, S152, S166	AT10-AS10	掘b.瓦	N-48°-E	5.60	-	3間×1間以上			H, P, W	13・14	3
SR4	S212, S149, S151, S201	AS10	掘b.瓦	N-66°-E	1.90 (西側) 1.70 (東側)	(1.10)	1間×1間以上	S89		瓦, W	15・16	3

表7 掘立柱建物付属遺構一覽表

遺構名	調査番号	グリッド	棟出處	平座形状	地積	断面形状	規模 (m)				深さ	重積関係		出土遺物	障壁	図版
							上端		下端			新	旧			
							長軸長	短軸長	長軸長	短軸長						
SR1-P1	S027	AS12	掘b.瓦	1a	α	II B	0.21	0.18	0.15	0.15	0.05					9・10
SR1-P2	S031	A012	掘b.瓦	1a	α	III B	0.25	0.22	0.06	0.06	0.19					9・10
SR1-P3	S076	A012	掘b.瓦	1b	γ	III B	0.20	0.21	0.16	0.14	0.16	SK30				9・10
SR1-P4	S077	A012	掘b.瓦	1a	γ	I B	0.29	0.25	0.08	0.08	0.32	SK31				9・10
SR1-P5	S034	A012	掘b.瓦	1a	α	II A	0.28	0.23	0.15	0.15	0.17		H			9・10
SR1-P6	S045	AP11	IVa.上	1b	γ	I B	0.45	0.35	0.15	0.15	0.43		P, W			11・12
SR2-P1	S089	AQ10-AQ11	IVa.上	1a	γ	I B	0.55	0.53	0.22	0.20	0.37	SR1-B1				11・12
SR2-P2	S093	AQ10	IVa.上	1a	γ	III B	0.48	0.42	0.30	0.29	0.20	SN2-B3				11・12
SR2-P3	S145	AQ10	IVa.上	4a	γ	II A	0.45	0.41	0.25	0.21	0.43	SN2-B2				11・12
SR2-P4	S148	AS10	掘b.瓦	1a	γ	III B	0.45	0.45	0.31	0.30	0.43		H, P			13・14
SR2-P5	S150	AS10	掘b.瓦	1a	γ	III B	0.56	0.47	0.41	0.36	0.43		H, P, W			13・14
SR2-P6	S153	AS10	掘b.瓦	1a	γ	III B	0.58	0.53	0.38	0.37	0.56		H, P			13・14
SR3-P4	S166	AT10	掘b.瓦	1a	α	III B	0.40	0.39	0.26	0.26	0.30		H			13・14
SR4-P1	S212	AS10	掘b.瓦	1b	γ	I B	0.40	0.47	0.31	0.29	0.33	S89				15・16
SR4-P2	S149	AS10	掘b.瓦	1b	γ	III B	0.45	0.37	0.29	0.20	0.38					15・16
SR4-P3	S151	AS10	掘b.瓦	1a	h	III B	0.37	0.34	0.31	0.29	0.32		H			15・16
SR4-P4	S201	AS10	掘b.瓦	1b	γ	III B	0.40	0.40	0.39	0.28	0.46	S89		W		15・16

表8 柱穴一覽表

遺構名	調査番号	グリッド	棟出處	平座形状	地積	断面形状	規模 (m)				深さ	重積関係		出土遺物	障壁	図版
							上端		下端			新	旧			
							長軸長	短軸長	長軸長	短軸長						
SP1	S154	AS10	掘b.瓦	1b	γ	I B	0.41	0.31	0.26	0.17	0.34	S89				17
SP2	S163	AS9	掘b.瓦	1a	γ	I B	0.22	0.20	0.09	0.07	0.21					17
SP3	S167	AT9	掘b.瓦	1a	α	I B	0.38	0.34	0.07	0.07	0.32					17
SP4	S185	AT9	掘b.瓦	1a	α	I B	0.34	0.33	0.12	0.12	0.26		P			18
SP5	S196	BA9	掘b.瓦	1a	α	I B	0.40	0.36	0.20	0.16	0.62		H, P, W			18
SP6	S204	BB8	掘b.瓦	1a	γ	I B	0.36	0.34	0.18	0.18	0.20					18

表9 耕作痕跡一覽表

遺構名	調査番号	グリッド	棟出處	条数	主軸方位	規模 (m)			重積関係		出土遺物	障壁	図版		
						長軸長	幅	深さ	新	旧					
SN1	S080, S081, S082	AQ10-AQ11	掘b.瓦	3	N-60°-W	1.34~(4.88)	0.16~0.34	0.04			SR2, SR2, SK36, SK57			31	5
SN2	S085, S094, S095, S096, S101, S109	AR10-AQ11	IVa.上	6	N-20°-E	1.65~(4.25)	0.17~(0.38)	0.04~0.10	SN1, SK56, SK59, SK60	SR2				31	5
SN3	S171, S172, S174, S179, S180, S177, S181, S182, S195, S197	BA7-AS8	掘b.瓦	10	N-46°-W	0.80~(3.04)	0.10~0.51	0.04~0.09	SN4					32	5
SN4	S188, S189, S190, S199	BB7-BAB	掘b.瓦	4	N-78°-W N-78°-E	1.41~(3.48)	0.20~0.31	0.03~0.06			SN3, S89			32	

表10 溝状遺構一覽表(1)

遺構名	調査番号	グリッド	棟出處	平座形状	地積	断面形状	規模 (m)				深さ	重積関係		出土遺物	障壁	図版
							上端		下端			新	旧			
							長軸長	短軸長	長軸長	短軸長						
SD1	S012	AN4-AM4	掘b.瓦	d	α	I Aa	2.45	0.76	1.86	0.61	6.13	SR2, SR22, SR23, SR24, SK25	SK15			
SD2	S021	AN4	掘b.瓦	d	α	I B	1.11	0.30	1.06	0.23	0.04	SR22, SR24	SD1			
SD3	S040	AP11	掘b.瓦	d	α	I A	10.67	0.18	0.60	0.10	0.04					
SD4	S108	AQ2	掘b.瓦	d	α	I A	2.23	0.26	2.09	0.17	0.08	SK67, SK75				
SD5	S109	AQ2	掘b.瓦	d	α	I A	0.74	0.24	0.63	0.15	0.05	SK68, SK70				
SD6	S141	AR11	IVa.上	d	α	I B	0.75	0.19	0.62	0.13	0.04		SD7			
SD7	S142	AR11	IVa.上	d	α	I B	2.41	0.46	2.29	0.37	0.05	SK6, SK82, SR84				

表11 溝状遺構一覧表(2)

遺構名	調査番号	グリッド	検出面	平準形状	堆積	断面形状	規模 (m)					重複関係		出土遺物	検出	図版
							上端		下端		深さ	新	旧			
							長軸長	短軸長	長軸長	短軸長						
SD6	S144・S146	AP9-AR12	FVa.a	d	a	1Ba	(13.05)	1.22	(13.05)	0.18	0.56	SD9	SK81			
SD9	S147	BR7-AR11	BBh.底	d	c	1B	24.46	2.38	24.34	2.04	0.22	SV4-D4, SK105, SK109	SK4-F1・P4, SF1, SK9, SD11, SK103, SK104, SK107, SK108	H, P, T	22	6・7
SD10	S155	AS9-AS10	BBh.底	d	a	BBh	(4.00)	0.51	(3.90)	0.46	0.09		SK103	P		25
SD11	S156	AS9	BBh.底	d	a	1B	(5.34)	0.50	(5.24)	0.30	0.05	SD9, SK09	SK103	H, P		25
SD12	S191	BA7	BBh.底	d	a	1A	(2.33)	0.18	(2.16)	0.10	0.04		SK13	H		
SD13	S198	BA7	BBh.底	d	a	1B	(0.79)	0.27	(0.76)	0.20	0.04	SD12				
SD14	S217	BC6-BC6	BBh.底	d	a	1B	(2.60)	0.21	(2.61)	0.14	0.07			H, Y	34	
SD15	S218	BC6-BC7	BBh.底	d	a	1B	(3.93)	0.24	(3.93)	0.20	0.06			H, Y	34	
SD16	S221	BC6	BBh.底	d	a	1B	(0.89)	0.32	(0.85)	0.28	0.04					
SD17	S222	BD5	BBh.底	d	a	1B	(1.47)	0.36	(1.47)	0.20	0.07					
SD18	S224	BE5	BBh.底	d	a	1B	(1.20)	0.41	(1.20)	0.26	0.06					

表12 土坑一覧表(1)

遺構名	調査番号	グリッド	検出面	平準形状	堆積	断面形状	規模 (m)					重複関係		出土遺物	検出	図版
							上端		下端		深さ	新	旧			
							長軸長	短軸長	長軸長	短軸長						
SK1	S907	AL14	BBh.底	1a	c	1Aa	0.42	0.38	0.17	0.14	0.20					
SK2	S906	AM4-AL14	BBh.底	1b	a	1B	1.24	0.99	0.60	0.40	0.10					
SK3	S904	AL14-AL15	BBh.底	2c	b	1Ba	1.43	0.81	1.01	0.53	0.15					
SK4	S909	AM4-AL15	BBh.底	1d	b	1B	1.94	0.75	1.71	0.52	0.15	SK12	SK3, SK11			
SK5	S947	AM5-AL15	BBh.底	1h	a	1B	0.35	0.26	0.22	0.14	0.05	SK4				
SK6	S903	AL15	BBh.底	1a	a	1B	0.23	0.21	0.16	0.14	0.04					
SK7	S901	AL15	BBh.底	1h	a	1B	0.32	0.25	0.17	0.12	0.09					
SK8	S902	AL15	BBh.底	1a	a	1B	0.25	0.22	0.15	0.11	0.05					
SK9	S911	AM14	BBh.底	1a	a	1A	0.30	0.28	0.12	0.12	0.05					
SK10	S910	AM14	BBh.底	1b	a	1B	0.35	0.24	0.20	0.14	0.11					
SK11	S948	AM14-AM15	BBh.底	1a	a	1A	0.24	0.21	0.15	0.13	0.04	SK4				
SK12	S928	AM14	BBh.底	1a	a	1B	0.33	0.28	0.22	0.17	0.11	SK4				
SK13	S913	AM15	BBh.底	1h	a	1B	0.26	0.21	0.15	0.12	0.16					
SK14	S914	AM15	BBh.底	1a	a	1C	0.31	0.28	0.10	0.10	0.10					
SK15	S969	AN14-AM14	BBh.底	1d	a	1B	1.89	0.74	1.55	0.46	0.21	SD1				
SK16	S939	AM12-AN12	BBh.底	2b	a	BBh	0.56	0.41	0.51	0.20	0.05					
SK17	S923	AN14	BBh.底	1a	a	1A	0.29	0.20	0.09	0.07	0.07					
SK18	S924	AN14	BBh.底	1a	a	1B	0.18	0.15	0.07	0.05	0.03					
SK19	S926	AN19-AN14	BBh.底	1a	a	BBh	0.16	0.15	0.09	0.08	0.12					
SK20	S922	AN14	BBh.底	1b	b	1Aa	(0.50)	0.36	0.10	0.10	0.16	SK21				
SK21	S946	AN14	BBh.底	1a	c	1B	0.28	0.26	0.13	0.11	0.15	SK20				
SK22	S920	AN14	BBh.底	2a	a	1B	0.21	0.21	0.12	0.12	0.04	SD1, SD2				
SK23	S917	AN14	BBh.底	1a	a	1Ba	0.48	0.45	0.14	0.05	0.14	SD1				
SK24	S919	AN14	BBh.底	1a	a	1B	0.28	0.26	0.20	0.20	0.04	SD1, SD2				
SK25	S918	AN14	BBh.底	1a	a	1A	0.16	0.15	0.05	0.05	0.04	SD1				
SK26	S916	AN14-AN15	BBh.底	4e	a	1B	1.40	(0.71)	1.04	(0.60)	0.17	SK27				
SK27	S966	AN15	BBh.底	1a	a	BA	0.20	0.20	0.13	0.12	0.18	SK26				
SK28	S214	AM11	BBh.底	4e	a	1A	0.48	(0.13)	0.26	(0.99)	0.21					
SK29	S929	AM12	BBh.底	4e	b	1B	(1.11)	0.83	(1.05)	0.72	0.08					
SK30	S932	AM12	BBh.底	1b	a	BBa	0.84	0.65	0.81	0.60	0.10					
SK31	S935	AM12	BBh.底	3e	a	1B	0.74	0.47	0.67	0.40	0.05	SD1-F3				
SK32	S971	AM12	BBh.底	3b	b	1A	0.25	0.20	0.15	0.12	0.12					
SK33	S975	AM12	BBh.底	1h	a	BBh	0.70	0.53	0.67	0.47	0.04	SD1-F4				
SK34	S972	AM12	BBh.底	1e	e	1B	(0.43)	0.35	0.34	0.29	0.07	SK35				
SK35	S973	AM12	BBh.底	1h	e	1B	0.52	0.40	0.39	0.28	0.06					
SK36	S938	AM12-AM13	BBh.底	3d	b	1B	0.54	0.54	0.34	0.34	0.14	SK34				
SK37	S215	AP11	BBh.底	4e	a	BCa	0.29	(0.10)	0.09	(0.60)	0.26					
SK38	S216	AP11	BBh.底	4e	a	1C	0.36	(0.06)	0.06	(0.02)	0.29					
SK39	S941	AP11	BBh.底	1a	d	1B	0.66	(0.57)	0.52	0.43	0.18					
SK40	S943	AP11	BBh.底	4e	a	BBh	1.24	(0.46)	1.11	(0.43)	0.14	SK41				
SK41	S944	AP11	BBh.底	1a	e	1B	0.38	0.35	0.23	0.21	0.13					
SK42	S949	AP12	BBh.底	2d	e	1B	2.10	0.97	1.94	0.78	0.14					
SK43	S959	AP12	BBh.底	1c	d	1B	0.66	0.33	0.06	0.28	0.13					
SK44	S960	AP12	BBh.底	1a	e	1A	0.26	0.25	0.13	0.12	0.14					
SK45	S964	AP12	BBh.底	1a	b	1B	(0.42)	0.42	0.28	0.19	0.16	SK50	SK49	H		
SK46	S956	AP12	BBh.底	1a	a	1Ba	0.42	0.39	0.33	(0.28)	0.07					
SK47	S954	AP12	BBh.底	1h	e	1Ba	0.53	0.43	0.17	0.16	0.13					
SK48	S136	AP12	BBh.底	4e	a	1A	0.30	(0.08)	0.25	(0.04)	0.08	SK45				
SK49	S961	AP12	BBh.底	2a	c	1B	0.55	0.53	0.39	0.39	0.07					
SK50	S955	AP12	BBh.底	1h	e	1B	0.48	0.39	0.37	0.25	0.08					
SK51	S131	AP12	BBh.底	3c	a	1B	0.46	0.29	0.33	0.21	0.07					
SK52	S962	AP12	BBh.底	1e	a	1B	0.39	(0.27)	0.33	0.19	0.05	SK51				
SK53	S970	AP13	BBh.底	1h	e	1B	0.60	0.44	0.46	0.30	0.11					

表13 土坑一覽表(2)

遺構名	調査 番号	グリッド	積出 位置	平面 形状	地 積	断面 形状	規模 (m)					重複関係		出土 遺物	障 害	図 庫
							上端		下端		深さ	新	旧			
							長軸長	短軸長	長軸長	短軸長						
SK54	S063	AF13	Ⅲb底	3c	e	I B	1.40	0.89	1.25	0.73	0.14				P	
SK55	S094	AQ10	ⅡVa上	1a	a	I A	0.20	0.17	0.09	0.08	0.04				H	
SK56	S088	AQ11	ⅡVa上	4e	a	I B	0.67	0.67	0.27	0.14	0.05	SN1-D1+D2	SN2-D4			
SK57	S087	AQ11	ⅡVa上	1a	a	I A	0.25	0.23	0.12	0.10	0.07	SN1-D1				
SK58	S090	AQ11	ⅡVa上	1a	a	I B	0.60	0.53	0.48	0.37	0.05					
SK59	S102	AQ11	ⅡVa上	1a	a	I B	0.42	0.36	0.36	0.29	0.05				S72-D5	
S060	S132	AQ11	ⅡVa上	1a	a	ⅢB	0.21	0.19	0.19	0.12	0.04				S72-D6	
SK61	S096	AQ11-AQ12	Ⅲb底	3b	b	I B	1.13	0.87	1.00	0.65	0.11	SK62	SK66, SK68			26 T
SK62	S123	AQ11	Ⅲb底	1c	a	I A	0.82	0.42	0.63	0.24	0.16		SK61, SK63, SK68			26 T
SK63	S133	AQ11	Ⅲb底	4e	a	I A	0.40	0.27	0.16	0.12	0.17	SK62			H	
SK64	S135	AQ11-AQ12	Ⅲb底	4e	a	I A	0.37	0.33	0.22	0.21	0.12	SK65, SK68				
SK65	S095	AQ11-AQ12	Ⅲb底	3c	b	I B	0.95	0.48	0.78	0.41	0.12		SK64, SK68			
SK66	S124	AQ11	Ⅲb底	1a	a	I A	0.20	0.20	0.11	0.11	0.13	SK61				
SK67	S137	AQ12	Ⅲb底	1e	a	I A	0.29	0.27	0.16	0.15	0.08	SD4				
SK68	S105	AQ11-AQ12	Ⅲb底	3c	a	I B	1.65	1.01	1.54	0.91	0.08	SD5, SK1, SK02, SK65, SK69, SK70	SK64		R, P	27
SK69	S203	AQ12	Ⅲb底	1b	a	I A	0.24	0.19	0.14	0.08	0.11	SK68				
SK70	S202	AQ12	Ⅲb底	4c	a	I B	0.57	0.33	0.30	0.23	0.14	SD5	SK68			
SK71	S122	AQ12	Ⅲb底	1b	a	I B	0.57	0.39	0.40	0.22	0.10					
SK72	S114	AQ12	Ⅲb底	1a	a	I A	0.24	0.24	0.12	0.11	0.12					
SK73	S120	AQ12	Ⅲb底	1a	b	I A	0.36	0.34	0.18	0.16	0.21					
SK74	S121	AQ12	Ⅲb底	1a	a	I A	0.45	0.43	0.28	0.22	0.14					
SK75	S115	AQ12	Ⅲb底	4e	a	I B	0.29	0.22	0.20	0.18	0.03	SD4	SK76			
SK76	S116	AQ12	Ⅲb底	1a	a	I B	0.47	0.45	0.34	0.33	0.13	SK75				
SK77	S112	AQ12	Ⅲb底	1a	a	I A	0.20	0.18	0.09	0.08	0.10					
SK78	S113	AQ12	Ⅲb底	1a	a	ⅢBa	0.32	0.27	0.09	0.09	0.18					
SK79	S111	AQ12	Ⅲb底	1a	a	I B	0.34	0.32	0.23	0.21	0.05					
SK80	S110	AQ12	Ⅲb底	1b	b	I Ba	0.25	0.18	0.11	0.09	0.11					
SK81	S206	AR10	ⅡVa上	4e	d	I A	0.69	0.43	0.13	0.09	0.27	SK8			R, P	27
SK82	S137	AR11	ⅡVa上	1c	a	I A	0.39	0.23	0.26	0.12	0.13	SD7, SK84				
SK83	S136	AR11	ⅡVa上	1a	a	I B	0.34	0.33	0.25	0.22	0.09					
SK84	S140	AR11	ⅡVa上	4e	a	I B	0.35	0.33	0.30	0.30	0.03	SK82	SK7		H	
SK85	S128	AR12	ⅡVa上	1a	a	I B	0.57	0.52	0.52	0.46	0.03					
SK86	S134	AR12	ⅡVa上	1a	a	I B	0.24	0.21	0.18	0.18	0.06					
SK87	S127	AR12	ⅡVa上	1a	a	I B	0.36	0.30	0.25	0.20	0.05					
SK88	S126	AR12	ⅡVa上	1a	a	I B	0.38	0.34	0.31	0.25	0.12				S	28
SK89	S168	AS9	Ⅲb底	4c	a	I Ba	0.32	0.10	0.05	0.03	0.33					
SK90	S164	AS9	Ⅲb底	1b	a	I B	0.34	0.26	0.14	0.11	0.19					
SK91	S165	AS9	Ⅲb底	1a	a	I Ba	0.27	0.27	0.08	0.08	0.33					
SK92	S184	AS9	Ⅲb底	4d	a	I A	0.73	0.35	0.44	0.20	0.09					
SK93	S162	AS9	Ⅲb底	4c	e	I B	1.77	1.14	1.52	0.99	0.21	SK38	SK94, SK100, SK101, SK102		P	28 T
SK94	S226	AS9	Ⅲb底	1b	a	I Ba	0.33	0.23	0.19	0.11	0.29	SK30				
SK95	S157	AS9	Ⅲb底	1a	a	I Ba	0.27	0.23	0.06	0.05	0.15					
SK96	S198	AS9	Ⅲb底	1a	a	I B	0.44	0.41	0.34	0.32	0.11					
SK97	S150	AS9	Ⅲb底	1a	d	ⅢB	0.24	0.20	0.16	0.15	0.14					
SK98	S161	AS9	Ⅲb底	4d	d	I B	1.18	0.42	1.01	0.30	0.10					
SK99	S160	AS9	Ⅲb底	1a	b	I Ba	0.50	0.48	0.14	0.07	0.22	SK93	SD11			
SK100	S229	AS9	Ⅲb底	1a	a	I B	0.30	0.23	0.15	0.14	0.18	SK93				
SK101	S230	AS9	Ⅲb底	3b	a	ⅢB	0.24	0.18	0.16	0.08	0.10	SK93				
SK102	S231	AS9	Ⅲb底	1a	a	I B	0.30	0.19	0.12	0.12	0.15	SK93				
SK103	S187	AS9-AS10	Ⅲb底	4e	a	I D	1.09	0.63	0.78	0.40	0.11	SD6, SD10				
SK104	S210	AS10	Ⅲb底	1b	a	I A	0.29	0.22	0.20	0.17	0.10	SD9				
SK105	S299	AS10	Ⅲb底	4b	a	I B	0.43	0.30	0.27	0.20	0.21	SD9	#			
SK106	S152	AS10	Ⅲb底	1a	a	I B	0.32	0.30	0.24	0.24	0.06					
SK107	S228	BA8-A78	Ⅲb底	1a	b	I A	0.43	0.43	0.16	0.14	0.19	SD9			H	29
SK108	S227	A79	Ⅲb底	1b	a	I Ba	0.42	0.32	0.24	0.21	0.27	SD9			R, P	29 T
SK109	S211	BA8	Ⅲb底	1b	b	I A	0.87	0.43	0.40	0.26	0.22	SD9			R, P	30 T
SK110	S207	BB7	Ⅲb底	1a	a	I C	0.17	0.17	0.09	0.07	0.10				H	
SK111	S208	BB6-BB7	Ⅲb底	1b	b	I Ba	0.55	0.45	0.34	0.29	0.09				F, Y	36
SK112	S205	BB7	Ⅲb底	1a	a	I A	0.34	0.28	0.17	0.14	0.07				P	
SK113	S220	BC6-BC7	Ⅲb底	4a	e	I Aa	0.68	0.50	0.10	0.09	0.15					

表14 土器類観察表(1)

調査番号	種別	器種	出土位置			口径	高さ	器高	分期・時期等	備考	種別	図版
			グリッド	遺構名	層位							
3	須恵器	有台杯	A312	SR3-P1	a	-	(12.6)	(1.6)	竈崎25号式～ 鴨海32号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、回転ヘラケズリ、貼付高台	14	
8	須恵器	有台杯	A79	SP4	1	-	(5.4)	(1.9)	竈崎17号式以降	内面回転ナズ、外面回転ナズ、貼付高台	18	8
9	須恵器	坏蓋A	BA9	SP5	1	(16.8)	-	(1.9)	竈崎25号式	内外面回転ナズ	18	
11	土師器	甕	AR9-AR12	S08	1	-	-	(8.2)	占代	内面ナズ、輪襷状、外面ハケ、外面透部残存	21	
12	須恵器	坏蓋	AR9-AR12	S08	1	-	-	(1.4)	高藏寺2号式～ 新戸10号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、回転ヘラケズリ、窠宝珠つまみ貼付の痕跡あり	21	
13	須恵器	坏蓋	AR9-AR12	S08	3	-	つまみ径3.05	(2.5)	鴨海32号式～ 新戸10号式	内面回転ナズ、外面回転ヘラケズリ、窠宝珠つまみ貼付	21	
14	須恵器	坏蓋A	AR9-AR12	S08	1	(17.0)	-	(2.65)	高藏寺2号式～ 竈崎25号式	内面回転ナズ、外面回転ヘラケズリ、窠宝珠つまみ貼付	21	
15	須恵器	坏蓋A	AR9-AR12	S08	1	14.9	つまみ径3.5	3.2	高藏寺2号式～ 竈崎25号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、回転ヘラケズリ、窠宝珠つまみ貼付	23	8
16	須恵器	坏蓋A	AR9-AR12	S08	3	14.3	つまみ径2.8	2.7	IV期 第1小窠～第2小窠	内面回転ナズ、外面回転ナズ、回転ヘラケズリ後ナズ、窠宝珠つまみ貼付	21	
17	須恵器	無台杯	AR9-AR12	S08	1	11.3	4.0	4.1	竈崎41号式～ 竈崎25号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、ヘラ切り後静止ナズ	21	8
18	須恵器	無台杯	AR9-AR12	S08	1	11.2	5.7	3.8	竈崎41号式～ 竈崎25号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、回転ヘラケズリ後静止ナズ、口縁部内外面自然磨付着	21	8
19	須恵器	無台杯	AR9-AR12	S08	1	11.8	3.8	4.7	内面回転ナズ、外面回転ナズ、ヘラ切り後ヘラケズリ	内面回転ナズ、外面回転ナズ、回転ヘラケズリ後ナズ、貼付高台	21	8
20	須恵器	有台杯	AR9-AR12	S08	1	(14.5)	(8.5)	4.2	竈崎41号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、回転ヘラケズリ後ナズ、貼付高台	21	8
21	須恵器	有台杯	AR9-AR12	S08	1	-	(10.8)	(3.1)	竈崎41号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、貼付高台	21	8
22	須恵器	有台杯	AR9-AR12	S08	1	-	(8.8)	(3.6)	前期後半～ IV期第1小窠	内面回転ナズ、外面回転ナズ、ヘラ切り後手持ちヘラケズリ、貼付高台	21	
23	須恵器	鉢	AR9-AR12	S08	1	-	-	(4.3)	高藏寺2号式～ 竈崎25号式	内外面回転ナズ	21	
24	須恵器	横瓶	AR9-AR12	S08	3	(10.4)	-	(21.9)	竈崎101号式～ 竈崎41号式	内面回転ナズ、指ナズ、外面回転ナズ、叩き目、縦位の沈溝(3本)、内外面自然磨付着、口縁部内外面及び外面肩部黄土塗布	21	8
25	須恵器	壺	AR9-AR12	S08	1	(13.0)	-	(20.8)	東山44号式～ 竈崎101号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、叩き目、内外面自然磨付着、外面に他遺物片付着(口唇)	21	8
26	須恵器	甕	AR9-AR12	S08	1	(27.8)	-	(2.8)	IV期第3小窠	内外面回転ナズ	21	
27	土製品	製塩土器	AR9-AR12	S08	5	(8.4)	-	(3.8)	7世紀代	内面ナズ、指間圧痕、ハケ、外面ナズ、指間圧痕、外面残存	21	
28	土製品	製塩土器	AR9-AR12	S08	3	(8.4)	-	(3.5)	7世紀代	内面コソナズ、外面ナズ、指間圧痕	21	
30	須恵器	有台杯	AR1	SD7	a	-	(12.0)	(1.4)	新戸10号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、回転ヘラケズリ、貼付高台、透部外面に自然磨付着	22	
31	土師器	瓶	BR7-AS11	SD9	1	-	-	高(5.4)	占代	内面ナズ、指間圧痕、外面ハケ、指ナズ、肥ナ貼付	23	
32	土師器	甕	BR7-AS11	SD9	1	(19.7)	-	(4.0)	占代	内面コソハケ、輪襷状、外面斜位のハケ	23	10
33	須恵器	坏蓋A	BR7-AS11	SD9	2	(18.8)	-	(2.5)	竈崎41号式	内外面回転ナズ	23	
34	須恵器	坏蓋A	BR7-AS11	SD9	1	(17.8)	-	(1.6)	IV期第3小窠	内外面回転ナズ	23	
35	須恵器	坏蓋A	BR7-AS11	SD9	3	(17.4)	-	(3.8)	新戸10号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、回転ヘラケズリ、外外面自然磨付着	23	
36	須恵器	無台杯	BR7-AS11	SD9	1	(12.3)	(8.0)	3.4	竈崎41号式～ 高藏寺2号式	内面回転ナズ、静止ナズ、外面回転ナズ、磨耗甚しい	23	
37	須恵器	無台杯	BR7-AS11	SD9	2	-	(6.8)	(3.1)	竈崎41号式～ 高藏寺2号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、ヘラ切り、外面底部磨削「×」	23	
38	須恵器	無台杯	BR7-AS11	SD9	1	(11.4)	(4.8)	3.7	IV期 第1小窠～第2小窠	内面回転ナズ、外面回転ナズ、ヘラ切り	23	
39	須恵器	無台杯	BR7-AS11	SD9	2	(11.8)	(8.8)	3.2	IV期 第1小窠～第3小窠	内面回転ナズ、外面回転ナズ、ヘラ切り	23	
40	須恵器	有台杯	BR7-AS11	SD9	1	(11.4)	(8.6)	3.5	IV期第2小窠	内面回転ナズ、静止指ナズ、外面回転ナズ、回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ、貼付高台	23	
41	須恵器	有台杯	BR7-AS11	SD9	1	-	(11.0)	(1.5)	鴨海32号式～ 新戸10号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、回転ヘラケズリ、貼付高台	23	
42	須恵器	有台杯	BR7-AS11	SD9	a	-	11.2	(2.4)	新戸10号式～ 高藏寺14号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、回転ヘラケズリ、貼付高台	23	
43	須恵器	有台杯	BR7-AS11	SD9	1	(12.4)	(10.2)	3.4	時期不明	内面回転ナズ、外面回転ナズ、貼付高台	23	
44	須恵器	台付瓶	BR7-AS11	SD9	1	-	-	(4.0)	前期後半～ 前期後半	内面回転ナズ、外面回転ナズ、磨部磨付	23	
45	須恵器	盤	BR7-AS11	SD9	1	-	(8.9)	(1.4)	鴨海32号式～ 新戸10号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、回転ヘラケズリ、貼付高台	23	
46	須恵器	盤	BR7-AS11	SD9	1	-	(10.2)	(1.5)	鴨海32号式～ 新戸10号式	内面回転ナズ、外面回転ナズ、回転ヘラケズリ、貼付高台	23	

表15 土器類観察表(2)

観 察 番 号	種別	器種	出土位置			口径	底径	器高	分類・時期等	備考	攝 影	図 版	
			グリッド	遺構名	層位								
47	須恵器	鉄鉢	B07-AS11	S09	1	(14.6)	-	(5.5)	岩崎41号窯式	内外面回転ナゲ、内外面自然釉付着	24		
48	須恵器	把手付鉢	B07-AS11	S09	1	(24.0)	-	(16.1)	V期第1中期	内面回転ナゲ、当て具痕、外面回転ナゲ、明き目、把手貼付、指部圧痕	24	9	
49	須恵器	鉢	B07-AS11	S09	1	(14.0)	(7.8)	10.5	岩崎25号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、回転ヘラケズリ	24	9	
50	須恵器	飯椀	B07-AS11	S09	1	(9.9)	-	(5.4)	IV期 第2小期-第3小期	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、沈線(1条)、内外面自然釉付着	24		
51	須恵器	長柄飯	B07-AS11	S09	1	-	(8.0)	(2.4)	鴨海32号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、底部回転ナゲ、貼付高台、内外面自然釉付着	24		
52	須恵器	盃	B07-AS11	S09	2	(16.0)	-	(14.9)	岩崎17号窯式～ 岩崎41号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、回転ヘラケズリ、明き目	24	9	
53	須恵器	短頸直	B07-AS11	S09	1	-	(16.0)	(14.9)	岩崎41号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、回転ヘラケズリ、底部摩耗につき不明	24	9	
54	須恵器	高坪	AP12	SK42	a	17.0	-	(7.3)	東山44号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、回転ヘラケズリ、貼付突帯、沈線(2条)、波状文	26	9	
55	須恵器	高坪	AP12	SK42	b	-	(12.6)	(2.7)	東山44号窯式	内外面回転ナゲ	26	9	
56	土師器	甕	AQ11	SK02	1	(17.0)	-	(5.3)	古代	内外面ハケ、ナゲ	26	10	
57	須恵器	長柄飯	AQ11-AQ12	SK08	a	-	-	(10.1)	岩崎17号窯式～ 高麗92号窯式	内面回転ナゲ、しぼり痕、外面回転ナゲ、沈線(2条)、内外面自然釉付着、外面に磁炭灰の痕あり	27	9	
58	土師器	甕	AR10	SK81	1	(26.8)	-	(4.1)	古代	内外面摩耗のため調整不明	27		
59	須恵器	坏蓋A	AR10	SK81	1	(16.0)	つまみ 径3.2	3.5	岩崎25号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、回転ヘラケズリ、隆起つまみ貼付、外面自然釉付着	27	10	
61	須恵器	無台坪	AT9	SK108	3	(10.6)	(6.0)	4.1	岩崎17号窯式～ 高麗92号窯式	内外面回転ナゲ、摩耗著しい	29		
62	須恵器	長柄飯	AT9	SK108	3	-	(12.0)	(11.3)	岩崎41号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、回転ヘラケズリ	29	9	
63	須恵器	無台坪	BA8	SK109	2	11.4	7.0	4.7	岩崎17号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、回転ヘラケズリ後ナゲ、外面(×)の痕あり	30	9	
64	土師器	甕	AQ10-AQ11	SN2-D4	1	-	-	長(6.2)	古代	内面ナゲ、外面ハケ、指ナゲ、把手貼付	33	10	
65	須恵器	坏身	AQ10-AQ11	SN2-D4	1	-	-	(2.2)	岩崎25号窯式	内外面回転ナゲ	33		
66	土師器	甕	AT8	SN3-06	1	(23.0)	-	(5.6)	古代	内面ナゲ、ヨコハケ、指部圧痕、外面ナゲ、ハケ、指部圧痕	33		
67	須恵器	坏蓋A	AT8-AT9	SN3-03	1	-	-	(1.3)	岩崎25号窯式	内外面回転ナゲ	33		
68	須恵器	有台坪	AT8-AT9	SN3-03	a	-	(9.2)	(1.1)	鴨海32号窯式～ 新戸10号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、回転ヘラケズリ、貼付高台	33		
69	須恵器	有台坪	AT8-AT9	SN3-02	a	-	(9.4)	(1.4)	鴨海32号窯式～ 新戸10号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、回転ヘラケズリ、貼付高台	33		
70	須恵器	有台坪	AT8-AT9	SN3-01	1	-	(9.8)	(1.2)	新戸10号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、貼付高台	33		
71	須恵器	有台坪	AT8-AT9	SN3-02	a	-	(10.0)	(1.3)	新戸10号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、貼付高台	33		
72	山茶碗	碗	B06-B07	SK111	a	-	(7.0)	(2.3)	尾瀬製第5期式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、回転糸切り痕、貼付高台、柳殻痕	36		
73	土師器	高坪	AP11	-	B・IIIb	-	-	(3.6)	弥生時代末期～ 古墳時代初期	内外面ナゲ	37		
74	土師器	短頸直	AR11	-	B・IIIb	(13.0)	-	(4.3)	松戸11式～ 平田式後期	内面ヨコナゲ、輪積痕、外面摩耗につき不明	37		
75	土師器	甕	AQ11	-	B・IIIb	-	-	(27.5)	古代	内面ナゲ、指ナゲ、輪積痕、指部圧痕、外面ナゲ、ハケ、外面保付着	37	11	
76	土師器	甕	AP12	-	B・IIIb	(17.0)	-	(2.3)	古代	内面ナゲ、積ハケ、外面ナゲ、ハケ、外面頸部に 工具痕	37		
77	土師器	甕	AQ11	-	B・IIIb	(20.6)	-	(2.5)	古代	内外面ナゲ、ハケ、外面頸部に工具痕	37		
78	土師器	飯	AO12	-	B・IIIb	-	-	長(5.9)	古代	内面摩耗につき不明、外面ナゲ、把手貼付	37		
79	須恵器	坏蓋A	AS11	-	B・IIIb	(16.0)	-	つまみ 径2.8	3.1	岩崎25号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、隆起つまみ貼付、外面自然釉付着	37	
80	須恵器	坏蓋A	BC7	-	B・IIIb	(16.8)	-	(2.5)	鴨海32号窯式	内外面回転ナゲ	37		
81	須恵器	坏蓋A	AO12	-	B・IIIb	(17.0)	-	(2.3)	鴨海32号窯式～ 新戸10号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、回転ヘラケズリ	37		
82	須恵器	坏身	AR9	-	B・IIIb	(10.0)	-	(3.3)	鴨海32号窯式～ 新戸10号窯式	内外面回転ナゲ	37		
83	須恵器	無台坪	AR9	-	B・IIIb	(11.2)	(6.6)	3.7	岩崎25号窯式	内面回転ナゲ、外面回転ナゲ、回転糸切り痕	37		

表16 土器類観察表(3)

掲載 番号	種別	器種	出土位置			口径	底径	器高	分期・時期等	備考	種 類	図 版
			グリッド	遺構名	層位							
84	甑形器	無台坪	A810	-	B・IIIb	(12.2)	(7.0)	3.9	雲崎25号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転糸切り痕	37	
85	甑形器	無台坪	A810	-	B・IIIb	(14.4)	(9.2)	4.3	雲崎25号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転糸切り痕	37	
86	甑形器	有台坪	A810	-	B・IIIb	(13.3)	(10.9)	3.5	雲崎17号窯式～ 高麗寺2号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転ヘラケズリ、貼付高台	37	
87	甑形器	有台坪	A810	-	B・IIIb	(14.4)	(10.4)	4.0	雲崎41号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転ヘラケズリ、貼付高台	37 10	
88	甑形器	有台坪	A810	-	B・IIIb	14.7	11.2	4.0	雲崎25号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転ヘラケズリ、貼付高台	37	
89	甑形器	有台坪	A810	-	B・IIIb	-	(12.0)	(2.0)	雲崎25号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転ヘラケズリ、貼付高台、底部外面墨書「内」	37 12	
90	甑形器	有台坪	B88	-	B・IIIb	(12.1)	(8.8)	3.1	IV期第2小期	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転ヘラケズリ、貼付高台	37 10	
91	甑形器	有台坪	A710	-	B・IIIb	-	(11.0)	(2.0)	鴨海32号窯式～ 新戸10号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転ヘラケズリ、貼付高台、底部外面に墨書・使用痕あり、転用破	37 10	
92	甑形器	有台坪	A89	-	B・IIIb	(14.4)	(12.0)	3.2	鴨海32号窯式～ 新戸10号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転ヘラケズリ、貼付高台	37	
93	甑形器	有台坪	A89	-	B・IIIb	(15.5)	(12.0)	3.8	鴨海32号窯式～ 新戸10号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。貼付高台	37	
94	甑形器	有台坪	A811	-	B・IIIb	(10.6)	(7.4)	4.1	新戸10号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転ヘラケズリ、貼付高台	37 10	
95	甑形器	有台坪	A810	-	B・IIIb	(18.2)	(13.0)	6.0	新戸10号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転ヘラケズリ、貼付高台	37	
96	甑形器	高坪	A912	-	B・IIIb	-	(12.0)	(6.3)	雲崎101号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。沈没位置	38	
97	甑形器	台付甕	A89	-	B・IIIb	(25.5)	-	(6.5)	雲崎17号窯式～ 高麗寺2号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転ヘラケズリ、貼付高台	38 11	
98	甑形器	台付甕	A013	-	B・IIIb	-	(17.8)	(4.3)	雲崎41号窯式	内外面回転ナズ	38	
99	甑形器	台付甕	A811	-	B・IIIb	-	(13.2)	(5.0)	雲崎41号窯式	内外面回転ナズ	38 10	
100	甑形器	台付甕	A914	-	B・IIIb	-	-	(3.3)	鴨海32号窯式～ 新戸10号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。貼付高台	38	
101	甑形器	有台甕	A89	-	B・IIIb	(15.5)	(9.9)	2.8	雲崎25号窯式～ 鴨海32号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。貼付高台	38 25	
102	甑形器	有台甕	A810	-	B・IIIb	-	(16.8)	(2.0)	鴨海32号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。貼付高台	38	
103	甑形器	脚付甕	A510	-	B・IIIb	-	(8.4)	(3.6)	新戸10号窯式	内外面回転ナズ	38	
104	甑形器	甕	A79	-	B・IIIb	-	(6.8)	(1.3)	大塚2号窯式 並行期	内面回転ナズ、外面回転ヘラケズリ、底部外面墨書「守 □□表」 (第3)	38 12	
105	甑形器	鉢	A810	-	B・IIIb	(12.8)	3.0	6.4	雲崎41号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転ヘラケズリ	38 11	
106	甑形器	鉢	A510	-	B・IIIb	(15.4)	-	(4.4)	IV期第2小期～ V期第1小期	内外面回転ナズ	38	
107	甑形器	鉢	A011	-	B・IIIb	(12.8)	-	(4.9)	新戸10号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転ヘラケズリ	38	
108	甑形器	鉢	A510	-	B・IIIb	(13.8)	-	(5.5)	新戸10号窯式	内外面回転ナズ	38	
109	甑形器	有台鉢	A79	-	B・IIIb	-	(12.0)	(3.0)	雲崎25号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。貼付高台	38	
110	甑形器	甕	A015	-	B・IIIb	-	-	-	IV期第1小期	内外面回転ナズ	38 11	
111	甑形器	甕類	A811	-	B・IIIb	(11.9)	-	(2.8)	雲崎17号窯式～ 雲崎25号窯式	内外面回転ナズ、内外面自然磨付着	38	
112	甑形器	長柄瓶	A511	-	B・IIIb	(7.5)	-	(4.0)	雲崎17号窯式	内面回転ナズ、しぼり痕、外面回転ナズ、内外面自然磨付着	38	
113	甑形器	長柄瓶	A89	-	B・IIIb	-	-	(10.0)	雲崎25号窯式～ 鴨海32号窯式	内面回転ナズ、しぼり痕、外面回転ナズ、沈没(2集)、外面自然磨付着	38	
114	甑形器	長柄瓶	A89	-	B・IIIb	-	(9.0)	(5.0)	鴨海32号窯式～ 新戸10号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。貼付高台、外面自然磨付着	38	
115	甑形器	短頸甕	B87	-	B・IIIb	(8.6)	-	(12.2)	雲崎17号窯式～ 雲崎25号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転ヘラケズリ	38	
116	甑形器	短頸甕	A811	-	B・IIIb	-	(6.8)	(1.0)	雲崎17号窯式～ 雲崎25号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転ヘラケズリ	38	
117	甑形器	甕	A810	-	B・IIIb	(26.0)	-	(7.0)	雲崎101号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。沈没(3集)、磨 擦面(1集)、外面黄土塗布、内外面自然磨付着	39 11	
118	甑形器	甕	A79	-	B・IIIb	(26.6)	-	(13.1)	雲崎101号窯式	内面回転ナズ、面ナズ後回転ナズ、外面回転ナズ、沈没(1集)、沈没(2集)、磨擦面(1集)、切き目	39 11	
119	甑形器	甕	A011	-	B・IIIb	(31.8)	-	(6.8)	高麗寺2号窯式～ 新戸10号窯式	内外面回転ナズ、内外面黄土塗布	39	
120	灰輪陶器	甕	A812	-	B・IIIb	-	(6.8)	(2.6)	大塚2号窯式	内面回転ナズ、外面回転ナズ。回転糸切り痕、 貼付高台	39	

表17 土器類観察表(4)

観 察 番 号	種別	器種	出土位置			口径	底径	器高	分類・時期等	備考	検 査 図	図 版
			グリッド	遺構名	層位							
121	民権陶器	碗	AP12	-	Ⅱ・Ⅲa	-	(7.0)	(2.7)	大塚2号窯式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、貼付高台	39	
122	民権陶器	碗	AL15	-	Ⅱ・Ⅲa	-	(5.6)	(2.8)	虎塚山1号窯式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台、内面に重ね焼き痕あり	39	
123	民権陶器	碗	AR12	-	Ⅱ・Ⅲa	(14.4)	(8.0)	3.9	虎塚山1号窯式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、貼付高台	39	
124	民権陶器	碗	BM9	-	Ⅱ・Ⅲa	-	(5.5)	(1.7)	丸石2号窯式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転糸切り痕、貼付高台、底部外面磨き「口(貯)々」	39 12	
125	民権陶器	碗	AR15	-	Ⅱ・Ⅲa	-	(8.0)	(2.6)	古代寺窯式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転糸切り痕、貼付高台	39	
126	山茶碗	碗	AN15	-	Ⅱ・Ⅲa	-	(5.2)	(2.2)	白土原1号窯式	内面回転ナデ、静止指ナデ、外面回転ナデ、貼付高台	39	
127	山茶碗	碗	AR16	-	Ⅱ・Ⅲa	-	(5.2)	(1.9)	白土原1号窯式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転糸切り痕、貼付高台、輪轆痕	39	
128	山茶碗	碗	AN15	-	Ⅱ・Ⅲa	-	(5.4)	(2.1)	明和1号窯式	内面回転ナデ、静止指ナデ、外面回転ナデ、回転糸切り痕、貼付高台、輪轆痕、内面自然磨付着	39 12	
129	山茶碗	小皿	AP13	-	Ⅱ・Ⅲa	(10.6)	(7.4)	2.2	丸石3号窯式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転糸切り痕	39	
130	山茶碗	小皿	AL17	-	Ⅱ・Ⅲa	(8.6)	(5.4)	1.6	大塚1号窯式～ 釜ノ越3号窯式	内面回転ナデ、静止指ナデ、外面回転ナデ、回転糸切り痕	39	
131	山茶碗	片口鉢	AR13	-	Ⅱ・Ⅲa	-	-	(4.3)	尾張型第6型式	内外面回転ナデ、口縁部に沈線(1条)	39	
132	山茶碗	片口鉢	BM6	-	Ⅱ・Ⅲa	-	-	(7.6)	尾張型第9型式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転ヘラケズリ、輪轆痕	39	
133	山茶碗	片口鉢	AP12	-	Ⅱ・Ⅲa	-	-	(2.6)	尾張型第10型式	内外面回転ナデ	39 12	
134	土師器	内耳罐	BM6	-	Ⅱ・Ⅲa	(24.0)	-	(3.4)	B3類	内外面ヨコナデ	40 12	
135	陶器	跗瓦	AR15	-	Ⅱ・Ⅲa	-	-	(2.2)	古瀬戸後期	内面回転ナデ、跗目、外面回転ナデ、内面施釉(灰釉)	40 12	
136	陶器	跗耳壺	AR14	-	Ⅱ・Ⅲa	-	-	(3.8)	古瀬戸中期	内面ナデ、輪轆痕、外面ナデ、内面沈線(4条)	40	
137	陶器	播鉢	AR16	-	Ⅱ・Ⅲa	-	-	(2.3)	古瀬戸後IV期古	内外面回転ナデ、外面に沈線(2条)	40 12	
138	陶器	播鉢	AL16	-	Ⅱ・Ⅲa	-	-	(3.0)	大塚第1段階	内外面回転ナデ、横目(9条)	40 12	
139	陶器	播鉢	AL17	-	Ⅱ・Ⅲa	(20.0)	-	(3.7)	大塚第3段階前半	内外面回転ナデ、内外面施釉(黄釉)	40 12	
140	陶器	天目茶碗	AL16	-	Ⅱ・Ⅲa	(11.0)	-	(3.3)	豊原第2小期	内外面回転ナデ、内外面施釉(黄釉)	40 12	
141	陶器	志野丸皿	AL15	-	Ⅱ・Ⅲa	(14.0)	(9.0)	(3.1)	豊原第1小期	内面回転ナデ、外面回転ナデ、ケズリ出し高台、底部沈線、内外面施釉(白釉)、底部外面は磨削	40	
142	陶器	丸皿	AL16	-	Ⅱ・Ⅲa	(10.0)	(7.0)	2.7	豊原 第2小期～第3小期	内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転ケズリ、ケズリ出し高台、内外面施釉(灰釉)	40 12	
143	磁器	染付漆香	AN14	-	Ⅱ・Ⅲa	(9.6)	-	(4.3)	豊原 第3小期～第10小期	内外面回転ナデ、呉須による染付	40 12	
144	陶器	播鉢	BM6	-	Ⅱ・Ⅲa	-	-	(3.7)	豊原第1小期	内外面回転ナデ	40 12	
145	土製品	製塩土器	AR11	-	Ⅱ・Ⅲa	長(4.1)	幅 (1.55) 高さ (1.5)	-	7世紀代	内外面磨研のため調整不明	40 12	
146	須恵器	开高A	AK15	-	Ⅲa	(12.7)	-	2.7	IV期第1小期	内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転ヘラケズリ、縦定珠つまる貼付	41 13	
147	須恵器	無台坪	AJ16	-	Ⅲa	-	(6.8)	(1.7)	IV期 第1小期～第3小期	内面回転ナデ、外面回転ナデ、ヘラ切り	41	
148	須恵器	有台坪	AL16	-	Ⅲa	-	(13.6)	(1.2)	晩周2号窯式～ 新戸10号窯式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ、貼付高台	41	
149	須恵器	有台盤	AJ16	-	Ⅲa	(17.4)	-	(1.5)	新戸10号窯式	内外面回転ナデ	41	
150	須恵器	フラスコ型	AR16	-	Ⅲa	-	-	(10.0)	岩崎17号窯式	内面回転ナデ、しぼり瓶、外面回転ナデ、沈線(2条)、内外面自然磨付着	41 13	
151	須恵器	長頸瓶	AJ16	-	Ⅲa	-	8.8	(1.9)	高蔵寺2号窯式～ 新戸10号窯式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、貼付高台	41	
152	民権陶器	碗	AL16	-	Ⅲa	-	(6.5)	(2.1)	大塚2号窯式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	41	
153	民権陶器	碗	AR17	-	Ⅲa	-	(7.6)	(4.2)	丸石2号窯式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、貼付高台、内面に重ね焼き痕	41 13	
154	民権陶器	碗	AN16	-	Ⅲa	-	(5.8)	(3.2)	明和27号窯式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転糸切り痕、貼付高台	41	
155	山茶碗	碗	AN16	-	Ⅲa	-	(6.0)	(1.9)	尾張型第5型式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、貼付高台	41	
156	山茶碗	碗	AK16	-	Ⅲa	-	(5.7)	(2.6)	豊原1号窯式	内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転糸切り痕、貼付高台、輪轆痕、内面に重ね焼き痕	41	
157	山茶碗	碗	AN16	-	Ⅲa	-	(4.4)	(1.8)	大塚大塚4号窯式	内面回転ナデ、静止ナデ、外面回転ナデ、回転糸切り痕、横目沈線、貼付高台、輪轆痕	41 13	

表18 土器類観察表(5)

掲載番号	種別	器種	出土位置			口径	底径	器高	分期・時期等	備考	種別	図版
			グリッド	遺構名	層位							
158	山形甕	甕	A316	-	Ⅱa	(12.4)	(4.8)	(4.9)	大器類14号室式	内面凹転ナブ、外面凹転ナブ。回転糸切り痕、胎付高付。輪紋痕	41	
159	山形甕	甕	A316	-	Ⅱa	(10.4)	(3.8)	(2.6)	生田2号室式	内面凹転ナブ、外面凹転ナブ。回転糸切り痕	41	13
160	山形甕	小皿	A116	-	Ⅱa	(8.2)	(4.4)	(1.4)		内面凹転ナブ、外面凹転ナブ。回転糸切り痕	41	
161	山形甕	小皿	A116	-	Ⅱa	(7.4)	(4.4)	1.2	大器類1号室式～ 器ノ最3号室式	内面凹転ナブ、外面凹転ナブ。回転糸切り痕	41	
162	陶器	折縁深皿	A316	-	Ⅱa	-	(12.0)	(5.3)	古瀬戸産IV期古	内面凹転ナブ、外面凹転ナブ。回転ヘラケズリ、胎付痕、内外面胎輪(欠輪)	41	13
163	陶器	丸鍋	A316	-	Ⅱa	-	(6.0)	(1.4)	惣室 第3小房～第4小房	内面凹転ナブ、外面凹転ナブ。回転ヘラケズリ、ケズリ出し高付、内面胎輪(欠輪)	41	13
164	陶器	志野丸皿	A116	-	Ⅱa	-	(7.8)	(1.1)	惣室 第1小房～第2小房	内面凹転ナブ、外面凹転ナブ。回転ヘラケズリ、ケズリ出し高付、内外面胎輪(白輪)	41	13
165	青磁	甕	A116	-	Ⅱa	-	-	(2.3)	龍泉窯系D類	内外面凹転ナブ。違舂文	41	13
166	灰志郎	甕	-	-	I	-	-	(3.0)	時期不明	内面凹転ナブ、外面凹転ナブ。直紋文(2条)、沈線(1条)、外面黄土塗布	41	13
167	灰輪陶器	段皿	-	-	I	(13.3)	(5.8)	2.5	大器2号室式	内面凹転ナブ、外面凹転ナブ。回転糸切り痕、胎付高付、内外面欠輪跡(掛け、内面重ね焼き痕)	41	13
168	山形甕	小皿	-	-	I	7.9	4.9	2.1	明和1号室式～ 大器4号室式	内面凹転ナブ、胎止ナブ、外面凹転ナブ、回転糸切り痕	41	
169	白磁	甕	B74	-	埋土 遺構時	-	-	(2.2)	時期不明	内外面凹転ナブ	41	13

表19 石器観察表

掲載番号	器種	出土位置			長さ	幅	厚さ	重さ	材質	備考	種別	図版
		グリッド	遺構名	層位								
60	刀	A312	SK88	1	4.4	3.5	1.1	16.7	チタ		28	10

表20 木製品観察表

掲載番号	分類群	器種	出土位置			長さ	底面径	上部径	木取り	樹種	形状・特徴	種別	図版
			グリッド	遺構名	層位								
1	埴輪部材	柱根	AP11	SR2-P1	1	38.9	7.6	7.6	芯持 丸木材	側面は全体的に欠損、磨食しており、加工痕は確認できない。上部2ヵ所、磨の痕跡あり。年輪は1cmあたり10本である。	12	14	
2	埴輪部材	柱根	BQ10	SR2-P4	1	35.0	10.2	12.1	芯持 丸木材	側面は一部欠損しており、側面上部は磨食しているため、側面の加工痕は確認できない。底部には加工痕が見られ、区画線痕、刃先痕、刃端も認められる。年輪は1cmあたり14本である。	12	14	
4	埴輪部材	柱根	AS10	SR3-P2	1	33.0	9.6	13.9	芯持 丸木材	磨食が著しく、側面、底面とも加工痕は不明である。年輪は1cmあたり4本である。	14	14	
5	埴輪部材	柱根	AS10	SR4-P1	1	41.5	12.5	12.3	芯持 丸木材	芯部は空洞であり、全体としてやせている。側面にはわずかに加工痕が確認できる。年輪は1cmあたり4本である。	16	14	
6	埴輪部材	柱根	AS10	SR4-P4	2	40.3	11.4	13.2	芯持 丸木材	磨食が著しく、側面、底面ともに加工痕は不明である。年輪は1cmあたり2本である。	16	14	
7	埴輪部材	柱根	AS10	SP1	2	29.8	7.9	17.2	平割材	側面は全体的に磨食しており、加工痕は確認できない。底部には、区画線痕と刃先痕が認められる。年輪は1cmあたり10本である。	17	14	
10	埴輪部材	柱根	BA9	SP5	2	56.6	12.6	15.1	芯持 丸木材	芯部は一部磨食している。加工痕は確認できない。底面に区画線痕、刃先痕、刃端痕が認められる。断面は切り位置では12角形であり、もととは手厚により面ごとに磨食されていた可能性がある。年輪は1cmあたり9本である。	18	14	
29	工具	槌柄	AR9-AR12	SR8	4	38.8	6.5	3.5	芯志 附出材	底部欠損。底面は欠損している。横断面と上部がほぼ等しい長さであり、断面の寸法の6年程度に達していることから、使用痕と考えられる。上端部右側に区画線痕や加工痕が確認できるが、それ以外はやせており、確認できない。年輪は1cmあたり12本である。	21	14	

第4章 自然科学分析

第1節 分析の概要と結果

本節では、次節以降に記載する自然科学分析を実施した経緯と、結果の概要及び考察を述べる。

1 出土木製品の放射性炭素年代測定（第2節）

実施の経緯 分析対象とした木製品は7点である。5点は掘立柱建物（SB2～SB4）を構成する柱穴から出土した柱根で、2点は柱穴（SP1、SP5）から出土した柱根である。これらの柱根が出土した掘立柱建物及び柱穴は古代以前の遺構と考えられ、遺跡の土地利用状況を考える上で重要な資料である。そのため、柱根の分析を実施し、遺構が機能した時期を推定する一助とするため放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した。

結果の概要と考察 SB2ではP1の柱根から7世紀中頃～8世紀後半、P4の柱根から7世紀後半～8世紀後半の測定結果が得られ、ほぼ同じ時期のものであることが明らかとなった。P1、P4の柱根が古木効果の影響を受けていることを踏まえると、SB2は8世紀代の掘立柱建物と考える。SB3ではP2の柱根から7世紀中頃～8世紀後半の測定結果が得られた。P1からは須恵器の有台環が出土しており、時期は8世紀第2四半期～第3四半期を示す。古木効果の影響を受けていることを踏まえ、出土遺物の型式も考慮すると、SB3は8世紀第2四半期～8世紀後半頃の掘立柱建物と考える。SB4ではP1、P4の柱根とも7世紀後半～8世紀後半の測定結果が得られ、ほぼ同じ時期のものであることが明らかとなったことから、SB4は7世紀後半～8世紀後半頃の掘立柱建物と考える。SB3とSB4は重なり合う位置関係にあることから、SB4、SB3の順に建てられた可能性が考えられる。SP1の柱根は6世紀中頃～7世紀中頃の測定結果が得られた。当初、SP1はSB3を構成する柱穴と考えていたが、測定結果の時期差があることから、単独の柱穴であると判断した。SP5の柱根は6世紀後半～7世紀中頃の測定結果が得られた。1層から須恵器の坏蓋Aが出土しており、時期は8世紀第2四半期を示す。しかし、1層は別遺構であった可能性もあることから、SP5の時期は柱根の測定結果の6世紀後半～7世紀中頃と考える。SP1、SP5はともに発掘区の端に位置することから、発掘区外に延びる何らかの施設を構成していた柱穴の可能性がある。

2 出土木製品の樹種同定（第3節）

実施の経緯 分析対象とした木製品は8点（柱根7点、横樋1点）である。木製品の器種毎の木材利用のあり方等を検討するため、同定を実施した。

結果の概要と考察 SB2の2点の柱根とSP1の柱根はカヤ、SB3とSB4の3点の柱根はクリが用いられていることが判明した。カヤ、クリは重硬で耐久性が高いことから、掘立柱建物を建てる上で意図的に樹種を選択した可能性がある。SP5の柱根はコウヤマキが用いられていることが判明した。コウヤマキの切削の容易さ、耐水性の強さを生かして柱材として樹種を選択した可能性がある。SB8の横樋にはヒノキが用いられていたことが判明した。ヒノキは真つすぐに伸び、加工性が良いことや強度が強い木材であることから、工具の製作として適していたと考える。

第2節 出土木製品の放射性炭素年代測定

1 はじめに

岐阜県瑞浪市の高屋遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。分析は、伊藤茂、佐藤正教、廣田正史、山形秀樹、Zaur Lomtadize、小林克也（株式会社バレオ・ラボ）が担当した。

2 試料と方法

試料は、柱穴に残る柱根7点で、SB2-P1の試料No. 1 (PLD-37265)、SB2-P4の試料No. 2 (PLD-37266)、SB3-P2の試料No. 3 (PLD-37267)、SB4-P1の試料No. 4 (PLD-37271)、SB4-P4の試料No. 5 (PLD-37270)、SP1の試料No. 6 (PLD-37268)、SP5の試料No. 7 (PLD-37269)である。いずれの柱根も、最終形成年輪は残っていないかったが、試料No. 4～7には辺材部が残っていた。

発掘調査所見によれば、試料No. 1と2、試料No. 4と5は、それぞれ近接して検出されており、同一の掘立柱建物跡の柱根と考えられている。時期については、いずれも古代の遺構と考えられている。測定試料の情報、調製データは表21のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（バレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹³C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表21 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-37265	試料No. 1 遺物No. 1 遺構: SB 2-P 1 層位: 1	種類: 生材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 器種: 柱根 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-37266	試料No. 2 遺物No. 2 遺構: SB 2-P 4 層位: 1	種類: 生材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 器種: 柱根 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-37267	試料No. 3 遺物No. 4 遺構: SB 3-P 2 層位: 1	種類: 生材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 器種: 柱根 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-37271	試料No. 4 遺物No. 5 遺構: SB 4-P 1 層位: 1	種類: 生材 試料の性状: 辺材部 器種: 柱根 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-37270	試料No. 5 遺物No. 6 遺構: SB 4-P 4 層位: 2	種類: 生材 試料の性状: 辺材部 器種: 柱根 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-37268	試料No. 6 遺物No. 7 遺構: SP 1 層位: 2	種類: 生材 試料の性状: 辺材部 器種: 柱根 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-37269	試料No. 7 遺物No. 10 遺構: SP 5 層位: 2	種類: 生材 試料の性状: 辺材部 器種: 柱根 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

3 結果

表 22 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図 54 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal14.3 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表 22 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-37265 SB 2-P 1 試料No. 1	-26.57 \pm 0.18	1339 \pm 20	1340 \pm 20	656-678 cal AD (68.2%)	649-691 cal AD (92.5%) 751-761 cal AD (2.9%)
PLD-37266 SB 2-P 4 試料No. 2	-25.93 \pm 0.20	1302 \pm 21	1300 \pm 20	667-710 cal AD (47.5%) 746-764 cal AD (20.7%)	662-722 cal AD (65.3%) 740-768 cal AD (30.1%)
PLD-37267 SB 3-P 2 試料No. 3	-27.27 \pm 0.16	1313 \pm 20	1315 \pm 20	663-690 cal AD (54.8%) 750-761 cal AD (13.4%)	659-715 cal AD (73.5%) 743-766 cal AD (21.9%)
PLD-37271 SB 4-P 1 試料No. 4	-26.48 \pm 0.21	1280 \pm 21	1280 \pm 20	686-716 cal AD (38.2%) 743-766 cal AD (30.0%)	672-770 cal AD (95.4%)
PLD-37270 SB 4-P 4 試料No. 5	-28.44 \pm 0.16	1290 \pm 21	1290 \pm 20	677-712 cal AD (41.7%) 745-764 cal AD (26.5%)	667-728 cal AD (60.2%) 737-769 cal AD (35.2%)
PLD-37268 SP 1 試料No. 6	-25.94 \pm 0.18	1486 \pm 20	1485 \pm 20	561-603 cal AD (68.2%)	543-625 cal AD (95.4%)
PLD-37269 SP 5 試料No. 7	-25.86 \pm 0.21	1453 \pm 20	1455 \pm 20	596-639 cal AD (68.2%)	571-646 cal AD (95.4%)

4 考察

以下、 2σ 暦年代範囲（確率 95.4%）に着目して、暦年代の古い順に結果を整理する。

SP 1 の試料 No. 6 (PLD-37268) は 543-625 cal AD (95.4%)、SP 5 の試料 No. 7 (PLD-37269) は 571-646 cal AD (95.4%) で、6 世紀中頃～7 世紀中頃におさまる暦年代を示した。これは、古墳時代後期～飛鳥時代に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死若しくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。この 2 試料は、最終形成年輪は残っていなかったが、辺材部が残っており、測定結果は試料の木が実際に枯死若しくは伐採された年代に近い年代を示すと考えられる。

SB 2-P 1 の試料 No. 1 (PLD-37265) は 649-691 cal AD (92.5%) 及び 751-761 cal AD (2.9%)、SB 2-P 4 の試料 No. 2 (PLD-37266) は 662-722 cal AD (65.3%) 及び 740-768 cal AD (30.1%)、SB 3-P 2 の試料 No. 3 (PLD-37267) は 659-715 cal AD (73.5%) 及び 743-766 cal AD (21.9%)、SB 4-P 1 の試料 No. 4 (PLD-37271) は 672-770 cal AD (95.4%)、SB 4-P 4 の試料 No. 5 (PLD-37270) は 667-728 cal AD (60.2%) 及び 737-769 cal AD (35.2%) で、7 世紀中頃～8 世紀後半におさまる暦年代を示した。これは、飛鳥時代～奈良時代に相当する。

なお、試料 No. 4 と 5 は辺材部が残っており、測定結果は実際に枯死若しくは伐採された年代に近い年代を示すと考えられる。試料 No. 1～3 は、最終形成年輪が残っていなかったため、測定結果は古木効果を受けていると考えられ、実際に枯死若しくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であったと考えられる。発掘調査所見では、試料 No. 1 と 2、試料 No. 4 と 5 が同一の掘立柱建物の柱穴と考えられているが、この 4 点の測定結果はいずれも飛鳥時代～奈良時代の暦年代を示しており、整合的であった。また、試料 No. 3 は試料 No. 4、5 に近接しており、同一の掘立柱建物の柱穴である可能性も考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

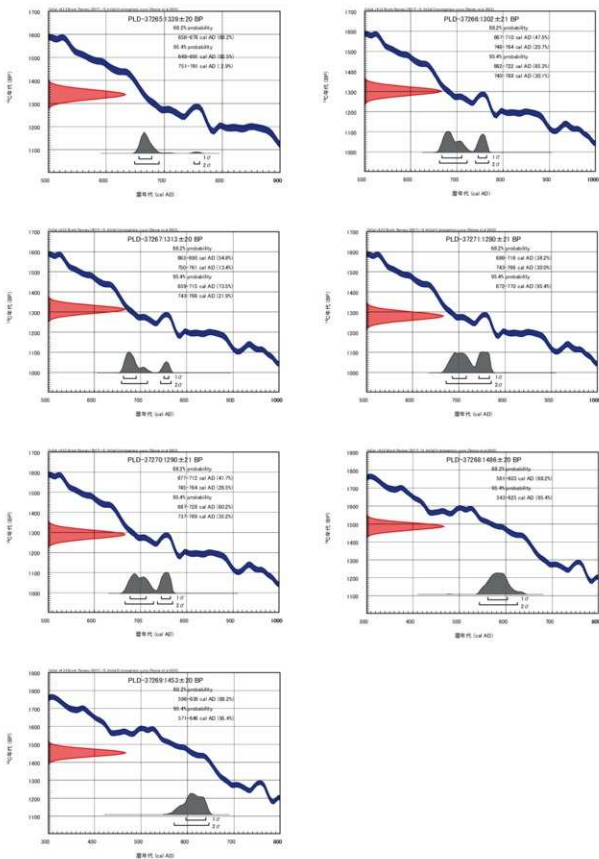


图 54 曆年較正結果

第3節 出土木製品の樹種同定

1 はじめに

岐阜県瑞浪市の高屋遺跡から出土した木製品の樹種同定を行った。分析は、大谷直矢（株式会社イビソク）が担当した。小林克也氏（株式会社バレオ・ラボ）に技術協力を得た。

2 試料と方法

試料は、SB2-P1、SB2-P4、SB3-P2、SB4-P1、SB4-P4、SP1、SP5から出土した柱根と、SD8から出土した横樋の、計8点の木製品である。SP1、SP5は古墳時代後期から終末期、ほかは古代の遺構であると考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡及び写真撮影を行った。

3 結果

同定の結果、針葉樹ではコウヤマキとカヤ、ヒノキの3分類群、広葉樹ではクリ1分類群の、計4分類群がみられた。カヤとクリが各3点で、コウヤマキとヒノキが各1点であった。同定結果を表23に、一覧を表24に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、写真2に光学顕微鏡写真を示す。

(1) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科 写真2 1a-1c(No. 7)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1～5列となる。分野壁孔は窓状となる。

コウヤマキは温帯から暖帯にかけて隔離分布をしている1科1属1種の常緑高木の針葉樹で、日本の固有種である。材はやや軽軟、切削などは容易で、水湿に耐朽性がある。

(2) カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. イチイ科 写真2 2a-2c(No. 2)、3a-3c(No. 6)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、1～5細胞高である。分野壁孔は小型のヒノキ型で、1分野に2～4個みられる。また、仮道管の内壁には2本1対のらせん肥厚がみられる。

カヤは暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は比較的重硬で弾力性に富み、切削等の加工は容易で、水湿によく耐える。

(3) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 写真2 4a-4c(No. 8)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ1～15列である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、1分野に2個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、

表23 樹種同定結果

樹種/器種	横樋	柱根	合計
コウヤマキ		1	1
カヤ		3	3
ヒノキ	1		1
クリ		3	3
合計	1	7	8

強度に優れ、耐朽性が高い。

(4) クリ *Castanea crenata* Siebold, et Zucc. ブナ科 写真2 5a-5c(No. 4), 6a(No. 3)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

表 24 高屋遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧

試料No.	遺物No.	遺構No.	層位	器種	樹種	木取り	時期
1	1	SB 2-P 1	1	柱根	カヤ	芯持丸木	古代
2	2	SB 2-P 4	1	柱根	カヤ	芯持丸木	古代
3	4	SB 3-P 2	1	柱根	クリ	芯持丸木	古代
4	5	SB 4-P 1	1	柱根	クリ	芯持丸木	古代
5	6	SB 4-P 4	2	柱根	クリ	芯持丸木	古代
6	7	SP 1	2	柱根	カヤ	半割	古墳時代後期から終末期
7	10	SP 5	2	柱根	コウヤマキ	芯持丸木	古墳時代後期から終末期
8	29	SD 8	4	横樋	ヒノキ	芯去削出	古代

4 考察

横樋は、ヒノキであった。ヒノキは真つすぐに生育する、加工性の良い樹種である(伊東ほか, 2011)。なお、飛騨市の杉崎廃寺跡では、古代のサクラ属製の横樋が1点確認されている(伊東・山田編, 2012)。

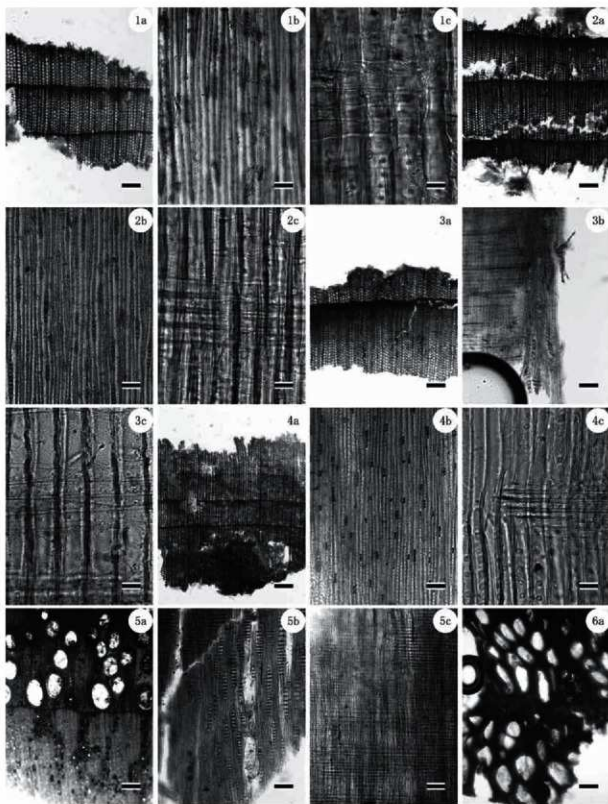
柱根は、コウヤマキとカヤ、クリであった。コウヤマキとカヤはスギと同様、真つすぐで加工性の良い樹種であり、共に水湿に強い。また、クリは堅硬な樹種である(伊東ほか, 2011)。飛騨市の杉崎廃寺跡では、古代の柱にヒノキとクリが利用されており(伊東・山田編, 2012)、堅硬なクリと、真つすぐで軽軟な針葉樹を利用するという点では、杉崎廃寺跡と類似する傾向がみられた。

引用文献

平井信二(1996)木の百科一解説編一。642p, 朝倉書房。

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌。238p, 海青社。

伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学—出土木製品用材データベース—。449p, 海青社。



1a-1c. コウヤマキ(No. 7)、2a-2c. カヤ(No. 2)、3a-3c. カヤ(No. 6)、4a-4c. ヒノキ(No. 8)、5a-5c. クリ(No. 4)、6a. クリ(No. 3)

a: 横断面(スケール=250 μm)、b: 接線断面(スケール=100 μm)、c: 放射断面(スケール=1-4: 25 μm・5: 100 μm)

写真2 高屋遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

第5章 総括

今回の調査では、縄文時代、古墳時代から中世までの遺構を検出した。また、発掘区東部の谷状地形では、江戸時代前期以降の人為的な堆積や水田開発に関わると考えられる盛土を確認した。今回の調査で明らかとなった時期を中心に、7世紀以前、7世紀後半～8世紀後半、9世紀頃、中世、近世、現代の順に、当遺跡の土地利用の変遷について概観する。

1 7世紀以前

縄文時代の可能性のある遺構としてSK88が確認でき、遺物としてMF(60)が出土した。平成21年度に瑞浪市教育委員会によって実施された遺跡分布調査では、石棒1点の出土が確認されている¹⁾。弥生時代～古墳時代中期の遺構は確認できず、遺物としてⅡ層・Ⅲb層から高坏(73)や短頸壺(74)が出土したのみである。このことから、当遺跡では縄文時代～古墳時代中期までは土地利用がほとんどされていなかったと考えられる。

古墳時代後期・終末期の遺構として、柱穴2基、土坑1基を確認した。SP1、SP5には柱根が残存していた。SP1、SP5は掘立柱建物や櫓などを構成していた可能性があるが、共に発掘区の端に位置することから、建物としては確認できなかった。SK42からは、高坏の受部の破片(54)と脚部の破片(55)が出土した。柱根が残存する柱穴や土坑を確認したことから、当遺跡ではこの時期から土地利用が開始されたと考えられる。

2 7世紀後半～8世紀後半(図55)

今回の調査では、当該期の遺構を一番多く検出した。遺物についても同様であり、土師器甕、蓋坏、盤類、壺瓶類、墨書土器、製塩土器、柱根、横槌等の多器種が出土した。

当該期の遺構として、発掘区中央部を中心に掘立柱建物4棟、溝、土坑等を検出した。掘立柱建物群の梁行方位は約30°～約50°東に傾いており、特にSB3、SB4はほぼ同方向である。SB3、SB4は使用している部材の樹種が同じであり、重なり合う位置関係にある。また、遺構の時期の上限は、SB3は8世紀第2四半期、SB4は7世紀後半であることから、SB4、SB3の順に建てられた可能性が考えられる(第4章第1節)。

SD8は深さ約0.6mであり、今回の調査で検出した溝の中で一番深い溝であった。発掘区西壁土層断面から複数回の掘り直しの跡が確認できた。7世紀前半～8世紀末までの遺物が多数出土しており、他の遺構と比較して幅広い時期を示したことから、継続して利用されていたと考える。出土遺物は坏蓋A2点以外は接合しても完形とならなかったことから、溝に廃棄されたと考えられる。このSD8は東西方向に延び、SB1、SB2とSB3、SB4との間を分断しているように見えるが、SD8の主軸方位は掘立柱建物群の梁行方位とずれているため、掘立柱建物群を区画した溝とは考えにくい。SD8は方向が揃う遺構がなく、東端、西端がそれぞれ発掘区外となることから、この溝の性格については留保したい。しかしながら、当該期に掘立柱建物4棟を検出した他、溝、土坑から多数の遺物が出土したことから、当遺跡では7世紀後半以降には居住域として利用され、人々の活動が活発になっていったことが明らかとなった。

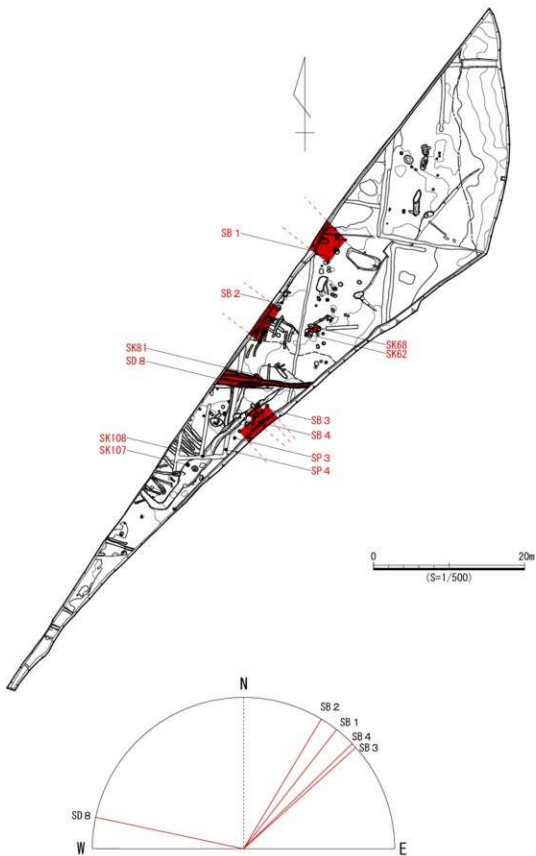


図 55 7世紀後半～8世紀後半の主な遺構配置図とその方位

3 9世紀頃(図56)

SD8埋没後の遺構として、発掘区中央部から南部にかけてSD7、SD9を確認した。SD7、SD9は合わせてコ字状となり、主軸方位が直交関係になることから、区画溝のような性格をもつと考えられる。区画内には当該期の遺構は確認できず、何を区画したのかについて明らかにするには至らなかった。当該期には、引き続き人々の活動は確認できるものの、活動の中心地は発掘区外の異なる場所に移動したと考えられる。

4 中世(図57)

当該期の遺構として耕作痕跡4箇所、溝2条、土坑2基を確認した。数は少ないもののSK36は発掘区北部、SD14、SD15、SK111は発掘区南部、SN1～SN4は発掘区中央部から南西部にかけて検出し、発掘区全域にその範囲は広がっている。SN1～SN4の重複関係やそれぞれの主軸方位から、①SN2が機能した時期、②SN2が埋没してSN1及びSN3が機能した時期、③SN4が機能した時期の3つの時期があったと考える。耕作痕跡の主軸方位は、古代前半の掘立柱建物や区画溝と並行若しくは直交に近い関係にあることから、古代前半の地割を活かしていると言える。古代前半には居住域として利用していた土地が、古代後半に一旦衰退した後、中世となる段階で耕地として再び利用されていったことが窺える。

5 近世(図58)

発掘区東部の谷状地形では、Ⅲa層の堆積を確認した。Ⅲa層の下位から近世陶器、上位から須恵器や山茶碗が出土していることから、谷状地形は人為的に埋められたと考える。出土遺物の最新型式から、Ⅲa層は江戸時代前期以降の堆積と考えられる。また、谷状地形を埋めた上面から南西-南東方向に延びるL字状の盛土を確認した。この盛土の東端は、発掘区東壁土層断面のC-C'断面に確認できる。以上のことから、谷状地形を埋め耕地を拡大したと考えられる。盛土の主軸方位は古代～中世へと続く地割と一致し、古代～近世にかけて同じ地割が採用されていたことが明らかとなった。

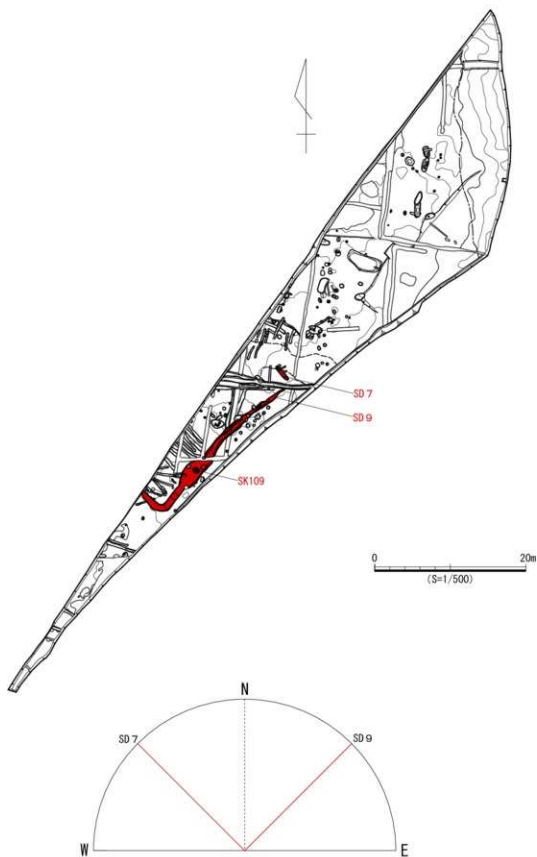


図 56 9世紀頃の主な遺構配置図とその方位

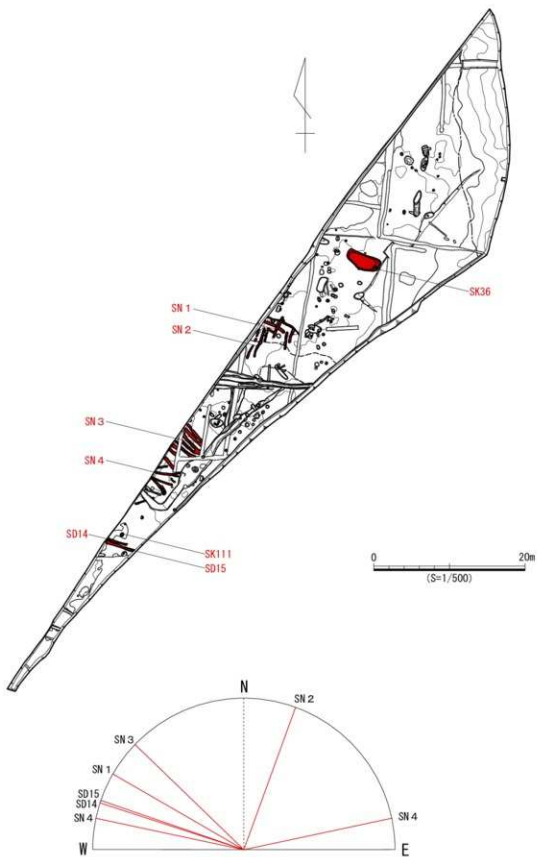


図 57 中世の主な遺構配置図とその方位

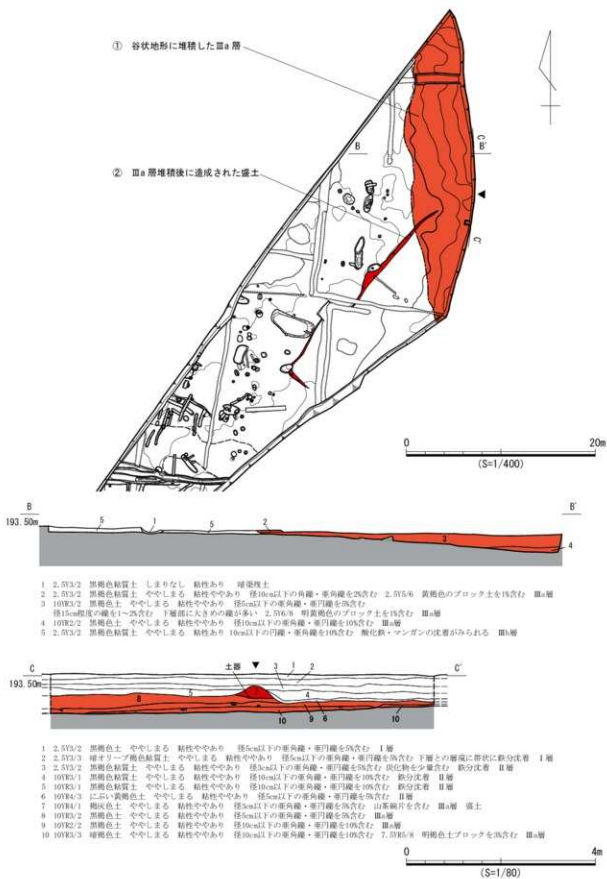


図 58 近世に堆積したⅢa層と盛土

6 現代（写真3）

近世以降現在まで、当遺跡は耕地として土地利用されている。昭和22（1947）年に米軍が撮影した空中写真によると、南北方向、東西方向の区画が確認でき、発掘調査においても攪乱溝として検出されている。このことから、古代から近世まで続いていた北西方向、南東方向の地割から南北方向、東西方向の地割に変化したことが確認できる。



写真3 現代の地割（昭和22（1947）年米軍撮影 縮尺約1/2,500 USA-M725-No2-134）

注

- 1) 瑞浪市教育委員会2014『瑞浪市遺跡詳細分布調査報告書』

<引用・参考文献>

- 愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系
- 愛知県史編さん委員会 2010『愛知県史』資料編4 考古4 飛鳥～平安
- 愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系
- 伊藤秋男 1988「瑞浪市の古墳と古東山道」『瑞浪陶磁器資料館研究紀要』第4号、瑞浪市陶磁器資料館
- 伊藤隆夫・山田昌久 2012『木の考古学 出土品木製品用材データベース』、海青社
- 内堀信雄・井川祥子 1996「美濃における古代土師器煮炊具の様相」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕 そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 岐阜県教育委員会 1924『濃飛两国通史』
- 岐阜県教育委員会 2007『改訂版 岐阜県 遺跡地図』
- 斎藤孝正 1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年と他窯編年対比表」『須恵器修正図録 第3巻 東日本1 (ローマ)』、雄山閣
- 鈴木正貴 1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕 そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 太宰府市教育委員会 2000『太宰府市の文化財 第49集 大宰府条坊跡 XV-陶磁器分類編-』
- 名古屋博物館 1994『発掘された東海の古代 律令制下の国々』
- 奈良文化財研究所 1993『木器修正図録-近畿原始篇-』
- 早野浩二 2003「東海・中部地方の土器」『考古資料大観 第3巻 弥生・古墳時代 土器3 (ローマ)』、小学館
- 藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター
- 瑞浪市 1974『瑞浪市史』歴史編
- 瑞浪市 2008『歴史の道 中山道保存整備事業報告書』
- 瑞浪市教育委員会 1981『瑞浪市中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 瑞浪市教育委員会 2009『益見遺跡—下益見土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 瑞浪市教育委員会 2014『瑞浪市遺跡詳細分布調査報告書』
- 瑞浪市教育委員会 2018『瑞浪市市内遺跡調査報告書—平成12・17～19年度—』
- 瑞浪市教育委員会 2018『瑞浪市市内遺跡調査報告書—平成20～22年度—』
- 瑞浪市陶磁器資料館 2011『瑞浪市歴史資料集 第1集』
- 瑞浪市陶磁器資料館 2012『薬師寺1200年展』
- 山内伸浩 2008「東濃地域における灰軸陶器・山茶碗生産の様相—窯の分布とその変遷からの視点—」『日本考古学協会 2008年度愛知大会研究発表資料集』、日本考古学協会 2008年度愛知大会実行委員会
- 横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4、九州歴史資料館
- 渡邊博人 1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』、各務原市教育委員会

渡邊博人 1996 「美濃の後期古墳出土須恵器の様相—蓋坏の型式設定とその編年試案—」『美濃の考古学』創刊号、「美濃の考古学」刊行会



発掘区全景 (南西から)



発掘区全景 (南東が上)

図版2 遺構(2)



発掘区北部 (南西から)



発掘区南部 (北東から)

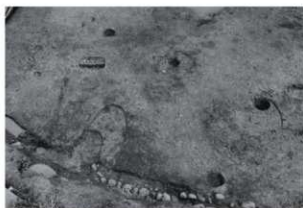


発掘区中央部 (北西が上)



SB3・SB4 完掘状況 (北東から)

図版4 遺構(4)



SB1 完掘状況 (北西から)



SB2 完掘状況 (南西から)



SB1-P4 土層断面 (北から)



SB2-P1 柱根出土状況 (北西から)



SB2-P3 土層断面 (西から)



SB2-P4 完掘状況 (西から)



SB3-P2 土層断面 (北西から)



SB3-P3 根石検出状況 (西から)



SB4-P1 土層断面 (北東から)



SB4-P4 土層断面 (北東から)



SP1 土層断面 (北東から)



SP5 土層断面 (西から)



SN1 完掘状況 (北西から)



SN2-D1~D3 完掘状況 (北東から)



SN2-D4 完掘状況 (北東から)



SN3-D1~D3・D6 完掘状況 (北西から)



SD8 完掘状況 (東から)



SD8 土層断面 (西から)



SD8 横掘出土状況 (南東から)



SD8 遺物出土状況 (南東から)



SD7 完掘状況 (南東から)



SD9 土層断面 (北東から)



SD9 遺物出土状況 (南東から)



SD9 完掘状況 (北東から)



SK42 完掘状況 (南から)



SK61 完掘状況 (北東から)



SK62 遺物出土状況 (北東から)



SK93 遺物出土状況 (南から)



SK108 遺物出土状況 (北西から)



SK109 遺物出土状況 (南西から)

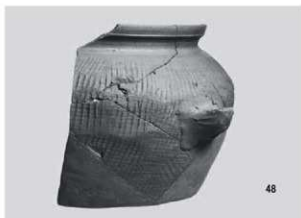
図版8 出土遺物(1)



SP 4 出土土器



SD 8 出土土器



SD9 出土土器



SK42 出土土器



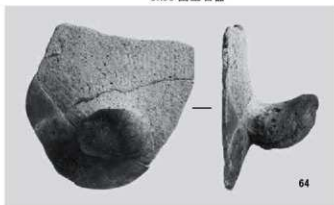
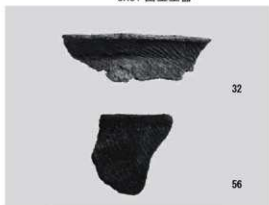
SK 出土土器



SK81 出土土器



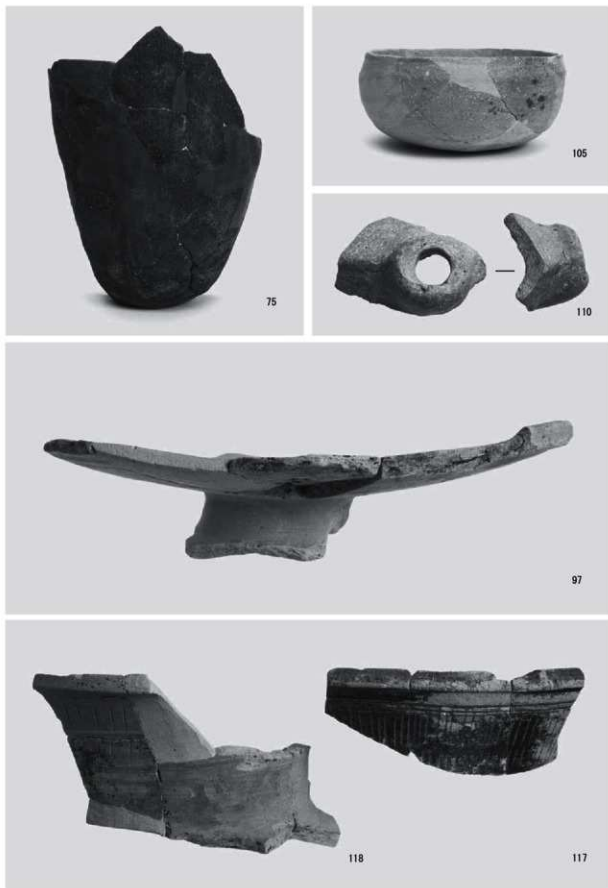
SK88 出土石器



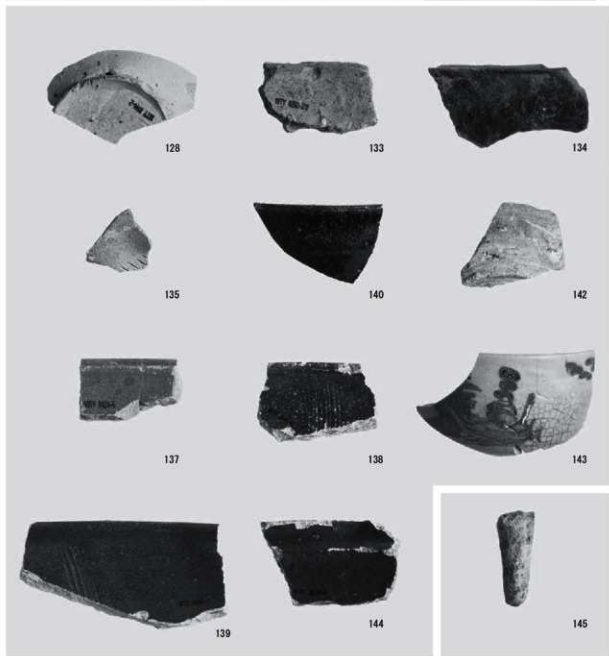
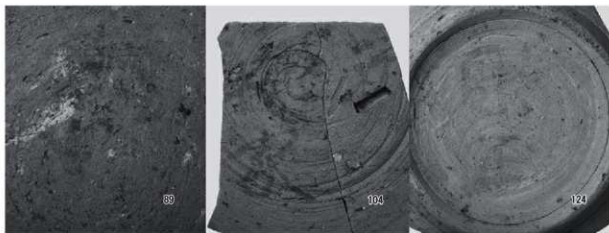
SN・SD・SK 出土土器



Ⅱ層・Ⅲb層出土土器(1)

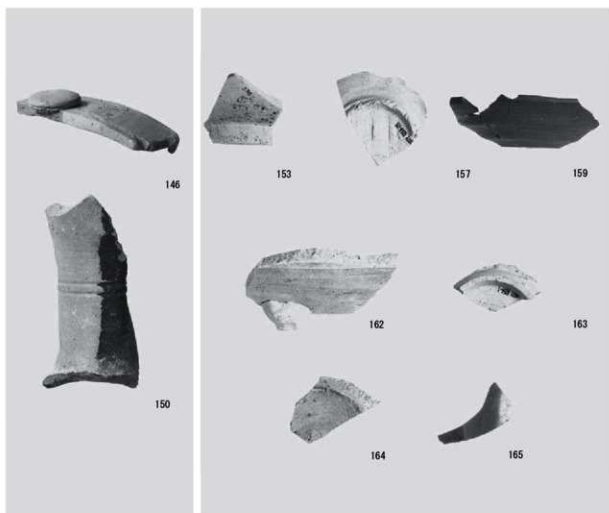


II層・III b層出土土器 (2)

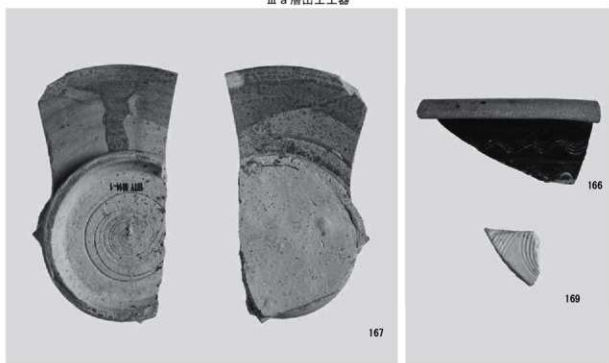


Ⅱ層・Ⅲb層出土土器(3)

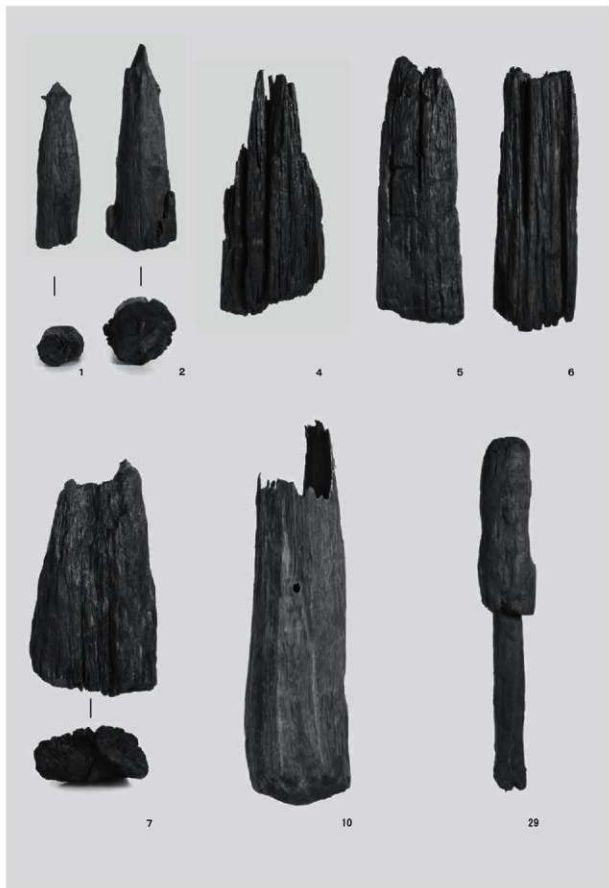
Ⅱ層・Ⅲb層出土土製品



Ⅲ a 層出土土器



I 層出土土器



報 告 書 抄 録

ふりがな	たかやいせき							
書名	高屋遺跡							
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書							
シリーズ番号	第149集							
編著者名	中野真吾							
編集機関	岐阜県文化財保護センター							
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL058-237-8550 FAX058-237-8551							
発行年月日	2021年3月5日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
高屋遺跡	岐阜県 瑞浪市 土岐町	21208	10134	35° 23' 33"	137° 16' 27"	20180423 ～20180809	1,196	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高屋遺跡	集落跡 散布地	縄文時代 古墳時代 古代 中世	掘立柱建物 柱穴 耕作痕跡 溝 土坑	4棟 6基 4箇所 18条 113基	土師器 須恵器 灰軸陶器 山茶碗 中近世陶磁器類 土製品 木製品	古代前半の掘立柱建物と区画溝、中世の耕作痕跡を検出。		
要 約	<p>高屋遺跡は、瑞浪市の中央部を東西に流れる土岐川の右岸に位置する、縄文時代、古墳時代後期から中世までの複合遺跡である。今回の発掘調査では古墳時代後期・終末期、古代、中世の遺構を検出した。7世紀後半から8世紀後半の遺構として掘立柱建物、柱穴、溝を、9世紀頃の遺構として区画溝を検出した。古代前半の遺物として多数の土師器や須恵器とともに木製品、土製品が出土した。以上のことから、当発掘区では古代前半は居住域として土地利用されていたと考えられる。10世紀前半の遺物として底部に「守 □□〔部カ〕家」と記した墨書土器が出土するなど、一般の集落では認められないような遺物も出土した。中世の遺構として耕作痕跡を検出したが、複数の重複関係や主軸方位があることから、何度も耕地として利用されていたと考えられる。近世になると耕地を広げるために発掘区東部の谷状地形を人為的に埋め、その上面に盛土を造成したことが判明した。なお、当発掘区では古代前半から近世にかけて、同じ地割が採用されている。</p>							

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第149集

高屋遺跡

2021年3月5日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1

印刷 もとすいんさつ株式会社